# 枯草菌における鉄硫黄クラスター生合成系の研究

## 2018年3月

埼玉大学理工学研究科 博士後期課程理工学専攻 生命科学コース

## 指導教員 高橋 康弘

15DB004 横山 奈央

略号

Fe-S	iron-sulfur、鉄硫黄
ISC	iron sulfur cluster
SUF	sulfur mobilization
NIF	nitrogen fixation
MVA	mevalonate、メバロン酸
MEP	2-C-methyl-D-erythritol-4-phosphate、2-C-メチル-D-エリトリトール-4-リン酸
PLP	pyridoxal-5'-phosphate、ピリドキサール-5'-リン酸
LB	Luria Bertani
Em	erythromycin、エリスロマイシン
Sp	spectinomycin、スペクチノマイシン
Nm	neomycin、ネオマイシン
Cm	chloramphenicol、クロラムフェニコール
IPTG	isopropyl α-D-1-thiogalactopyranoside、イソプロピル-α-チオガラクトピラノシド
PMVA	phosphomevalonate、ホスホメバロン酸
DPMVA	Diphosphomevalonate、ジホスホメバロン酸
IPP	isopentenyl diphosphate、イソペンテニルニリン酸
HMBPP	(E)-1-hydroxy-2-methyl-2-butenyl-4-diphosphatase
DMAPP	diphosphomevalonate
BGSC	Bacillus Gene Stock Center
Cyt	cytchrome、シトクロム
MQ	menaquinone、メナキノン
MQH <sub>2</sub>	menaquinol、メナキノール
Ар	ampicillin、アンピシリン
Gm	gentamicin、ゲンタマイシン
Km	kanamycin、カナマイシン
Тс	tetracycline、テトラサイクリン
MBGD	Microbial Genome Database for Comparative Analysis
PDB	Protein Data Bank

概要	1
序章	4
鉄硫黄(Fe-S)クラスターと Fe-S タンパク質	5
Fe-S クラスターの生合成系	6
— NIF マシナリー	7
— ISC マシナリー	8
— SUF マシナリー	11
— ISC/SUF のキメラ型生合成系:SUF 様マシナリー	16
本研究の目的とアプローチ	
第1章 枯草菌 suf 様オペロン破壊株の構築とその性質	21
1.1 序	22
1.2 材料および実験方法	23
1.2.1 枯草菌の suf 様オペロン破壊株の構築と培養条件	23
suf 様オペロン破壊株の栄養要求性の検討	24
suf 様オペロン破壊株の形質転換	24
1.2.2 プラスミドの構築	25
MVA 経路の遺伝子発現用プラスミド pBMV4 の構築	25
相補実験用プラスミド(pHCMC05 シリーズ)の構築	26
1.2.3 酵素活性の測定	
アコニターゼ活性の測定	28
コハク酸脱水素酵素の活性	29
グルタミン酸合成酵素の活性	30
リンゴ酸脱水素酵素の活性	31

1.3 結	₹	32
1.3.1	suf 様オペロン破壊株の構築	32
1.3.2	suf様オペロン破壊株の表現型(富栄養培地における生育)	35
1.3.3	<i>suf</i> 様オペロン破壊株における Fe-S 酵素の機能不全	36
1.3.4	suf 様オペロン破壊株の栄養要求性	37
1.3.5	suf 様オペロン破壊株の形質転換	39
1.4 考察	客 	42
1.4.1	SUF 様マシナリーは枯草菌で唯一の Fe-S クラスター生合成として機能する	42
1.4.2	suf 様オペロン破壊株の栄養要求性と Fe-S タンパク質の機能不全	43
1.4.3	suf 様オペロン破壊株におけるエネルギー代謝	45
1.4.4	Fe-S クラスター生合成系を持たない枯草菌	47
第2章 Fe	e-S クラスター生合成系の遺伝学的解析と進化的考察	49
2.1 序		50
2.2 材料	<b>科および実験方法</b>	51
2.2.1	菌株と培養条件	51
2.2.2	プラスミドの構築	51
	枯草菌相補実験用プラスミド(pHCMC05 シリーズ)の構築	51
	大腸菌相補実験用プラスミド(pBBR・pRK シリーズ)の構築	53
	Error prone PCR によるランダム変異の導入	55
2.2.3	lscU/SufU の系統解析	55
2.3 結5	₹	57
2.3.1	枯草菌の suf 様オペロン破壊株を用いた異種間相補解析	57
2.3.2	大腸菌変異株用いた異種間相補解析	60
2.3.3	SufB の種特異性を変化させるサプレッサー変異	62
2.3.4	枯草菌 SufU で保存されたアミノ酸の機能性	63
225	Iscl I/Suft I の分子系統解析	64

2.4 考察	69
2.4.1 枯草菌 SUF 様マシナリーにおける SufBCD 複合体の機能	69
2.4.2 枯草菌 SUF 様マシナリーにおける SufU の機能	71
2.4.3 IscU/SufU の機能分化と Fe-S クラスター生合成系の進化的変遷	74
2.5 今後の展望	78
参考文献	82

表

Table 1	本研究で使用した菌株	97
Table 2	本研究で使用したプラスミド	98
Table 3	本研究で使用したプライマー	100

## 义

Fig.	1	Fe-S クラスターの構造	. 103
Fig.	2	3 種類の Fe-S クラスター生合成マシナリーの作動モデル	. 104
Fig.	3	Fe-S クラスター生合成の成分の分布	. 105
Fig.	4	IscU / NifU / SufU のアミノ酸配列の比較	. 106
Fig.	5	大腸菌の SufBCD 複合体	. 107
Fig.	6	大腸菌と枯草菌の Fe-S クラスター生合成オペロンの比較	. 108
Fig.	7	枯草菌 suf 様オペロン破壊のストラテジー(1)	. 109
Fig.	8	枯草菌 suf様オペロン破壊のストラテジー(2)	. 110
Fig.	9	枯草菌 168 株の Fe-S タンパク質群	111
Fig.	10	2 種類のイソプレノイド生合成経路	112
Fig.	11	構築した枯草菌 suf様オペロンの破壊株	113
Fig.	12	コロニーPCR による suf 様オペロン破壊株の遺伝子型の確認	114
Fig.	13	suf 様オペロン破壊株の富栄養寒天培地における生育	. 115
Fig.	14	suf 様オペロン破壊株の液体培地における生育	116
Fig.	15	<i>su</i> f 様オペロン破壊株における Fe-S 酵素の活性	. 117
Fig.	16	suf 様オペロン破壊株の栄養要求性	. 118
Fig.	17	suf 様オペロン破壊株の形質転換	119
Fig.	18	枯草菌 ∆sufCDSUB株の相補実験	. 120
Fig.	19	枯草菌におけるヌクレオチドの生合成経路と関与する Fe-S 酵素	. 121
Fig.	20	枯草菌におけるイソロイシン、バリン、ロイシンの生合成経路と関与する Fe-S 酵素	. 122
Fig.	21	枯草菌における硫黄同化ならびに窒素同化経路と関与する Fe-S 酵素	. 123

Fig. 22	枯草菌におけるエネルギー代謝と関与する Fe-S 酵素	. 124
Fig. 23	枯草菌 suf 様オペロン破壊株の相補実験	. 125
Fig. 24	大腸菌 suf 欠失株の相補実験	. 126
Fig. 25	大腸菌 ΔiscS 株と ΔiscU 株を用いた異種間相補実験	. 127
Fig. 26	枯草菌 <i>sufB</i> 内のサプレッサー変異による大腸菌 Δs <i>ufB</i> 株の相補	. 128
Fig. 27	枯草菌 SufU 内の部位特異的変異の影響	. 129
Fig. 28	IscU / NifU / SufU とそれらの類似タンパク質の一次構造に基づいた系統樹	. 131
Fig. 29	IscU / NifU / SufU とそれらの類似タンパク質の一次構造の比較	. 133
Fig. 30	SufB の一次構造の比較	. 134
Fig. 31	SufC の一次構造の比較	. 135
Fig. 32	SufD の一次構造の比較	. 136
Fig. 33	種の壁を越える SufB 内のサプレッサー変異	. 138
Fig. 34	IscU / SufU / SufE の立体構造の比較	. 139
Fig. 35	SufB において SufE または SufU との相互作用が予想される領域の構造比較	. 140
Fig. 36	枯草菌の SufU と SufS における Zn 配位子の置換を介した相互作用	. 141
Fig. 37	枯草菌の SUF 様マシナリーの作動モデル	. 142
Fig. 38	IscU / SufU タンパク質の分子進化と Fe-S クラスター生合成系の変遷	. 143

謝辞	144
----	-----

概要

鉄硫黄 (Fe-S) タンパク質は、Fe-S クラスターをコファクターとして持つタンパク質 の総称で、エネルギー代謝から遺伝子の発現制御に至るまで、重要かつ多彩な生理機能 を担っている。これら Fe-S タンパク質の機能を支えているのは、Fe-S クラスターの生 合成系であり、これまでに3種類 (ISC、SUF、NIF マシナリー) が知られている。これ らのマシナリーはどれも、Fe-S クラスターを新規に組み立てて、それをアポタンパク質 まで受け渡すと考えられている。ただし、成分の構成が大きく異なっており、その作動 機構には多様性が見られる。

大腸菌は、iscSUA-hscBA-fdx オペロンと sufABCDSE オペロンにコードされる 2 種類の 生合成系、ISC マシナリーと SUF マシナリーを保持している。通常の生育条件では、 ISC マシナリーが主に Fe-S クラスター合成を担っているが、鉄飢餓や酸化ストレス条 件下では、SUF マシナリーが発現することが知られている。これらのマシナリーで、共 通しているのはシステイン脱硫黄酵素 (IscS/SufS) であり、硫黄原子のドナーとして、 クラスターの材料となる硫黄原子をそれぞれ、IscU/SufE に渡している。その後、ISC マシナリーでは、IscU において Fe-S クラスターが新規に形成されるのに対し、SUF マ シナリーでは、SufE が硫黄原子のキャリアとして SufBCD 複合体に硫黄原子を渡し、 この複合体で Fe-S クラスターが新規に形成されることが知られている。

一方、枯草菌などグラム陽性菌のゲノムには、*sufCDSUB*オペロンがコードされており、興味深いことに、この生合成系は、ISCマシナリーの成分である IscUと、SUFマシ ナリーの4成分 SufS、B、C、Dとのキメラ構成と推定される(SUF様マシナリーと呼 ぶ)。枯草菌 SufS は、大腸菌の IscS/SufS と相同なシステイン脱硫黄酵素で、硫黄原子 のドナーとして機能することが示されている。一方、枯草菌の SufU(IscU ホモログ) や SufBCD については、大腸菌のホモログと同様に機能すると考えると、SUF 様マシナ リーには Fe-S クラスターの新規形成部位が2か所存在することになる。ただし、SufBCD 複合体の精製が極めて困難なため、生化学的な解析は進んでいなかった。そこで、本研 究では、遺伝学的なアプローチで、枯草菌 SUF 様マシナリーの各成分の役割やマシナ リーとしての作動機構を解析することにした。

枯草菌の suf 様オペロンの遺伝子はどれも生存に必須なため、in vivo における解析も ほとんど進んでいなかった。枯草菌は 60 種類以上の Fe-S タンパク質を保持している が、それらの機能を洗い直したところ、生存に必須なものはイソプレノイド生合成系 (MEP 経路)の2つの Fe-S 酵素、IspG/IspH と推測できた。放線菌など一部のバクテ リアや真核生物では、Fe-S 酵素が関与しないメバロン酸(MVA)経路でイソプレノイ ドを合成している。そこで、枯草菌の MEP 経路を MVA 経路へ改変したところ、suf 様 オペロンの必須性を回避して、破壊株を構築することに初めて成功した。sufCDSUBの 5 種類の遺伝子それぞれの破壊株とオペロン全体の欠失株はどれも MVA に完全に依存 して生育した。また、これら破壊株における Fe-S 酵素(アコニターゼ、コハク酸脱水 素酵素、グルタミン酸合成酵素)の活性を測定したところ、どれも検出限界以下となっ た。さらに、suf 様オペロン破壊株では、バリン、イソロイシン、ロイシンなどのアミ ノ酸や、プリン・ピリミジンに要求性が見られ、これらの表現型から、それぞれの生合 成経路に含まれる Fe-S 酵素が機能していないことを確認した。したがって、枯草菌の Fe-S クラスター生合成には、suf 様オペロンにコードされる 5 成分全てが必要であるこ とが判明した。また、変異株の表現型から、枯草菌の Fe-S タンパク質群が全て機能で きなくても、それを補う代謝経路を用いることで生育できるようになることがわかった。

構築した枯草菌変異株に、大腸菌 isc / suf オペロンの関連遺伝子群を、また逆に、大腸菌変異株に、枯草菌の suf 様オペロンの関連遺伝子群を導入して、異種生物の成分間

 $\mathbf{2}$ 

での互換性を検討した。その結果、SufBCDのうち、SufC、SufDでは、大腸菌/枯草菌 どちらにおいても機能的な互換性が認められたが、SufBでは異種間での相補性は認め られなかった。ただし、サプレッサー変異の解析から、SufB内の1アミノ酸置換で異 種のSufBを代替できるようになることがわかった。したがって、枯草菌のSufBCDは、 大腸菌SufBCDと同様に複合体を形成し、Fe-Sクラスターの新規形成部位として機能 すると考えられる。

SufSU について異種間での相補解析を行ったところ、意外なことに、枯草菌の SufSU は、構造の相同な大腸菌 IscSU ではなく、大腸菌 SufSE と相互に代替できることが判明 した。したがって、枯草菌の SufU は、大腸菌 IscU のように Fe-S クラスターの新規形 成部位として機能するのではなく、大腸菌 SufE と同様に、硫黄原子のキャリアとして 機能することがわかった。すなわち、SufU と IscU が機能の異なる相同タンパク質であ ることを明確に示した。これらの知見を統合すると、枯草菌 SUF 様マシナリーでは、 SufS から SufU、SufBCD 複合体の順に硫黄原子が受け渡され、SufBCD 複合体において Fe-S クラスターが新規に形成されると考えられる。

SufU / IscU に相同な 794 種類のアミノ酸配列について分子系統関係を調べたところ、 これらの配列は、SufU グループと IscU グループの 2 つの大きなサブファミリーに分離 した。したがって、SufU と IscU は、共通祖先から分岐した後、異なる機能(それぞれ、 硫黄原子のキャリア/Fe-S クラスターの足場)を持つように進化したと考えられる。さ らに、SufU / IscU の系統関係に加えて、種々の生合成マシナリーに特徴的な成分の分布 を考え合わせることで、多様な Fe-S クラスター生合成系がどのように進化してきたの か、その道筋を示すことができた。

3

序章

## 鉄硫黄(Fe-S) クラスターと Fe-S タンパク質

鉄硫黄 (Fe-S) タンパク質は、コファクターとして無機硫黄原子と非ヘム鉄からなる Fe-S クラスターを持つタンパク質の総称で、ほぼすべての生物に存在している。Fe-S タ ンパク質の生理機能は多彩で、呼吸や光合成、窒素固定などのエネルギー代謝から、 DNA 修復、遺伝子の発現制御に至るまで生命活動の根幹を担っている (Beinert, 1997; Rees, 2003; Lill, 2009; Mettert and Kiley, 2015; Pain and Dancis, 2016)。Fe-S クラスターは一 般に、[2Fe-2S]、[4Fe-4S]、または、[3Fe-4S]の形で Fe-S タンパク質の内部に結合してい る (Fig. 1) が、特殊な Fe-S クラスターとして、ニトロゲナーゼが持つ Fe-Mo コファク ター [Mo-7Fe-9S-C-homocitrate] や P クラスター [8Fe-7S] のような構造も知られてい る (Johnson et al., 2005)。これらのクラスターのほとんどは、Fe-S タンパク質内部の Cys 残基のチオラート S 原子に配位結合している。ただし稀ではあるが、His や Arg 残基の N 原子、Asp や Ser 残基の O 原子が用いられる例も知られている (Bak and Elliott, 2014; McLaughlin et al., 2016)。クラスターを構成する硫黄原子と鉄原子の高い化学的反応性に 加えて、クラスターの種類や Fe-S タンパク質の構造、クラスターを取り巻く配位環境 が、Fe-S タンパク質の多彩な機能を生み出す要因となっている。例えば、電子伝達を行 う Fe-S タンパク質群の酸化還元電位は、-700 mV から+500 mV まで実に幅広い値が報 告されており、それぞれの酸化還元反応で最適な電位になるように調整されている (Bak and Elliott, 2014)。また、アコニターゼなどの酵素ではルイス酸として触媒活性に、 IRP や FNR などの制御タンパク質では鉄濃度や酸素濃度などのセンサーとしてクラス ターを利用している (Mettert and Kiley, 2015)。また、ラジカル SAM スーパーファミリ ーの酵素群は、[4Fe-4S]クラスターと S-アデノシルメチオニン (SAM) から 5'deoxyadenosyl ラジカルを生成して酵素反応に利用している (Duschene et al., 2009; Booker and Grove, 2010; Lanz and Booker, 2015)。さらに近年、真核生物では DNA ポリメ

ラーゼや DNA プライマーゼに、古細菌では RNA ポリメラーゼにも Fe-S クラスターが 存在することが示されている (Klinge *et al.*, 2007; Hirata *et al.*, 2010; Netz *et al.*, 2012)。こ れら DNA に結合する酵素の Fe-S クラスターは、DNA を通して電子をやり取りし、酵 素と DNA との結合/解離を調節する (charge transfer communication) という可能性が示 唆されている (O'Brien *et al.*, 2017)。

Fe-S クラスターは、それ自体不安定な錯体化合物である。そのため、Fe-S タンパク質 が変性すると、クラスターが容易に崩壊して、アボ型 (クラスターを保持していない状 態) となる。1960 年代には、還元剤、鉄イオン (Fe<sup>2+</sup>)、硫化物イオン (S<sup>2-</sup>) をアポ型 Fe-S タンパク質に加えてインキュベートすると、Fe-S クラスターが再構成されることが示 され、以来、生体内の Fe-S クラスター合成も非酵素的 (自発的) に起こると考えられ てきた (Malkin and Rabinowitz, 1966)。しかしながら、化学的にクラスターを再構成する ためには、細胞内よりもはるかに高い濃度の Fe<sup>2+</sup>と S<sup>2-</sup>が必要となる。細胞内では一般 に、Fe<sup>2+</sup>や S<sup>2</sup>は毒性が高いため、極めて低濃度に制御されている。そのため、自発的な クラスター形成には疑問の声もあり、実際に、葉緑体におけるフェレドキシンの Fe-S ク ラスター形成反応は ATP を必要とすることから、未知の酵素系が関与するという可能 性も指摘されていた (Takahashi *et al.*, 1986)。2000 年前後の分子遺伝学的研究によって、 ようやく Fe-S クラスターの生合成に関与する複雑な多成分酵素系 (マシナリー)の実 体が明らかにされ始めた。

## Fe-S クラスターの生合成系

これまでに、Fe-S クラスターの生合成系として 3 種類のマシナリー、NIF (nitrogen

fixation)、ISC (iron sulfur cluster)、SUF (sulfur mobilization)、が同定されている (Fig. 2)。 これらの生合成系では、L-システインから硫黄原子を引き抜き、それを鉄イオンと結合 させて Fe-S クラスターの形に組み立て、その不安定なクラスターを壊さないようにア ポタンパク質まで渡す、と考えられている。ただし、3 種類の生合成系マシナリーを構 成する成分は大きく異なっているため、反応のメカニズムもまた大きく異なると考えら れている。なお、真核生物ではミトコンドリアの ISC マシナリー、葉緑体の SUF マシ ナリーに加えて、細胞質に真核生物独自の CIA (cytosolic iron-sulfur assembly) マシナリ ーが存在しているが、このマシナリーはミトコンドリアの ISC マシナリーで形成された Fe-S クラスターを利用してそれを改変すると考えられており (Lill *et al.*, 2015; Paul and Lill, 2015)、本稿では取り上げないことにする。

## — NIF マシナリー

NIF マシナリーは、NifS、NifU という 2 種類の成分からなる生合成系で、窒素固定細菌 Azotobacter vinerandii を用いた Dean らの研究によって見出された。彼らは、nifSU 遺伝子産物(NifS と NifU)が、ニトロゲナーゼに含まれる 3 種類の Fe-S クラスター([4Fe-4S] クラスター、P クラスター、FeMo コファクター)のすべての合成に関与することを示したのである (Jacobson *et al.*, 1989)。NifS はピリドキサール-5'-リン酸 (PLP)依存的に L-システインを分解して、L-アラニンと硫黄 (S<sup>0</sup>)を生成するシステイン脱硫黄酵素で、生成した硫黄原子を persulfide (-SSH)の形で、NifU に提供する (Zheng *et al.*, 1993; Zheng *et al.*, 1994)。NifU は 3 種類のドメインから構成されており、そのうちの N 末端ドメインは ISC マシナリーの IscU (後述)と相同である。これらは、Fe-S クラスターの新規形成部位 (Scaffold:足場)として機能し、不安定な Fe-S クラスターを結合する ことができる。この部位で形成されたクラスターがアポ型タンパク質に渡されることも 示されている (Yuvaniyama *et al.*, 2000; Dos Santos *et al.*, 2004)。NifU の中央ドメインには 安定な [2Fe-2S] クラスターが結合している。このクラスターは、電子をN末端ドメイ ンに供給することで、S<sup>0</sup>から S<sup>2-</sup>への還元に、または [2Fe-2S] から [4Fe-4S] への変換 に用いられると考えられている。また、NifU の C 末端ドメインは、N 末端ドメインで 組み立てられた Fe-S クラスターをアポ型タンパク質に運搬する役割があるのではない かと考えられている (Smith *et al.*, 2005; Py and Barras, 2010)。

当初、NIF マシナリーは窒素固定細菌におけるニトロゲナーゼの Fe-S クラスター形 成のみに特化しているると考えられていたが、窒素固定を行わない生物(例えば *Helicobacter pylori*)にも *nifSU* 遺伝子が存在しており(Fig. 3)、実験的にも、ニトロゲナ ーゼ以外の Fe-S タンパク質の成熟化に関与することが示された(Tokumoto *et al.*, 2004)。 ただし、NIF マシナリーの分布は窒素固定細菌と嫌気性または微好気性の生物に限られ ている。窒素固定細菌では、ニトロゲナーゼの Fe-S クラスターが酸素に不安定なため、 窒素固定は低酸素分圧下で行われている。実際、NIF マシナリーは好気条件下では十分 に機能することができないことも示されており、低酸素環境に特化した Fe-S クラスタ ーの生合成系と考えられている(Ali *et al.*, 2004; Tokumoto *et al.*, 2004)。

## — ISC マシナリー

大腸菌の ISC マシナリーは、*iscSUA-hscBA-fdx-iscX* オペロンにコードされる7種類の 成分から構成されており、これらの成分が協調して Fe-S クラスターを合成している (Nakamura *et al.*, 1999; Tokumoto and Takahashi, 2001)。IscS は NifS、IscU は NifU の N 末 端ドメインとそれぞれ一次構造上高い相同性を有しており、それぞれ硫黄原子の供与体 と Fe-S クラスターの新規形成部位として機能している (Agar *et al.*, 2000; Smith *et al.*, 2001; Urbina *et al.*, 2001; Kato *et al.*, 2002; Shimomura *et al.*, 2008)。 IscU や NifU の N 末端 ドメインには、3 つの Cys 残基、Asp 残基、His 残基が厳密に保存されている (Fig. 4)。 IscU の結晶構造によると、これらのうち、3 つの Cys 残基と 1 つの His 残基が、[2Fe-2S] クラスターの配位子として機能している。また、保存性の高い Asp 残基 (大腸菌で は IscU Asp39) が Ala へ置換されることによって、IscU の Fe-S クラスターが安定化さ れることが知られている (Shimomura *et al.*, 2008)。この置換型 IscU はクラスターを離す ことができず、機能できなくなる (Johnson *et al.*, 2006)。

IscA は、IscU と同様に Fe-S クラスターと結合することができる。ただし、Fe-S クラ スター新規形成部位としてではなく、IscU の下流で、Fe-S クラスターのキャリアとし て機能すると考えられている (Vinella *et al.*, 2009)。また、IscA は [4Fe-4S] クラスター の形成には必要だが、[2Fe-2S] クラスターの形成には関与しないことも示されており、 IscU で形成された [2Fe-2S] クラスターを [4Fe-4S] に変換する段階に、あるいは [4Fe-4S] に特異的なキャリアとして機能する可能性がある (Tan *et al.*, 2009; Tanaka *et al.*, 2016)。一方、IscA は高い親和性で鉄イオンを結合できることから、鉄シャペロンとし て機能する可能性も示唆されている (Tan *et al.*, 2009)。HscA は、HSP70 型の分子シャペ ロン、HscB は J-タイプドメインを有するコシャペロンで、これらは協調して IscU と結 合することによりその構造を変化させて、IscU に結合した Fe-S クラスターをアポ型タ ンパク質へ移す反応を促進させると考えられている (Hoff *et al.*, 2000; Tokumoto *et al.*, 2002; Chandramouli and Johnson, 2006)。Fdx は安定な [2Fe-2S] クラスターを活性中心に 持つフェレドキシンで、硫黄原子 S<sup>0</sup> を S<sup>2</sup>に還元する役割があると考えられている (Kakuta *et al.*, 2001; Kim *et al.*, 2013)。IscX は分子量の小さい酸性タンパク質で、鉄シャ ペロンと推定されているが不明な点が多い (Shimomura et al., 2005; Pastore et al., 2006)。

これらの知見をまとめると、ISC マシナリーでは、以下の 4 つのステップを経て Fe-S クラスターを新規に形成すると考えられている。

1) IscS から硫黄原子が persulfide (-SSH) の形で IscU に渡される。

2) Fdx によって S<sup>0</sup> が S<sup>2</sup>-に還元される。

3) IscUにおいて、S<sup>2</sup>とFe(供与体は不明)が結合して、[2Fe-2S] クラスター が新規に形成される。

4) HscA と HscB が協調して IscU のコンフォメーションを変化させることで クラスターがリリースされてアポタンパク質に渡される。

5) [4Fe-4S] クラスターの形成には IscA も関与する。

ただし、Fe-S クラスターの中間体が非常に不安定なため反応の実体を捉えにくいこ とと、*in vitro* の実験では *in vivo* の反応を忠実に再現することができない(副反応が多 い)という難点があり、メカニズムには不明な点が多く残されている。

最近、*in vivo*の研究によって、大腸菌 ISC マシナリーの7 種類の成分のうち、IscS と IscU の2 種類はマシナリー機能に常に必須だが、その他の成分は必ずしも必須でない ことが示された。HscA と HscB の機能は、IscU 内部にサプレッサー変異(1アミノ酸置 換)が生じるとバイパスされるようになり、また、嫌気条件下においては Fdx と IscA の機能がバイパスされる (Tanaka *et al.*, 2016)。なお、IscX については、遺伝子を破壊し てもほとんど影響が見られない (Roche *et al.*, 2015)。したがって、ISC マシナリーのコ アになるのは IscS と IscU の2 成分と考えられる。

ISC マシナリーの成分の多くは、 $\alpha$ -、 $\beta$ -、 $\gamma$ -プロテオバクテリアから真核生物のミト

コンドリアに分布している (Fig. 3)。ミトコンドリアでは、大腸菌の IscX を除く 6 種類 の成分が機能しており、そのメカニズムは基本的に大腸菌の ISC マシナリーに類似して いる。ただし、ミトコンドリアに特有な成分 (Arh1、Isd11、Yfh1、Mge1、Grx5、Iba57) も同定されており、より複雑化したマシナリーになっている (Braymer and Lill, 2017)。 一方、いくつかのバクテリアでは逆に単純化したマシナリーが見られ、例えば高度好熱 菌 Aquifex aeolicus のゲノムには IscS と IscU、Fdx、IscA の 4 成分が、偏性嫌気性細菌 *Clostridium perfringens* のゲノムには IscS と IscU のみがコードされている。

## — SUF マシナリー

SUF マシナリーは、大腸菌の isc オペロンの欠失 ( $\Delta$ isc) 株から生じたサプレッサー 変異の解析により見出された (Takahashi and Tokumoto, 2002)。すなわち、sufABCDSE オ ペロンの発現量が増加すると、 $\Delta$ isc 株における Fe-S クラスターの供給不足が回復する ことが示された。また、suf オペロンの遺伝子は単独で破壊してもほとんど影響が見ら れないが、isc オペロンの遺伝子破壊と組み合わせると合成致死になることも示された。 したがって、大腸菌は 2 種類の Fe-S クラスター生合成系を持つこと、また通常の培養 条件では ISC マシナリーが主要な経路として機能することが分かった。その後の研究 で、大腸菌の suf オペロンの発現は、鉄センサーである Fur (ferric uptake regulator) によ って負の制御、H<sub>2</sub>O<sub>2</sub> センサーである OxyR によって正の制御を受けることが示された (Outten *et al.*, 2004)。すなわち、大腸菌の SUF マシナリーは、鉄飢餓や酸化ストレス環 境におけるバックアップシステムとして用いられている。*in vitro* の実験においても、 SUF マシナリーの成分は酸化ストレスに耐性があることが示されている (Jang and Imlay, 2010; Dai and Outten, 2012; Selbach *et al.*, 2013; Blanc *et al.*, 2014)。逆に、*isc* オペロ ンの発現は、ノンコーディング RNA の一種 RyhB によって、鉄飢餓条件では抑制され る (Desnoyers *et al.*, 2009)。また、これら 2 種類のオペロンは不安定な [2Fe-2S] クラス ターをセンサーとする転写制御タンパク質の IscR によっても制御されている。ホロ型 の IscR は *isc* オペロンを負に、逆にアポ型の場合には *suf* オペロンを正に制御する (Schwartz *et al.*, 2001; Yeo *et al.*, 2006)。したがって、細胞内で Fe-S クラスターが不足し ているときには IscR がアポ型となり、Fe-S クラスターの供給が促進される。

大腸菌の SUF マシナリーは、*sufABCDSE* にコードされる 6 種類の成分から構成され ている (Fig. 2)。そのひとつ SufA は ISC マシナリーの IscA と一次構造レベルで 47%同 ーで、これらの間には機能的な互換性がある (Lu *et al.*, 2008; Vinella *et al.*, 2009)。したが って、SufA は IscA と同様、[4Fe-4S] クラスターの形成に特異的に関与するという可能 性が高い。これらは、Fe-S クラスターを新規に形成する IscU などの U タイプタンパク 質と区別して、A タイプのキャリアタンパク質と呼ばれている。U タイプと A タイプ どちらにも、3 残基の Cys が保存されている。大腸菌のアポ型 SufA の結晶構造解析に よると、SufA は二量体を形成し、C 末端側の Cys114、Cys116 が二量体の会合面で近接 していることから、これらの 4 つの Cys 残基が、Fe-S クラスターを配位するという可 能性が指摘されている (Wada *et al.*, 2005)。

SufS は IscS のパラログ (25%相同) で、IscS と同様に基質 L-システインから PLP 依存的に硫黄原子を引き抜くシステイン脱硫黄酵素として機能している (Mihara *et al.*, 1999)。これらの酵素は、休止状態では Lys 残基 (SufS では Lys226)の側鎖の $\epsilon$ -アミノ 基が PLP のアルデヒド基とシッフ塩基を形成して結合している。基質 L-システインが 結合すると、基質の $\alpha$ -アミノ基が Lys の $\epsilon$ -アミノ基と置換して、L-システイン-PLP のシ ッフ塩基を形成する。この状態の L-システインに対して、活性残基の Cys (SufS では Cys364) が求核攻撃することによって S<sup>0</sup> を引き抜き、Cys に S<sup>0</sup> が結合した状態の persulfide (-SSH) を生成する (Mihara et al., 2000)。この persulfide の S<sup>0</sup>は、SUF マシナ リーでは SufE へと、特異的なタンパク質-タンパク質相互作用によって受け渡される (Loiseau et al., 2003; Ollagnier-de-Choudens et al., 2003; Outten et al., 2003)。 SufS と SufE が 結合すると、SufEのCys51を含むループが構造変化を起こして、SufSCys364の-SSHに 求核攻撃すると考えられている(Kim and Park, 2013; Singh *et al.*, 2013; Dai *et al.*, 2015)。次 いで、この硫黄原子は SufE から SufBCD 複合体の SufB へと渡される (Outten et al., 2003; Layer et al., 2007)。 すなわち、SufE は SufS と相互作用して、その硫黄原子を SufE の活 性残基である Cys51 に persulfide (-SSH)の形で受け取り、次いで SufB と相互作用して 硫黄原子を渡すという、硫黄キャリアタンパク質として機能している。なお、大腸菌に は第3のシステイン脱硫黄酵素として CsdA が存在しており (Mihara et al., 1997; Mihara and Esaki, 2003)、SufS-SufEの関係と同様、CsdA は CsdE と特異的に相互作用すること が知られている (Loiseau et al., 2005)。CsdA-CsdE は Fe-S クラスターの形成ではなく、 TcdAの機能をサポートして tRNA 修飾(環状 №-threonylcarbamoyladenosineの形成)に 関与している (Miyauchi et al., 2013)。SufS と CsdA は、IscS とは異なり、単独での活性 が低く抑えられているが、パートナータンパク質が存在することでその活性が著しく促 進される。すなわち、SufS は SufE に、CsdA は CsdE に S<sup>0</sup>を受け渡すことでシステイ ン脱硫黄酵素活性が大きく上昇する (Outten et al., 2003; Loiseau et al., 2005)。

SufBCD は SufB<sub>1</sub>C<sub>2</sub>D<sub>1</sub>の量比で複合体を形成し、SUF マシナリーにおいて Fe-S クラス ターの新規形成を担っている (Wollers *et al.*, 2010; Hirabayashi *et al.*, 2015)。SufB と SufD の一次構造は低いながらも相同性があり、結晶構造によると、それらの立体構造も類似 している (Fig. 5A) (Hirabayashi *et al.*, 2015)。これらは N 末端ヘリカルドメイン、C 末端 ヘリカルドメインと中央の  $\beta$ ーヘリックスコアドメインの 3 種のドメインで構成されて おり、中央のコアドメインでは、20 本の  $\beta$ ーストランドがらせん状に巻き付いて、2 つ の平行 βーシートを形成している。また、SufB と SufD との会合面では、βーヘリックス コアドメインの C 末端側で逆平行 βーシートを形成して結合している。SufBCD 複合体 に 2 分子含まれる SufC は、SufB と SufD の C 末端ヘリカルドメインにそれぞれ 1 分子 ずつ結合している。SufC の構造は膜輸送を担う ABC (ATP-binding cassette) -transporter に おけるヌクレオチド結合サブユニット (ABC-ATPase) と相同である。ABC-transporter で は、2 分子の ABC-ATPase が、2 分子の ATP を分子間に挟み込んで会合し、ATP を加水 分解して解離することによって、膜貫通サブユニットの構造変化を引き起こすと考えら れている (Locher, 2016)。SufBCD 複合体の 2 分子の SufC は、結晶構造では 40 Å 以上 離れているが、会合面のアミノ酸を部位特異的にシステインに置換 (Tyr86Cys) させた 場合に、ATP の存在下で会合して S-S 結合を形成することが示された。ATP に依存した SufC の会合と解離は、複合体全体の構造を大きく変化させると考えられている (Petrovic *et al.*, 2008; Wada *et al.*, 2009; Hirabayashi *et al.*, 2015)。

SufB については、*in vitro* の化学的な Fe-S クラスターの再構成によって(非常に不安 定ではあるが)[4Fe-4S] クラスターを持つようになることが報告されている (Layer *et al.*,2007)。一方、大腸菌から嫌気的に精製した SufBCD 複合体は、[4Fe-4S] クラスター とは異なるクラスターを保持することが示されており、このクラスターはリニア型の [3Fe-4S] クラスターではないかと考えられている(Saini *et al.*,2010)。また嫌気条件下で は、SufBCD 複合体あたりひとつの FADH<sub>2</sub> を結合した状態で精製されている(Saini *et al.*,2010; Wollers *et al.*,2010)。これらの知見から、SufBCD 複合体では SufB に硫黄原子 と鉄原子が集積され、FADH<sub>2</sub> から還元力の提供を受けて、Fe-S クラスターが新規に組 立てられると考えられている。最近、我々の研究グループでは、大腸菌の SufB と SufD に対して網羅的な変異導入解析が行われ、*in vivo* 機能に必須な 2 つの領域が同定された (Yuda *et al.*,2017)。そのひとつは SufB の βーへリックスコアドメインの N 末端側に位置 しており、その領域では Cys254 が SufE から硫黄原子を受け取る必須残基である。も うひとつの機能領域は SufB と SufD の会合面に位置しており、Fe-S クラスターを結合 しうる 3 残基の必須アミノ酸(SufB の Cys405 と Glu434、SufD の His360)が集中して いることから、この領域で Fe-S クラスターが新規に形成されると考えられている。ま た、SufB のβーヘリックスコアドメインの内部には、SufB の Cys254 から Cys405 まで つながるトンネルが見出された。これらの知見を考え合わせて、SufBCD 複合体の作動 機構は次のように推定されている (Fig. 5B)。

- 1) 硫黄原子は SufE の Cys51 から SufB の Cys254 に渡される。
- 2) この硫黄原子は、おそらく FADH2によって還元され、Cys254 から遊離して、 コアドメイン内部のトンネルを通って SufB の Cys405 へと移動する
- ATP の結合に共役して 2 分子の SufC が会合し、SufB と SufD の会合面の構 造が大きく変化する。
- その構造変化によって、会合面に位置する SufB の Cys405 と Glu434、SufD の His360 が露出し、Fe-S クラスターが新規に形成される。

ただし、SufBCD 複合体の構造変化の実体や、Fe-S クラスターを保持した状態は未解 明であり、それらを捉えることは大きな課題といえる。また、Fe がどのようにして供給 されるのかという問題についても、NIF マシナリーや ISC マシナリーの場合と同様、未 解明である。

SUF マシナリーの成分は、真性細菌全般から古細菌、真核生物の色素体と、生物界に たいへん広く分布しているが、その組成には多くのバリエーションが見られる (Fig. 3)。 Euryarchaeota の中には (例えば *Methanococcus jannaschii* では) SufB と SufC のみで構成 される SUF マシナリーが、また *Blastocystis* では SufC と SufB が融合した SufCB タンパ ク質が見つかっており、これらの生物ではおそらく SufB<sub>2</sub>C<sub>2</sub> 複合体の形で Fe-S クラス ターの生合成を担っていると考えられる (Tsaousis *et al.*, 2012; Outten, 2015)。これらは、 分子系統解析から SUF マシナリーのプロトタイプと推測されており、*sufB* の遺伝子重 複によって *sufD* が加わったと考えられている (Boyd *et al.*, 2014)。進化の過程では、そ の後、システイン脱硫黄酵素 SufS がメンバーに加わり、さらに遅れて硫黄キャリアタ ンパク質 SufE が加わったと推定されている。ただし、多くのグラム陽性細菌のゲノム には SufE がコードされておらず、代わりに ISC マシナリーの中核成分である IscU のホ モログが *suf* 様オペロンの中にコードされている (Fig. 3)。

## — ISC/SUF のキメラ型生合成系:SUF 様マシナリー

上述のように、グラム陽性細菌の一種である枯草菌のゲノムには、*suf* 様オペロン (*sufCDSUB*) がコードされている (Fig. 6)。興味深いことに、このオペロンから予想さ れる SUF 様マシナリーは、大腸菌 SUF マシナリーの中の SufA と SufE を除く 4 成分 (SufS、SufB、SufC、SufD) と、ISC マシナリーの IscU (枯草菌のホモログは SufU と呼ぶ) のキメラ構成となっている (Fig. 6)。このようなキメラ型のオペロンは、グ ラム 陽性 細菌の Bacilli や Actinobacteria に加え、Spirochaetes、Thermotogae、 Proteobacteria の一部でも見られ、真性細菌に広く分布している (Tokumoto *et al.*, 2004; Huet *et al.*, 2005; Boyd *et al.*, 2014; Outten, 2015)。なお、枯草菌では、*suf* 様オペロンか ら離れた座位に *sufA* がコードされているが、*sufCDSUB* の 5 遺伝子がいずれも生存に 必須 (Kobayashi *et al.*, 2003) なのに対して、*sufA* は破壊しても全く影響が見られない (Albrecht *et al.*, 2010)。

枯草菌の SufB、SufC、SufD には、大腸菌 SUF マシナリーの中核成分である SufBCD

と高い相同性(それぞれ 41、51、37%)を示すことから(Fig. 6)、大腸菌の SufBCD と 同様に、複合体を形成し、Fe-S クラスターの新規形成部位として機能すると推定されて いる (Boyd *et al.*, 2014; Outten, 2015)。ただし、SufBCD の精製が困難であるため、これ まで実験的な解析は全く行われていない (Dos Santos, 2017)。

枯草菌の SufS は大腸菌 SufS と相同(48%)なシステイン脱硫黄酵素である(Fig. 6)。 枯草菌 SufU と大腸菌 IscU のアミノ酸配列の相同性は比較的低い(28%)が、IscU で Fe-S クラスターの配位子となる3残基の Cys など機能性アミノ酸の多くは、SufU でも保 存されている(Fig. 4)。ただし、IscU で配位子のひとつとなる His 残基は、SufU では Lys に置換されており、IscU における HscA 結合モチーフ(LPPVK 配列)も SufU では保存 されていない。2番目と3番目の Cys 残基の間に約20アミノ酸の挿入があるというの も SufU サブファミリーの特徴である。立体構造も IscU と SufU でよく似てはいるが、 IscU の2本の短いへリックス( $\alpha$ 3 と $\alpha$ 4)は SufU では1本につながっており、また SufU に特有な約20アミノ酸の挿入配列は $\alpha$ へリックスを形成している(Shimomura *et al.*, 2008)。

近年、Marahiel のグループは、枯草菌 *sufU* 遺伝子のプロモーターを人為的にコント ロール可能な P<sub>xylA</sub> にすげ替えた変異株を構築し、その発現を抑制すると枯草菌の生育 が遅延すること、また、アコニターゼやコハク酸脱水素酵素といった Fe-S 酵素の活性 が低下することを示した (Albrecht *et al.*, 2010)。また、*in vitro* で Fe-S クラスターを化学 的に再構成すると、SufU は [4Fe-4S] クラスターを保持するようになること、またこの ホロ型 SufU は isopropylmalate isomerase のアポ型をホロ型に変換できることを示した。 さらに、枯草菌の SufS にアポ型の SufU を共存させると、システイン脱硫黄酵素活性が 40 倍増加することから、これらのタンパク質の間の硫黄転移反応が示された。また、 SufU の 3 残基の Cys (Cys41、Cys66、Cys128) を Ala に置換したところ、いずれの置換 によっても活性増加が消失した (Albrecht *et al.*, 2010; Albrecht *et al.*, 2011)。これらの実 験が意味するところは、枯草菌のアポ型 SufU は SufS から硫黄原子を受け取り、新規に クラスターを形成してホロ型 SufU に変換するということと、SufS との相互作用には SufU の 3 残基の Cys が必要ということである。これに基づいて彼らは、枯草菌の SufU は(IscU と同様に)Fe-S クラスターの新規形成部位として機能すると提案した。

Dos Santos らのグループは、この提案に真っ向から反論している。彼女たちは、 Marahiel らの実験のうち、SufU によって SufS の活性が大幅に上昇するという点は再現 できたが、SufU のホロ型は確認できず、アーティファクトではないかと考えた (Selbach *et al.*, 2010; Selbach *et al.*, 2014)。実際、*in vitro* の実験では、Fe-S クラスターの生成にお けるこの種のアーティファクトは珍しくない。彼女らはさらに、枯草菌 SufU では 3 残 基の Cys (Cys41、Cys66、Cys128) と Asp43 を配位子として亜鉛イオンがたいへん強固 に結合している ( $K_a = 10^{17} \text{ M}^{-1}$ ) こと、この亜鉛を人為的に取り除くと SufU の二次構造 が大きく変化して、SufS と相互作用できなくなることを示した。この 3 残基の Cys は、 Marahiel らの想定する Fe-S クラスターの結合部位に相当している。したがって、Dos Santos らは、SufU が Fe-S クラスターを結合する可能性は極めて低いと考え、SufU は Fe-S クラスターの新規形成部位として機能するのではなく、大腸菌 SufE のように硫黄 キャリアタンパク質として機能するのではないかと提案した。しかし、SufU がこの硫 黄をどのタンパク質に運ぶのか、SufBCD 複合体を含めて実験的には何も示されていな い。

## 本研究の目的とアプローチ

上述のように、キメラ型の SUF 様マシナリーについては、不明な点が多い。最も注

目されるのは、IscU のホモログである SufU の役割である。仮に、(IscU と同様に) Fe-S クラスターの新規形成部位として機能するのであれば、このマシナリーでは SufU と SufBCD 複合体の 2 か所でクラスターを形成することになり、それらが機能的にどのよ うに分業しているのか、大変興味深い問題になる。あるいは、枯草菌の SufBCD に、大 腸菌とは異なるなんらかの仕組みが隠されているのかもしれない。一方、SufU が、(SufE と同様に) 硫黄キャリアタンパク質として機能するのであれば、IscU と SufU は機能の 異なる相同タンパク質ということになる。とすると、それらの機能分化がどのようにし て生じたのか分子進化の観点からも興味深い。

本研究では、枯草菌 SUF 様マシナリーのユニークな特性に着目し、その性質やメカ ニズムを明らかにすることを目的として研究を進めることにした。ただし、枯草菌 SufBCD の精製が著しく困難なため、生化学的なアプローチではなく、遺伝学的なアプ ローチで枯草菌 sufCDSUB オペロンがコードする 5 成分の役割に迫ることにした。上述 の通り、これらの 5 遺伝子はどれも枯草菌の生存に必須 (Kobayashi et al., 2003) である ため、これまでは、sufU のプロモーターを制御可能なものにすげ替えて発現を抑制する という研究しか行われていない (Albrecht et al., 2010)。一方、我々の研究室では最近、 大腸菌のイソプレノイド合成経路を代謝改変することで Fe-S クラスター生合成系の必 須性を回避し、isc と suf の両オペロンを破壊した変異株が構築された (Tanaka et al., 2016)。この大腸菌の例に倣って、本研究ではまず、枯草菌のイソプレノイド合成経路を MVA 経路へと代謝改変し、sufCDSUB オペロンを破壊することができるかどうかとい う試行錯誤からスタートした。

第1章では、この *sufCDSUB* オペロン破壊株の構築と破壊株の性質について述べる。 5 種類の遺伝子をそれぞれ個別に破壊したところ、すべての破壊株で Fe-S タンパク質 の活性が見られなくなったことから、これら 5 種類の遺伝子はどれも Fe-S クラスター の生合成に必須であることが判明した。また、これらの破壊株で ComK を人為的に発現 誘導して形質転換できるように改変し、Fe-S クラスター生合成系の遺伝子群を自在に 操作することのできる実験系を開発した。この系を用いて、ピロリ菌の NIF マシナリー が、枯草菌の SUF 様マシナリーの機能を代行できることを示した。

第2章では、第1章で構築した枯草菌の破壊株に大腸菌の関連遺伝子を導入する、あ るいは逆に、大腸菌の破壊株に枯草菌の関連遺伝子を導入するという、異種間での相補 解析を行った結果について述べる。枯草菌のSUF様マシナリーと大腸菌のSUFマシナ リーの成分との間では、いくつかの機能的な互換性を見出すことができ、特に、注目し ていた枯草菌のSufUは、IscUのようにFe-Sクラスターの新規形成部位として機能す るのではなく、硫黄原子のキャリアとして機能することがわかった。また、SufUとIscU との系統的な関係(分子進化)を解析し、これに基づいてFe-Sクラスター生合成系の 進化のアウトラインを明らかにした。 第1章 枯草菌 suf 様オペロン破壊株の構築とその性質

## 1.1 序

枯草菌などグラム陽性菌のゲノムにコードされる suf 様オペロンは、大腸菌などの SUF マシナリーの成分 SufB、C、D、S のホモログと、ISC マシナリーの IscU のホモロ グをコードしている。これらの遺伝子産物はグラム陽性菌でも Fe-S クラスター生合成 系(SUF様マシナリー)として機能すると考えられているが、キメラ型のマシナリーの 中でそれぞれの成分が具体的にどのような役割を果たしているのか、配列の相同性から 予想することは困難である。ただし、SufBCDの精製は困難なため、in vitroの解析はこ れまで SufS と SufU に限られている (Dos Santos, 2017)。また、suf 様オペロンの 5 つの 遺伝子はどれも生存に必須であるため、in vivo での解析もほとんど進んでいなかった (Kobayashi *et al.*, 2003; Huet *et al.*, 2006; Albrecht *et al.*, 2010; Roberts *et al.*, 2017)。一方、大 腸菌ではイソプレノイド生合成経路(MEP 経路)を MVA 経路へと改変することによ り、クラスター生合成系を欠損した変異株 (ΔiscΔsuf) が構築され、Fe-S クラスターを 全く作れなくても生育できることが示された (Tanaka et al., 2016)。そこで本章では、大 腸菌の場合と同様に、枯草菌でもイソプレノイド生合成経路を改変することによって、 sufCDSUB オペロンの破壊株を構築できるか検討した。次いで、suf 様オペロンの個々の 遺伝子を破壊した変異株の性質を比較することによって、5 種類の成分のすべてが Fe-Sクラスターの生合成に必須であることを明らかにした。また、Fe-Sクラスターを持た ない枯草菌がどのような代謝経路を利用して生育しているのか考察した。

## 1.2 材料および実験方法

#### 1.2.1 枯草菌の suf 様オペロン破壊株の構築と培養条件

本章で用いた菌株を Table 1 に示した。

枯草菌の 168 株と 1A976 株の培養には、LB 培地を用いた。1A976 株の培養では、0.5 μg/ml Em を添加した。

枯草菌の *suf* 様オペロン破壊株は、MVA 経路の 4 遺伝子を発現させるプラスミド (pBMV4 Nm<sup>f</sup>)の存在下で、それぞれのコード域をスペクチノマイシン耐性遺伝子 (Sp<sup>f</sup>) と置換させて欠失させて構築した。詳細を Fig. 7 と Fig. 8 に示す。破壊株の培 養には、2×YT 培地に 1% グルコース、1% ピルビン酸ナトリウム、20 mM KPi バッ ファー (pH 7.0)を加え (Ye *et al.*, 2000)、さらに 0.2 mM IPTG、0.5 mM MVA を添加し た培地を用いた (2 x YT complete 培地と称す)。破壊株構築の際の選択培地には、Sp を 終濃度 200 µg/ml となるように添加した。必要に応じて、5 µg/ml Nm、5 µg/ml Cm、100 µg/ml Sp、0.5 µg/ml Em を添加した。

嫌気条件下の培養には、BBL GasPak Anaerobic System (Becton Dickinson)を用いた。2 x YT complete 寒天培地を使用し、GasPac ジャーに入れて密閉し、37°C 、48 時間毎に生 育を観察した。

液体培地での生育観察では、まず、2 x YT complete 液体培地で、37°C 、18 時間前培養した後、L 字管に入れた 4 ml の 2 x YT complete 培地に植菌して、BioPhotorecorder

TN1506 (ADVANTEC) を用いて、37°C 、60 rpm で培養し、30 分毎に 660 nm における 濁度を測定した。

#### suf 様オペロン破壊株の栄養要求性の検討

合成培地は、Spizizen 最少培地に、10 µg/ml 、1% グルコース、1% ピルビン酸ナト リウム、0.5 mM IPTG、0.5 mM MVA、2µg/ml チアミン、2µM ニコチン酸、0.2µM ビ オチン、2 ng/ml リポ酸、19 種類のアミノ酸、プリン類、ピリミジン類を加えたものを 用いた。アミノ酸、プリン、ピリミジンの濃度は Cutting と Vander Horn の記述を参考に した (Cutting and Vander Horn, 1990)。2 x YT complete 液体培地で、37°C、18 時間前培養 した後、3 ml の合成培地を入れたプラスチック製の培養管(17×100 mm、Labcon)に、 前培養液を 1/1000 容植菌し、37°C、180 rpm で振盪培養した。mini photo 518R (TAITEC) を使用して 600 nm における濁度を経時的に測定した。

#### suf 様オペロン破壊株の形質転換

枯草菌 *suf* 様オペロンの破壊株は、グリセロールストックから 2 x YT complete 寒天培 地に起こし、2 日以内のコロニーを用いた。爪楊枝で 2×YT complete 液体培地に植菌し て、37°C で約 18 時間培養し、前培養液とした。L 字管に入れた 2×YT complete 培地 4-5 ml に 1/10 容の前培養液を加えて 37°C で振盪培養した。0.5-1 時間ごとに mini photo 518R (TAITEC) を使用して 600 nm における濁度を測定し、増殖が止まらないことを確 認しつつ、OD<sub>600</sub>の値が 0.5-0.7 程度になった時点で、終濃度 1%となるようにキシロー スを添加し、さらに 37℃ で 1 時間振盪培養した。次いで、培養液(形質転換当たり、 300 µl)をカルチャーチューブに移し、そこに DNA(約 0.5-1 µg)を添加して、37℃ で 1.5 時間振盪した。選択培地に全量をスプレッドし、37℃で培養して形質転換体を得た。

## 1.2.2 プラスミドの構築

本章で使用したプラスミドとプライマーを、それぞれ Table 2、Table 3 に示す。

#### MVA 経路の遺伝子発現用プラスミド pBMV4 の構築

放線菌 *Streptomyces* sp. CL190. 由来の MVA 経路の 4 つの酵素 (MVA kinase、 phosphomevalonate (PMVA) kinase、 diphosphomevalonate (DPMVA) decarboxylase、 iso pentenyl diphosphate (IPP) isomerase) 用の発現プラスミド、pBMV4 は、東京大学 生物 産工研究センター、葛山智久先生から供与いただいた。構築方法を簡単に記す。まず、 枯草菌用発現ベクターpHB201 (Bron *et al.*, 1998) を NcoI と BcII で処理して ori1060/ rep1060 を含む 2.8 kb の断片を切り出し、この断片を、pDH88 (Henner, 1990) から NcoI と BcII で切り出した断片 (P<sub>spac</sub> と polylinker、*lacI* を含む) とつないで、pAA101 ベク ターとした。上記の放線菌 *Streptomyces* sp. CL190. 由来の MVA 経路の 4 つの遺伝子 (*pmvk、mvd、mvk、idi*) は、それぞれ枯草菌用の SD 配列 (<u>GGAGG</u>TTGTTTT) を付加 して PCR で増幅し、P<sub>spac</sub> プロモーターの下流にクローン化された。このプラスミドは 選択マーカーが Cm 耐性であっため、本研究では、枯草菌内で pCm::Nm プラスミド (Steinmetz and Richter, 1994) との相同組換えを利用して、Nm 耐性に置換して (pBMV4 Nm<sup>r</sup>) 用いた。

#### 相補実験用プラスミド(pHCMC05 シリーズ)の構築

## — 発現用ベクターpHCMC05-NMC

大腸菌-枯草菌シャトルベクターpHCMC05 は Cm 耐性マーカーを持ち、枯草菌細胞 内で θ 型の自立複製をするプラスミドである (Nguyen *et al.*, 2005)。また、IPTG 存在下 で強力に転写をドライブする P<sub>spac</sub> プロモーターの下流にマルチクローニングサイトが 配置されている。本研究では、さらに多くの制限酵素認識部位を導入するため、以下の 改変を行った。

マルチクローニングサイトから離れた位置に存在する XhoI-PstI-SphI 認識部位を削除 するため、XhoI と SphI で切断し、T4 DNA polymerase で平滑化してセルフライゲーシ ョンした。同様に、マルチクローニングサイトから離れた位置に存在する NheI-SacI 認 識部位を削除するため、NheI と SacI で切断し、mung bean nuclease で平滑化してセルフ ライゲーションした。次いで、マルチクローニングサイト内の XbaI と SmaI で切断し、 その間にリンカーDNA(Table 3、pHCMC linkerF と pHCMC linkerR を 85°C で 10 分処 理し、アニールしたもの)を挿入して、pHCMC05-NMC を構築した。新たなマルチクロ ーニングサイトは、BamHI-XbaI-SphI-XhoI-SacI-SacII-NheI-NruI-BmgBI である。

## — pHCMC05-Bs sufC、-Bs sufD、-Bs sufS、-Bs sufU、-Bs sufB

枯草菌 sufC、sufD、sufS、sufU、sufB をそれぞれ、La Taq DNA Polymerase (TaKaRa) を

用いて PCR で増幅した。プライマーはそれぞれ、Bs SufF-Xb と Bs sufC-R-Sc、Bs sufD-F-Xb と Bs suf $\Delta$ SU-R、Bs sufS-FXh と Bs sufS-R-Sc、Bs sufU-F-Xb と Bs sufU-RNh、Bs suf $\Delta$ SU-F と Bs SufR-Sc という組み合わせで使用した (Table 3)。まず、これら PCR 産物 を、pMD20-T vector (TaKaRa) へ TA クローニングした。クローン化した *sufC、sufD、sufU、sufB* は XbaI と SacI、*sufS* は XhoI と SacI で制限酵素処理を行い、切り出した。こ の断片と、対応する制限酵素で処理した pHCMC05-NMC をライゲーションして、pHCMC05-Bs *sufC、-Bs sufD、-Bs sufS、-Bs sufU、-Bs sufB* を構築した。

## — pHCMC05-Bs sufSU

枯草菌 *sufSU を Ex Taq* polymerase (TaKaRa) と Bs sufS-FXh、Bs sufU-RNh プライマー (Table 3) を用いて PCR で増幅し、pCR2.1-TOPO vector (Invitrogen) へ TA クローニン グした。このプラスミドをまず SpeI 処理で切断し、T4 polymerase で平滑化した。次い で XbaI で処理して断片を切り出し、XbaI と SmaI で処理した pHCMC05 にサブクロー ニングした。このプラスミドを pHCMC05-*Bs sufSU* とした。

## — pHCMC05-Bs sufCDSUB、-Hp nifSU

枯草菌 *sufCDSUB* (5.2 kb) 断片は、pRK-*Bs*SUF-*sufAnfu* (大橋 2012 年修士論文) プラ スミドから XbaI と SacI で処理して切り出した。同様に、ピロリ菌 *nifSU* (2.2 kb) は pRKHpSU プラスミド (Tokumoto *et al.*, 2004) より切り出した。これらをそれぞれ、 pHCMC05-NMC の XbaI/SacI 部位にクローン化し、pHCMC05-*Bs sufCDSUB、-Hp nifSU* とした。

#### 1.2.3 酵素活性の測定

枯草菌の野生株と変異株を2 x YT complete 培地で定常期の初期まで培養した。各培 養液の 600 nm における濁度に基づいて、氷冷した 50 mM Pi バッファー (pH 7.5) を加 えて菌体濃度を OD<sub>600</sub> = 2 になるように揃えた。ここに、0.1 mm 径のガラスビーズ(OD<sub>600</sub> = 1.0 当たり 0.4 g)を加えて、超音波 (30 pulse  $\rightarrow$  氷冷 40 秒を 5 回)で破砕した。4°C、 15,000 rpm、30 分間遠心分離した後、上清を回収した。この上清を用いて、アコニター ゼ、コハク酸脱水素酵素、グルタミン酸合成酵素、リンゴ酸脱水素酵素の活性測定を行 った。

## アコニターゼ活性の測定

アコニターゼは、TCA サイクルの酵素の 1 つで、*cis*-アコニット酸を中間体として、 クエン酸とイソクエン酸の可逆的な異性化反応を触媒する。この酵素には 1 つの [4Fe-4S] クラスターが結合しており、この Fe-S クラスターは、基質を配位するルイス酸と して機能している。アコニターゼの活性測定は、イソクエン酸からの *cis*-アコニット酸 の生成を、240 nm における吸光変化をモニターすることで調べた (Kennedy *et al.*, 1983)。 まず、ブラックセルにイソクエン酸を除く次頁の表の試薬を加えて混合し、240 nm に ける吸光度を 7 分間測定してこれをバックグランドとした。そこへ、イソクエン酸を添 加して素早く混合し、240 nm での吸光度を 5 分間測定した。*cis*-アコニット酸のモル吸 光係数は、3.6 mM<sup>-1</sup>cm<sup>-1</sup> として活性を算出した。

	Stock	Volume	Final concentration
Tris-HCl pH 7.8	1 M	90 µ1	90 mM
H <sub>2</sub> O		870 µl – Enzyme solution	
Enzyme solution		20-200 µl	
Isocitrate	0.5 M	40 µ1	20 mM
		Total 1 ml	

アコニターゼ活性測定用の反応液組成

#### コハク酸脱水素酵素の活性

コハク酸脱水素酵素はコハク酸を酸化してフマル酸を生成し、その電子をキノンへ 渡す酵素(別名:呼吸鎖電子伝達系複合体II)である。電子は、まず、フラビンサブ ユニット(FP)のFADに渡り、続いてFe-Sサブユニット(IP)の[2Fe-2S]、[3Fe-4S]、 [4Fe-4S]クラスターを介して膜貫通サブユニットのヘムにわたり、最終的にキノンへ と渡される。PMS(Phenazinemethosulfate)とMTT(3-(4,5-dimethylthiazol-2-yl)-2,5diphenyl-2,4-tetrazolium bromide)は、人工の電子受容体であり、PMSはコハク酸脱水素 酵素のFe-Sクラスターから電子を受け取り、次いでMTTへと渡す。MTTは還元される と570 nm付近に吸収極大を示すことから、この570 nmの吸収変化を指標にして、コハ ク酸脱水素酵素の活性を調べた(Tokumoto and Takahashi, 2001)。まず、コハク酸ナト リウム以外の次頁の表の試薬を混合し、570 nmにおける吸光度を7分間測定して、これ をバックグランドとした。そこへコハク酸ナトリウムを加えて素早く混合し、570 nm における吸光度を10分間測定した。MTTのモル吸光係数は、17 mM<sup>-1</sup>cm<sup>-1</sup>として活性を 算出した。

	Stock	Volume	Final concentration
KPi pH 7.5	1 M	25 µl	25 mM
PMS	4 mg/ml	30 µ1	120 µg/ml
MTT	2 mg/ml	30 µ1	60 µg/ml
KCN	1 M	2 µl	2 mM
H <sub>2</sub> O		868 µl – Enzyme solution	
Enzyme solution		10-75 μl	
Sodium succinate	0.5 M	20 µ1	10 mM
		Total 1 ml	

コハク酸脱水素酵素活性測定用の反応液組成

## グルタミン酸合成酵素の活性

グルタミン酸合成酵素は、L-グルタミンとα-ケトグルタル酸から 2 分子の L-グルタ ミン酸を生成する反応を触媒する酵素である。この反応では、NADPH が酸化され、 NADP<sup>+</sup>が生じるので、NADPH の 340 nm の吸光度の減少をモニターすることで、グル タミン酸合成酵素の活性を調べた (Tokumoto and Takahashi, 2001)。グルタミンを除く下 表の試薬を UV 透過型のアクリル製プラスチックキュベット内で混合し、340 nm にお ける吸光度を 10 分間測定してこれをバックグランドとした。次いで、グルタミン溶液 を加えて素早く混合し、340 nm における吸光度を 5 分間測定した。NADPH のモル吸光 係数は 6.22 mM<sup>-1</sup>cm<sup>-1</sup> として活性を算出した。

グルタミン酸合成酵素活性測定用の反応液組成

	Stock	Volume	Final concentration
Tris-HCl pH 7.8	1 M	100 µ1	100 mM
NADPH	8 mM	20 µl	0.16 mM
H <sub>2</sub> O		780 µl – Enzyme solution	
Enzyme solution		20-100 µl	
α-ketoglutarate	100 mM	50 µl	5 mM
Glutamine	200 mM	50 µl	10 mM

Total 1 ml
#### リンゴ酸脱水素酵素の活性

リンゴ酸脱水素酵素 (MDH) は、リンゴ酸とオキサロ酢酸の間の可逆的な酸化還元反応を触媒する酵素である。オキサロ酢酸からリンゴ酸への反応では、NADH が酸化され、NAD<sup>+</sup>が生じる。そこで、NADH の 340 nm の吸光度の減少をモニターして、リンゴ酸脱水素酵素の活性を調べた (Tokumoto and Takahashi, 2001)。まず、オキサロ酢酸以外の下表の試薬を混合して、340 nm における吸光度を2分間測定し、これをバックグランドとした。そこへ、オキサロ酢酸溶液を加えて素早く混合し、340 nm での吸光度変化を2分間測定した。NADH のモル.吸光係数は 6.22 mM<sup>-1</sup>cm<sup>-1</sup> として活性を算出した。

リノコ胺脫水糸将糸ň注測を用り及応液和」	<b>泪成</b>
----------------------	-----------

	Stock	Volume	Final concentration
KPi pH 7.5	1 M	100 µ1	100 mM
NADH	14.3 mM	10 µl	0.143 mM
H <sub>2</sub> O		873.3 µl – Enzyme solution	
Enzyme solution		5-10 µl	
Oxaloacetic acid	20 mM	16.7 µl	0.33 mM
		Total 1 ml	

本研究では、以上の4種類の酵素活性について、いずれの場合も1分間に1µmolの 生成物が生じたときの活性を1unitとした。また、タンパク質の濃度は、Bradford法 (Nacalai Tesque)によって決定し、それぞれの酵素の比活性を求めた。

#### 1.3 結果

#### 1.3.1 suf 様オペロン破壊株の構築

枯草菌の suCDSUB オペロンの 5 つの遺伝子はどれも、枯草菌の生存に必須である (Kobayashi et al., 2003)。Fe-S クラスターの生合成系が生存に必須ということは、枯草菌 には必須機能を持つ Fe-S タンパク質が存在することを示唆している。過去の文献とデ ータベース UniProt (www.uniprot.org) を用いて検索してみると、枯草菌には 60 種類以 上の Fe-S タンパク質が存在することが分かった (Fig. 9)。これら Fe-S タンパク質の中 で、枯草菌の生育に必須なものをデータベース BSORF (http://bacillus.genome.jp) を用い て検索したところ、イソプレノイド合成系 2-C-methyl-D-erythritol-4-phosphate (MEP) 経 路に含まれる 1-hydroxy-2-methyl-2-butenyl-4-diphosphate (HMBPP) synthase (IspG) と HMBPP reductase (IspH) の2つのFe-S タンパク質が必須と示唆された (Fig. 9, Fig. 10)。 イソプレノイドは、イソプレンを単位とするテルペン化合物(テルペノイド)の総称で、 メナキノンやバクトプレノールなどを含む必須成分である。そのため、Fe-S クラスター 合成系を破壊すると、IPPと diphosphomevalonate (DMAPP) が合成できなくなり、致死 となることが予想された。枯草菌や大腸菌など多くのバクテリアでは、イソプレノイド は Fe-S タンパク質(IspG と IspH)が関与する MEP 経路により合成されるが、一方、 真核生物や放線菌などの一部のバクテリアは、全く異なるメ MVA 経路によって、合成 されている (Kuzuyama, 2017)。この MVA 経路に Fe-S タンパク質は関与していない。ま た最近では、大腸菌において、放線菌由来の MVA 経路の遺伝子群を導入しておくと、 Fe-S クラスターの生合成系を完全に欠損させても生育できること、その生育は培地に 添加した MVA に完全に依存することが報告されている (Tanaka et al., 2016)。そこで本 研究では、枯草菌においても同様の方法で、Fe-S クラスター生合成系の必須性を回避し

て、suf様オペロンを破壊できるかどうか検討することにした。

放線菌の MVA 経路の遺伝子群は、東京大学の葛山智久准教授から提供していただい たプラスミド (pBMV4) を用いて、枯草菌に導入した。このプラスミドには、放線菌の MVA 経路の4つの酵素 (MVA kinase、PMVA kinase、DPMVA decarboxylase、IPP isomerase) の遺伝子それぞれが、枯草菌内で適切に翻訳されるように人工的な SD 配列 (<u>GGAGGTTGTTTT</u>)を付加して PCR で増幅され、IPTG 誘導性の P<sub>spac</sub> プロモーターの 下流にクローニングされている。

本研究では、標的とする枯草菌 *sufCDSUB* それぞれの遺伝子のコード域(またはオペロン全体)をスペクチノマイシン耐性遺伝子 (Sp<sup>r</sup>) と置換することにより欠失させることにした。まず、標的遺伝子の上流域(約800 bp またはそれ以上)と Sp<sup>r</sup>、標的遺伝子の下流域(約800 bp またはそれ以上)の3種類を PCR で増幅し、これらの DNA 断片を2段階目の PCR によって融合した (Fig. 7)。枯草菌 168 株に、まず MVA 経路の4種類の遺伝子を持つ pBMV4 プラスミドを導入してイソプレノイド生合成経路を改変し、ついで、PCR で作成した破壊用の Sp<sup>r</sup> カセットを導入した (Fig. 8)。

LB 培地では(MVA とグルコースを添加しても)形質転換体が得られなかったため、 種々の培地を検討したところ、MVA とグルコース、ピルビン酸を含む富栄養培地(2×YT complete 培地)において、2~3日で小さなコロニーが出現した。このとき、スペクチノ マイシン (Sp)を比較的高濃度 (200 μg/ml)添加すると、偽陽性コロニーの出現を抑え ることができた。コロニーPCR によって調べたところ、相同組み換えから予想される長 さのバンドが検出され、目的の遺伝子が Spr と置換していることを確認することができ た。こうして、枯草菌Δ*sufCD* 株 (NY018)、Δ*sufB* 株 (NY012)、Δ*sufSU* 株 (NY004)、 △*sufCDSUB*株 (NY027)、の4種類の破壊株を構築することができた (Fig. 11)。

しかし、これらの破壊株はいずれも、従来の二段階培養法 (Anagnostopoulos and Spizizen, 1961) やエレクトロポレーション法 (Cao et al., 2011) では形質転換することが できなかった。関連遺伝子群を操作するためには遺伝子導入が不可欠であるため、新た な形質転換法を検討することにした。近年、枯草菌のコンピテンスの主要制御因子であ る ComK を人為的に発現させることによって、形質転換能を発現させる方法が報告さ れている (Zhang and Zhang, 2011)。この枯草菌 1A976 株 (BGSC ID、原著論文では SCK6 株)では、ゲノム上の lacA 遺伝子内に、キシロース誘導性プロモーター (PxylA) で制御 できる comK と Em 耐性遺伝子が導入されており、富栄養培地においてもキシロースを 添加するだけでコンピテンスを発現することができる。そこで本研究では、この改変株 からゲノム DNA を抽出し、枯草菌 168 株に導入して Em 耐性株を選択することで、PxvA comK 領域を移行させた。この株 (NY105) をホストとして、上記のようにまず放線菌由 来の MVA 経路の遺伝子群をクローン化したプラスミド (pBMV4 Nm)を導入し、次い で suf 様オペロンを破壊するための Spf カセットを導入して形質転換することで、新た に suf 様オペロン破壊株を構築し直した。これらの形質転換体で標的の遺伝子が Sprと 置換しているかどうか、コロニーPCR によって調べた (Fig. 12)。図に示すプライマーセ ットを用いて PCR を行ったところ、Sp 耐性コロニーのほぼ全てにおいて、相同組換え から予想される長さのバンドが検出され、目的の遺伝子が Spr と置換していることを確 認することができた。こうして、枯草菌ΔsufC株、ΔsufD株、ΔsufS株、ΔsufU株、ΔsufB 株、ΔsufSU株、ΔsufCDSUB株の7種類の破壊株を構築することができた (Fig. 11)。な お、以下に述べる破壊株の性質は、PxvA comK 領域を付加しても全く変化がないことを 確認している。

34

#### 1.3.2 suf 様オペロン破壊株の表現型(富栄養培地における生育)

構築した破壊株のうち、5 種類の個別破壊株とオペロン全体の欠失株を用いて、2×YT complete 培地での生育を観察した。寒天培地における生育を比較したところ、*suf* 様オペロンの破壊株はどれも野生株に比べてゆっくりと生育し、1~2 日で小さなコロニーを形成した (Fig. 13)。これらのコロニーは 10 日程度で溶菌し、植え継げなくなった。 また、胞子を形成することもできなくなった。液体培養における対数増殖期での倍加時間を比較すると、野生株の約 26 分に対して、破壊株では約 87 分から約 105 分と 3~4 倍遅くなっていた (Fig. 14)。なお、*suf* 様オペロンの 6 種類の破壊株の間では、コロニーの生育速度や液体培養における倍加時間・到達濁度のいずれにおいても有意な違いは見られなかった。

MEP 経路の 1-deoxy-D-xylulose 5-phosphate reductoisomerase をコードする dxr 遺伝子 を、pMUTIN を用いて破壊した枯草菌変異株 ( $dxr::Em^{1}$ )(東京大学の葛山智久准教授か ら供与)と生育を比較してみたところ、2×YT complete 培地における生育速度は、野生 株>dxr 破壊株>suf 様オペロン破壊株の順であった(データは示していない)。一方、 培地から MVA を除いた(添加しなかった)場合には、suf 様オペロンの破壊株はどれも 全く生育することができず (Fig. 13)、この MVA 要求性は dxr 破壊株と一致した。この 結果は、suf 様オペロンの破壊株では dxr 破壊株と同様に、MVA からイソプレノイドを 合成しなければ生育できないこと、すなわち、枯草菌に本来備わっている MEP 経路が 全く機能していないことを示している。MEP 経路の 2 つの Fe-S 酵素、IspG と IspH に [4Fe-4S]クラスターが形成されず、機能不全となっていることが原因と考えられる。 MVA を含む培地で、suf 様オペロン破壊株の生育が dxr 破壊株に比べて遅いのは、MEP 経路だけでなく、他の Fe-S タンパク質にも影響が及んでいるためと推定された(後述)。 suf様オペロン破壊株の生育は、2×YT complete 培地からグルコースまたはピルビン酸 のどちらか一方を除くと、より遅くなった。グルコースとピルビン酸を同時に除くとさ らに遅くなったが、小さなコロニーが観察でき、全く生育できないというわけではなか った (Fig. 13)。枯草菌の野生株は、嫌気条件下においても、グルコースとピルビン酸を 含む 2×YT complete 培地で、発酵によってゆっくりと生育することができる。suf様オ ペロンの6種類の破壊株について、嫌気条件で生育できるか検討したところ、どれも小 さなコロニーがかろうじて観察できる程度で、ほとんど生育が認められなかった (Fig. 13)。すなわち、同じ培地であっても、好気条件下の方がはるかによく生育することが判 明した。好気呼吸 (TCA 回路や電子伝達系) には種々の Fe-S タンパク質が関与してい るが、この点については後で考察する。なお、嫌気条件下の生育においても6種類の suf 破壊株の間でほとんど違いは認められなかった。

# 1.3.3 suf 様オペロン破壊株における Fe-S 酵素の機能不全

5 種類の個別破壊株とオペロン全体の欠失株の MVA 要求性は、MEP 経路の 2 つの Fe-S 酵素(IspG と IspH) にクラスターが形成されず、MEP 経路が機能不全になってい ることに起因すると考えられる。次に、IspG / IspH 以外の Fe-S タンパク質の活性につ いても調べることにした。この実験では、保持するクラスターの種類や数が異なる 3 種 類の Fe-S タンパク質、アコニターゼ (CitB)、コハク酸脱水素酵素 (SdhABC)、グルタミ ン酸合成酵素 (GltAB) の活性を測定した。アコニターゼは、TCA 回路でクエン酸をイ ソクエン酸に異性化する酵素で、活性中心として [4Fe-4S] クラスターを1 つ持つ。コ ハク酸脱水素酵素は、コハク酸をフマル酸に酸化して、メナキノンを還元する酵素で [2Fe-2S] クラスター、[3Fe-4S] クラスター、[4Fe-4S] クラスターを 1 つずつ持ってい る。グルタミン酸合成酵素は、グルタミンと2-オキソグルタル酸から2分子のグルタミ ン酸を合成する酵素で、[3Fe-4S] クラスターと [4Fe-4S] クラスターを1つずつ持つ。 枯草菌は、炭素源や窒素源の有無に応答して、これらの酵素の発現を厳密に制御してい る (Fujita, 2009) ため、これらの酵素活性の測定には、通常、最少培地で培養した細胞 の破砕液が用いられている。ただし本研究では、2×YT complete 培地で培養した枯草菌 野生株において、低いながらも十分に有意な活性を検出することができた(アコニター ゼ活性はグルコースとピルビン酸を含まない 2×YT complete 培地で培養したものに比 べて約1/40、グルタミン酸合成酵素の活性はグルタミン酸を含まない合成培地で培養し たものに比べて約 1/25)。一方、suf 様オペロンの個別破壊株 ( $\Delta sufC$  株、 $\Delta sufD$  株、 $\Delta sufS$ 株、ΔsufU株、ΔsufB株)とオペロン全体の欠失株(ΔsufCDSUB株)では、どの Fe-S 酵 素の活性も検出限界以下であった (Fig. 15)。他方、コントロールとして、Fe-S クラスタ ーを持たないリンゴ酸脱水素酵素の活性を測定したところ、どの破壊株でも野生株とほ ぼ同程度の活性がみられた。これらの結果から、枯草菌 suCDSUB それぞれの遺伝子産 物はどれも Fe-S クラスターの形成に必須で、どれか1つでも成分が欠けるとアコニタ ーゼやコハク酸脱水素酵素、グルタミン酸合成酵素の Fe-S クラスターが形成されず、 機能できなくなると考えられる。

## 1.3.4 suf 様オペロン破壊株の栄養要求性

大腸菌の場合、Fe-S クラスター合成系を破壊した変異株(Δisc Δsuf 二重欠損株)は、

著しく栄養豊富な Superbroth にグルコースと MVA を添加した場合のみ、極めてゆっく りと生育することができる (Tanaka *et al.*, 2016)。これと比較すると、今回構築した枯草 菌 *suf* 様オペロン破壊株の方が、はるかに生育速度が早い。そこで、枯草菌の破壊株は 合成培地でも生育できるのではないかと考え、条件を検討した。

suf様オペロン破壊株は、グルコースを含む最少培地では、MVA を添加しても全く生 育出来なかった。そこで、枯草菌の 60 種の Fe-S タンパクの機能を見直したところ、い くつかのアミノ酸や、ヌクレオチド、ビタミン類(チアミン、リボ酸、ビオチン、ニコ チン酸)の生合成経路に Fe-S タンパクが関与すると推測できた (Fig. 9)。suf 様オペロ ン破壊株においては、これらの Fe-S 酵素が機能不全となり、上記のような分子の生合 成経路が停止している可能性がある。そこで、グルコース、ピルビン酸、IPTG、MVA を 添加した最少培地へ、さらに 20 種類のアミノ酸、4 種のプリン・ピリミジン、4 種のビ タミン類を加えて培養したところ、suf 様オペロンの破壊株が生育できることが分かっ た。次いで、添加した物質の中で生育に必要な成分を特定する目的で、合成培地から一 つずつ (あるいはいくつかをまとめて) 除去してみることにした。

まず、プリン・ピリミジンに対する要求性の検討を行った。アデニン、グアニン、ウ ラシル、チミジンを一つずつ、またはプリン(アデニンとグアニン)をまとめて合成培 地から除去し、野生株と*AsufCDSUB* 株の生育を測定した (Fig. 16A)。野生株の生育は、 プリンやピリミジンの添加の有無でほとんど変化がなかった。一方、*AsufCDSUB* 株は、 プリン塩基の場合アデニン・グアニンのどちらか一方が培地に存在する場合は生育した が、アデニンとグアニンの両方を培地から除去した場合には生育しなくなった。ピリミ ジン塩基の場合、破壊株はチミジンを除去しても生育したが、ウラシルを除去すると(チ ミジンが存在してもしなくても) 生育しなかった。 アミノ酸についても同様に要求性の検討を行った。この実験では、各アミノ酸を一つ ずつ、またはメチオニンとシステイン、グルタミンとグルタミン酸を共に、合成培地か ら除去して培養を行った。トリプトファンは、枯草菌 168 株では必須のアミノ酸である ため、全ての培地に含めている。野生株は、合成培地からどのアミノ酸を除去した場合 でも生育した (Fig. 16B)。一方、*suf*様オペロンの破壊株は、イソロイシン、ロイシン、 バリンをそれぞれひとつずつ除去した場合に、ほとんど生育しなくなった。システイン とメチオニンについては、それぞれひとつずつ除去した場合、全てのアミノ酸を含む場 合に比べて濁度やや減少する程度であった。しかし、システインとメチオニンを共に培 地から除去した場合には、生育が認められなくなった。グルタミンとグルタミン酸につ いても同様に、どちらか一方を除去した場合には生育できるが、両方同時に除去すると 生育しなくなった (Fig. 16B)。これらの栄養要求性と Fe-S 酵素の関係については後で考 察する。本研究では、チアミン、リボ酸、ビオチン、ニコチン酸については後で考 約してみたが、生育に対する影響を再現性よく観察することはできなかった。これらの ビタミン類はごくわずかな量しか用いられないため、前培養から持ち込まれた量で、あ る程度まかなえるのではないかと考えている。

#### 1.3.5 suf 様オペロン破壊株の形質転換

suf様オペロン破壊株で人為的に ComK を発現させることによって、形質転換させる ことが可能かどうか、ΔsufSU 株を用いて以下のように検討した。形質転換には、シャト ルベクター (pHCMC05) に枯草菌の sufSU をクローン化したプラスミド (pHCMC05-Bs sufSU) を用いた。suf 様オペロン破壊株の生育は、MVA の添加に完全に依存している が、このプラスミドが導入されて *sufSU* の欠失が相補されると、MVA を添加しない培 地でも生育できるように回復すると予想される。そこで、MVA を含まない培地でのコ ロニー数を形質転換の指標とすることにした。*AsufSU* 株を 2×YT complete 培地で培養 し、1%キシロースを添加することによって ComK を過剰発現させ、これに pHCMC05-*Bs sufSU* を加えてインキュベートし、MVA を含まない培地に撒いたところ、翌日には コロニーが出現した。このコロニーは、MVA がなくても野生株並みの早さで生育した ことから *sufSU* 欠失の表現型が相補されたと考えられる (Fig. 17A)。また、pHCMC05 ベ クター上のプライマーを用いたコロニーPCR によって、確かに pHCMC05-*Bs sufSU* プラ スミドが導入された形質転換体であることを確認した(データは示していない)。

この形質転換法では、キシロース添加後の誘導時間(DNA 添加までの時間)が形質 転換効率に大きく影響することがわかった。すなわち、誘導時間は1時間をピークにし て、2時間、3時間と長くなるにつれて得られる形質転換体数は減少し、5時間以上誘 導すると全く形質転換体が得られなくなった(Fig. 17B)。ここでは*AsufSU*株のデータの みを示しているが、ほかのどの *suf*様オペロン破壊株においても同様に、ComK を人為 的に過剰発現させることによって形質転換が可能になった。ただし、理由は不明だが形 質転換効率は著しく低く、約1µg 程度のプラスミドを用いても得られた形質転換体は 10個以下であった。

*sufCDSUB* オペロン全体、またはそれぞれの *suf* 遺伝子を個別に pHCMC05 ベクター にクローン化し、対応する破壊株に導入したところ、どの形質転換体も(MVA を含ま ない培地でも)枯草菌野生株と同様に生育した (Fig. 18, Fig. 23)。このように表現型が 完全に相補されたことから、Sp<sup>r</sup> カセットを挿入した破壊株において、下流遺伝子の発 現が影響を受けるといった極性効果はほとんどないものと考えられる。 以前の研究で、大腸菌において、Δ*isc* Δ*suf* 二重欠損株がピロリ菌由来の *nifSU* によっ て相補できることが示されている (Tokumoto *et al.*, 2004)。そこで、pHCMC05 にピロリ 菌の *nif* オペロン (*nifSU*) をクローン化し、枯草菌Δ*sufCDSUB* 株に導入したところ、形 質転換体は MVA に依存せずに生育できるようになった。この結果は、枯草菌の *sufCDSUB* オペロンが欠失していても、ピロリ菌の NIF マシナリーによって Fe-S クラ スター形成が代行できることを示している。

#### 1.4 考察

# 1.4.1 SUF 様マシナリーは枯草菌で唯一の Fe-S クラスター生合成として機能 する

本章では、枯草菌の suf 様オペロンの破壊株を初めて構築し、その性質について解析 した結果を示した。枯草菌の生存に必須な Fe-S タンパク質、IspG/IspH をバイパスす るために、放線菌由来の MVA 経路の4遺伝子を導入してイソプレノイド生合成系を改 変することで、枯草菌の sufCDSUB オペロンの必須性もまた回避することができた。構 築した suf 破壊株はどれもゆっくりと生育し、MVA に対して厳格に要求性を示した。ま た、破壊株においては、アコニターゼ、コハク酸脱水素酵、グルタミン酸合成酵素とい った Fe-S 酵素の活性がどれも検出限界以下となった。これらの表現型は、suf 様オペロ ンの個別破壊株( $\Delta sufC$ 株、 $\Delta sufD$ 株、 $\Delta sufS$ 株、 $\Delta sufU$ 株、 $\Delta sufB$ 株)とオペロン全体 の欠失株(ΔsufCDSUB株)で共通して観察されたことから、sufCDSUBオペロンの5種 類の遺伝子産物はどれも同等に Fe-S クラスターの生合成に必須と考えられる。また、 ピロリ菌由来の NIF マシナリーは、これまで遺伝学的・生化学的な解析が進んでいる Fe-S クラスターの生合成系のひとつだが、ピロリ菌の nifSU によって枯草菌 AsufCDSUB 株の表現型が相補されたという結果は、枯草菌の SUF 様マシナリーが実際に、アポ型 タンパク質に対して広い特異性を持つ生合成系として機能することを示している。加え て当研究室では、大腸菌のΔisc Δsuf 二重欠損株の表現型が枯草菌 sufCDSUB オペロンに よって(部分的にではあるが)相補されることが観察されており(大橋、2012年修士論 文)、このことからも、枯草菌 SUF 様マシナリーの機能は、基本的にピロリ菌の NIF マ シナリー、ならびに、大腸菌の ISC や SUF マシナリーと同等と捉えることができる。

#### 1.4.2 suf 様オペロン破壊株の栄養要求性と Fe-S タンパク質の機能不全

*suf*様オペロンの破壊株は、プリンやピリミジン塩基といくつかのアミノ酸に対して 栄養要求性を示した (Fig. 16)。これらの結果を、生合成経路に含まれる Fe-S タンパク の役割に基づいて考察する。プリンの生合成経路 (Fig. 19A) では、5-ホスホリボシル 1α-ニリン酸 (PRPP) から 5-ホスホ-β-リボシルアミンを合成する、アミドホスホリボシル トランスフェラーゼが [4Fe-4S] クラスターを持つ Fe-S タンパクである (Smith *et al.*, 1994)。そのため、破壊株でこの酵素が機能しなくなると、アデニンとグアニンの共通の 前駆体であるイノシンーリン酸 (IMP) を合成できなくなると考えられる。アデニンヌ クレオチドとグアニンヌクレオチドは相互に変換可能なため、アデニンとグアニンのど ちらか一方が培地に存在すれば、他方は不用になる。しかし、共に培地から除去してし まうとどちらも合成することができないため、生育できなくなると推測され、実験結果 (Fig. 16) と符合する。すなわち、破壊株ではアミドホスホリボシルトランスフェラーゼ の [4Fe-4S] クラスターが形成されず、機能していないと考えられる。

ピリミジンの生合成経路 (Fig. 19B) では、ジヒドロオロト酸をオロト酸に変換する、 ジヒドロオロト酸デヒドロゲナーゼが、[2Fe-2S] クラスターを持つ Fe-S タンパクであ る (Kahler *et al.*, 1999)。この酵素が機能しないと、ウリジンーリン酸 (UMP) が合成さ れず、ピリミジンヌクレオチド全体の合成が停止する。UMP から下流の合成経路には Fe-S タンパクが存在しないため、ウラシルが存在すれば UMP に変換し、そこからシト シンやチミンを含むヌクレオチドの合成が可能である。一方チミジンからは、シトシン ヌクレオチドやウラシルヌクレオチドへの変換経路がないため、培地にチミジンのみを 添加した場合には、生育できなくなると推測される。実験結果 (Fig. 16A) は、代謝経路 から推測される表現型とよく合致した。すなわち、*suf* 様オペロンの破壊株ではジヒド ロオロト酸デヒドロゲナーゼの [2Fe-2S] クラスターが形成されず、機能していないと 考えられる。

イソロイシン、バリンの合成経路 (Fig. 20) には、[4Fe-4S] クラスターを持つ、ジヒ ドロキシ酸デヒドラターゼが関与している。この酵素は、イソロイシン合成では、2,3-ジヒドロキシ-3-メチル吉草酸から 2-オキソ-3-メチル吉草酸への変換、バリン合成経路 では、2,3-ジヒドロキシイソ吉草酸から 2-オキソイソ吉草酸への変換という、ふたつの 反応を触媒することが知られている。また、ロイシンの合成経路には [4Fe-4S] クラス ターを持つ、3-イソプロピルリンゴ酸デヒドラターゼが関与し、2-イソプロピルリンゴ 酸から 3-イソプロピルリンゴ酸に変換する過程を触媒している。すなわち、今回 suf 様 オペロン破壊株で観察された、イソロイシンとバリンに対する要求性はジヒドロキシ酸 デヒドラターゼの機能不全、ロイシンに対する要求性は 3-イソプロピルリンゴ酸デヒド ラターゼの機能不全と捉えることができ、これらの酵素に [4Fe-4S] クラスターが形成 されていないと考えられる。

システインとメチオニンの合成経路 (Fig. 21A) の上流には Fe-S タンパクである亜硫 酸還元酵素が関与している。システインは、硫化物イオン (S<sup>2</sup>) と O-アセチルセリンか ら、システイン合成酵素によって合成されるが、その硫化物イオンを亜硫酸還元酵素が 供給している。そのため、亜硫酸還元酵素の [4Fe-4S] クラスターが形成されないと、 システインのみならずメチオニンも合成できなくなる。システインとメチオニンは相互 に変換可能であるため、どちらか一方が培地中に存在すると、他方に変換される。すな わち、システインとメチオニンを同時に除去した場合に破壊株が生育できなくなるとい う結果は、亜硫酸還元酵素の [4Fe-4S] クラスターが形成されず、機能不全になってい ると考えて矛盾がない。

44

グルタミンと 2-オキソグルタル酸から 2 分子のグルタミン酸を合成するのは、 [3Fe-4S] と [4Fe-4S] クラスター、さらに FAD と FMN を含むグルタミン酸合成酵素である。 この酵素は、グルタミン酸にアミノ基を結合させてグルタミンに変換するグルタミン合 成酵素とともに窒素同化の鍵になっており、グルタミン酸合成酵素が機能しなければ、 グルタミン酸が作れないだけでなく、グルタミン酸とグルタミンの総量を増加させるこ とができなくなる (Fig. 21B)。グルタミン酸、グルタミンのどちらか一方を培地に添加 した場合に、*suf* 様オペロン破壊株が生育できたのは、これらふたつが互いに変換可能 なためである。どちらも培地に存在しない場合に生育できなくなるのは、グルタミン酸 合成酵素の [3Fe-4S] と [4Fe-4S] クラスターが形成されない状態では、まずグルタミン 酸が枯渇し、次いでグルタミンが枯渇するためと考えられる。

このように、枯草菌 suf 様オペロンの破壊株では、ピリミジン生合成経路におけるジ ヒドロオロト酸デヒドロゲナーゼ、プリン生合成経路におけるアミドホスホリボシルト ランスフェラーゼ、バリンとイソロイシン生合成経路におけるジヒドロキシ酸デヒドラ ターゼ、ロイシン生合成経路における 3-イソプロピルリンゴ酸デヒドラターゼ、含硫ア ミノ酸生合成における亜硫酸還元酵素、さらに窒素同化に関与するグルタミン酸合成酵 素が機能不全になっていると考えられる。ただし、富栄養な 2×YT complete 培地では、 必要なアミノ酸類とヌクレオチド類は 2×YT 培地の Tryptone と Yeast Extract から供給 されるため、生育の律速にはならないと推定される。

## 1.4.3 suf 様オペロン破壊株におけるエネルギー代謝

Fe-S クラスターが合成できなくなると、TCA サイクルや電子伝達系の Fe-S タンパク

質も機能できなくなるが、解糖系の酵素やピルビン酸脱水素酵素には Fe-S クラスター は含まれていない。2×YT 培地にはアミノ酸が多量に含まれているが、suf 様オペロン の破壊株では、アミノ酸の異化によって効率的に ATP を生成することができず、その ため、グルコースやピルビン酸に対する依存度が高くなったものと考えられる。枯草菌 の呼吸鎖電子伝達系にはコハク酸脱水素酵素(電子伝達複合体 II)とシトクロム bc (Cyt bc)という2つの Fe-S タンパク質が関与している (Winstedt and von Wachenfeldt, 2000; Gyan et al., 2006)。そのため、Fe-S クラスター生合成系が欠損すると、これらの電子伝 達複合体が機能不全になり、電子の最終受容体として酸素を利用する酸素呼吸ができな くなるのではないかと予想していた。しかし実際は、嫌気条件よりも好気条件の方が良 く生育した (Fig. 13)ことから、suf 様オペロンの破壊株は、培地中のグルコースとピル ビン酸を利用して、酸素呼吸によって生育していると考えられる。酸素まで電子を伝達 する経路は、以下のように推定できる (Fig. 22)。

枯草菌は、NADH を NAD<sup>+</sup>に酸化する NADH デヒドロゲナーゼ Type II (NDH Type II) を持っているが、これはミトコンドリアの複合体 I とは異なり、Fe-S クラスターの代わ りに FAD を利用している (Bergsma *et al.*, 1982)。この酵素は NADH の電子をメナキノ ン (MQ) に渡してメナキノール (MQH<sub>2</sub>) へと還元する (Bergsma *et al.*, 1981)。枯草菌に は、メナキノールの電子を直接酸素に渡して酸素を還元し、それに共役してプロトン輸 送を行うシトクロム *aa*<sub>3</sub> (Cyt *aa*<sub>3</sub>) がある。また、Cyt *aa*<sub>3</sub> と同様の酸化還元反応を行うが プロトン輸送は行わないシトクロム *bd* (Cyt *bd*) も有している (Winstedt and von Wachenfeldt, 2000)。すなわち枯草菌では、Fe-S タンパク質である電子伝達複合体 III (Cyt *bc*) を介さなくても、NADH から O<sub>2</sub> まで電子を伝達する経路が存在しており、*suf* 様オ ペロンの破壊株ではこの経路が働いていると推定される。この経路によってプロトンの 濃度勾配が形成されるだけでなく、解糖系によって生じた NADH を酸素依存的に再酸

46

化することができるため、好気条件において良く生育できるのだろう。TCA サイクル における 2 つの Fe-S 酵素(アコニターゼとコハク酸脱水素酵素)は機能しないため、 好気条件では還元力の供給が不足する可能性があるが、この点は、培地に添加したピル ビン酸からピルビン酸脱水素酵素の働きで NADH が供給され、埋め合わされると考え られる (Fig. 22)。

#### 1.4.4 Fe-S クラスター生合成系を持たない枯草菌

本研究では、枯草菌 suf様オペロンの破壊株では、イソプレノイド生合成系の IspG と IspH の 2 種類の Fe-S 酵素に加えて、多くの Fe-S タンパク質が機能していないことを明 らかにした。このことは、枯草菌 SUF 様マシナリーが多種多様なアボタンパク質に、 [2Fe-2S]、[3Fe-4S]、[4Fe-4S] クラスターを供給していることを示している。すなわち、 SUF 様マシナリーは、他の生物の ISC、SUF、NIF マシナリーと同様に、アポタンパク 質に対する特異性の広い Fe-S クラスターの生合成系であると結論することができる。 代謝系以外にも、Fe-S タンパク質の中には、遺伝子の発現制御や DNA 修復、RNA の修 飾に関与するものも多い (Fig. 9) ため、suf様オペロンの破壊株では、代謝調節の撹乱、 変異率の増加、翻訳の効率や正確性の低下、といった様々な面で悪影響が生じている可 能性がある。これらの影響が重なることによって、破壊株の生育速度の低下を招いてい ると考えられる。ただし、枯草菌に存在する 60 種類もの Fe-S の中で、生存に必須なも のはイソプレノイド生合成系の IspG と IspH の 2 種類のみであり、この点は大腸菌と類 似している。大腸菌は 140 種類以上の Fe-S タンパク質を有しており、その数は枯草菌 の倍以上である。一般的に、大腸菌などの通性嫌気細菌や偏性嫌気細菌には Fe-S タン パク質が多いという傾向が見られ、この傾向は、Fe-S クラスター自体の酸素に対する不 安定性と関連すると考えられている (Andreini *et al.*, 2017)

*suf*様オペロン破壊株では ComK を人為的に過剰発現させることによって、形質転換 がはじめて可能になった(ただし効率は著しく低い)。本章では、この形質転換系を利 用することによって、欠失させた遺伝子をトランスに再導入すると表現型が相補できる こと、また、ピロリ菌由来の NIF マシナリーで SUF 様マシナリーの機能が代行できる ことを示した (Fig. 18)。第2章では、この実験系を用いて大腸菌の関連遺伝子を導入 し、異種の成分の間で機能的な互換性があるかどうか、詳細に解析した結果を述べる。 第2章 Fe-S クラスター生合成系の遺伝学的解析と進化的考察

# 2.1 序

第1章では、枯草菌のイソプレノイド生合成系を MEP 経路から MVA 経路へと代謝 改変することで Fe-S クラスター生合成系の必須性を回避し、*sufCDSUB* オペロンを破壊 した株を構築して、それらの性質について解析した。その結果、枯草菌では *sufCDSUB* にコードされる SUF 様マシナリーが唯一の Fe-S クラスター生合成系として機能するこ と、さらに、このオペロンにコードされる 5 種類の成分はいずれもマシナリーの機能に 必須であることが明らかになった。また、*suf* 様オペロンの破壊株においては、キシロ ース誘導性プロモーターから *comK* を人為的に過剰発現させるという方法で、形質転換 させることもできるようになった。本章では、これら枯草菌の破壊株を用いて異種間の 相補実験を行い、枯草菌の SUF 様マシナリーと大腸菌の ISC または SUF マシナリーの 成分との間の、機能的な関連性について検討した。また逆に、大腸菌の変異株に対して 枯草菌の関連遺伝子を導入することで、相互の互換性を調べた。特に注目したのは、枯 草菌 SUF 様マシナリーに特徴的な成分、SufU の役割である。その結果、枯草菌の SufU の構造は大腸菌 IscU と相同だが、IscU のように Fe-S クラスターの新規形成部位として 機能するのではなく、硫黄原子のキャリアとして機能することがわかった。本章の後半 では、SufU と IscU との系統的な関係(分子進化)について解析した結果を述べる。

# 2.2 材料および実験方法

#### 2.2.1 菌株と培養条件

使用した菌株を Table 1 に示す。

枯草菌変異株の培養は、第1章の『1.2 材料および実験方法』に記した方法で行った。 大腸菌変異株の培養には、LB寒天培地、あるいは液体 Super broth (3.2% bacto tryptone、 2% yeast extract、0.5% NaCl)を使用した。pUMV22 Sp<sup>r</sup>を保持する UT109、NT1401、 NT2001 株の培養では、0.2 mM MVA (Sigma-Aldrich)と 0.4% グルコースを培地に添加し た。必要に応じて、40 μg/ml Sp、50 μg/ml Km、50 μg/ml Ap、5 μg/ml Tc を添加した。

# 2.2.2 プラスミドの構築

本研究で使用したプラスミドとプライマーはそれぞれ、Table 2 と Table 3 に示す。

## 枯草菌相補実験用プラスミド(pHCMC05 シリーズ)の構築

### — pHCMC05-Ec sufA、-Ec sufB、-Ec sufC、-Ec sufD、-Ec sufS、-Ec sufE

大腸菌の *sufA、sufB、sufC、sufD、sufS、sufE* 断片は、それぞれがクローン化された pBBR プラスミド(後述)から XbaI と SacI 処理によって切り出し、pHCMC05-NMC の XbaI-SacI 部位にサブクローニングした。これらのプラスミドを、pHCMC05-*Ec sufA、*- *Ec* sufB、-*Ec* sufC、-*Ec* sufD、-*Ec* sufS、-*Ec* sufE  $\geq \Box \hbar_{\circ}$ 

#### — pHCMC05-Ec iscSU、-Ec sufSE、-Ec csdAE

大腸菌 *iscSU* は pTOPO-*Ec iscSU*(後述)から XbaI と SmaI で処理して切り出し、 pHCMC05 の XbaI-SmaI 部位にサブクローニングして、pHCMC05-*Ec iscSU* とした。大 腸菌の *sufSE* または *csdAE* を含む断片は、それぞれ pTOPO-*Ec sufSE* または -*Ec csdAE* プラスミド(後述)から、SpeI 処理、T4 polymerase による平滑化、XbaI 処理によって 切り出した。これらの断片を、pHCMC05の XbaI-SmaI 部位にクローン化して、pHCMC05-*Ec sufSE* と-*Ec csdAE* を構築した。

#### — pHCMC05-Ec sufSE (SufE<sup>C51A</sup>)

*Ec sufE* への部位特異的変異 (C51A) 導入では、まず、pBBR-*Ec sufSE* プラスミド (後述) を鋳型として、Table 3 に示したプライマー (Ec-sufE-C51A\_F と Ec-sufE-C51A\_R) を用いて inverse PCR を行い、塩基置換を導入した (pBBR-*Ec sufSE*\_C51A)。変異を含む *Ec sufSE* 断片は、SacII と XbaI で処理して切り出した。pHCMC05 ベクターは、まず、 KpnI で処理して T4 polymerase で平滑化し、ここに XbaI linker (Table 3) を挿入して、新 たに XbaI サイトを付加した。これを SacII と XbaI で処理し、上述の変異 *Ec sufSE* を含 む SacII-XbaI 断片をライゲーションして、pHCMC05- *Ec sufSE*\_C51A とした。

# — pHCMC05-*Bs sufU*への部位特異的変異の導入 (SufU<sup>C41D</sup>、SufU<sup>C66D</sup>、 SufU<sup>C128D</sup>、SufU<sup>D43C</sup>、SufU<sup>D43E</sup>)

第1章で構築した pHCMC05-*Bs sufU*を鋳型として、inverse PCR 法で部位特異的変異 を導入した。使用したプライマー(Bs-sufU-C41D\_F、Bs-sufU-C41A\_R、Bs-sufU-C66D\_F、 Bs-sufU-C66A\_R、Bs-sufU-C128D\_F、Bs-sufU-C128A\_R、Bs-sufU-D43C\_F、Bs-SufU- D43E\_F、Bs-sufU-D43A\_R) は、Table 3 に示した。

#### 大腸菌相補実験用プラスミド(pBBR・pRK シリーズ)の構築

#### — pBBR-Ec sufA、-Ec sufB、-Ec sufC、-Ec sufD、-Ec sufS、-Ec sufE

大腸菌のゲノムを鋳型として、*sufA、sufB、sufS、sufE を* Table 3 に示したプライマー セット(EcSufA-F/EcSufA-R、EcSufB-F/EcSufB-R、EcSufS-F/EcSufS-R、EcSufE-F/ EcSufE-R)を用いて、PCR で増幅し、まず、pCR2.1-TOPO ベクターへクローン化した。 次いで NdeI と BamHI で処理して *suf* 遺伝子を含む断片を切り出し、それを pET21a (+) プラスミド (Novagen) にサブクローニングした。このプラスミドから XbaI と SacI で処 理して切り出した断片を、同様の制限酵素で処理した pBBRMCS-4 (Kovach *et al.*, 1995) とライゲーションして、pBBR-*Ec sufA、Ec sufB、-Ec sufS、-Ec sufE*を構築した。pBBR-*Ec sufC と-Ec sufD* は、同様の方法で構築され、既に報告されているものを使用した (Wada *et al.*, 2009; Hirabayashi *et al.*, 2015)。

#### — pBBR-Ec sufSE、-Ec csdAE、-Ec iscSU

大腸菌のゲノムを鋳型として、*sufSE と csdAE* を PCR で増幅した。プライマーはそれ ぞれ、sufSF と sufER、csdAF と ygdKR という組み合わせで使用した (Table 3)。PCR 産 物を pCR2.1-TOPO ベクターへ TA クローニングし、それぞれを pTOPO-*Ec sufSE* と pTOPO-*Ec csdAE* とした。これらのプラスミドを、XhoI と NheI で制限酵素処理し、切 り出した断片を XhoI と XbaI で処理した pBBRMCS-4 ベクターにサブクローン化して、 pBBR-*Ec sufSE* と pBBR-*Ec csdAE* とした。大腸菌 *iscSU* は、プライマーiscSF と iscUR-Sm (Table 3) を用いて PCR で増幅した後、まず pCR2.1-TOPO ベクターへクローン化し た (pTOPO-*Ec iscSU*)。これを XbaI と SacI で制限酵素処理し、切り出した *iscSU* 断片を、 同様の処理をした pBBRMCS-4 とライゲーションして、 pBBR-*Ec iscSU* を構築した。

#### — pBBR-Bs sufSU

pTOPO-*Bs sufSU*(第1章に記述)から、XhoIとNheIで処理して枯草菌 *sufSU*断片を 切り出し、それを XhoIとNheIで処理した pBBRMCS-4 にサブクローン化した。

#### — pBBR-Bs sufC、-Bs sufD、-Bs sufS、-Bs sufU、-Bs sufB

第1章で構築した pHCMC05-Bs sufC、-Bs sufD、-Bs sufU、-Bs sufB から XbaI と SacI で、枯草菌 sufC、sufD、sufU、sufB を切り出した。これらの断片を、同様の制限酵素で 処理した pBBRMCS-4 とライゲーションして、pBBR-Bs sufC、-Bs sufD、-Bs sufU、-Bs sufB を構築した。枯草菌 sufS は、pHCMC05-Bs sufS から XhoI と SacI で切り出して、同 様の制限酵素で処理した pBBRMCS-4 とライゲーションして、pBBR-Bs sufS を構築し た。

# — pRK-sufA\_CDSE ( $\Delta$ sufB), -sufAB\_DSE ( $\Delta$ sufC), -sufABC\_SE ( $\Delta$ sufD), sufABCD\_E ( $\Delta$ sufS), -sufABCDS ( $\Delta$ sufE), -sufABCD ( $\Delta$ sufSE)

pRKSUF017 プラスミドでは、大腸菌 *sufABCDSE* オペロンが pRKNSE (Nakamura *et al.*, 1999) にクローン化されている (Takahashi and Tokumoto, 2002)。また、pRKSUF017 の *sufB* または *sufS* のコード域に、終止コドンを含む PacI リンカーを挿入することによっ て、*sufB* または *sufS* を個別に破壊したプラスミド (それぞれ pRKSUF058、pRKSUF088) が構築されている (Takahashi and Tokumoto, 2002)。この pRKSUF058 を鋳型として、プ ライマー sufA-RSc と C-FSc2 を用いて inverse PCR で増幅し、SacI 処理とセルフライゲ ーションよって、*sufB* のみをインフレームで欠失させた。これを pRK-*sufA\_CDSE* (以 下、本文中では pRKSUF $\Delta sufB$  と表記する)とした。また、同様の方法で、pRKSUF088 を鋳型として inverse PCR (プライマー: D-RSc2 と E-FSc2)を行い、pRK-sufABCD\_E (pRKSUF $\Delta sufS$ )を構築した。pRKSUF $\Delta sufS$ を XbaI と SacI で処理して、pBBRMCS-4 ヘ サブクローン化し、それをさらに KpnI と SacI 処理で切り出して pRKNMC に移したも のを、pRK-sufABCD (pRKSUF $\Delta sufSE$ )とした。pRK-sufABCDS (pRKSUF $\Delta sufE$ )、pRKsufABC\_SE (pRKSUF $\Delta sufD$ )、pRK-sufAB\_DSE (pRKSUF $\Delta sufC$ )は、既報のものを用いた (Takahashi and Tokumoto, 2002; Wada *et al.*, 2009; Hirabayashi *et al.*, 2015)。

## Error prone PCR によるランダム変異の導入

pBBR-Bs sufB を鋳型とし、BST3 と BST7 プライマー (Table 3) を用いてエラープロ ーン PCR を行い、ランダムな変異を導入した。PCR 断片を XbaI と SacI で処理し、同 様の制限酵素処理をした pBBRMCS-4 とライゲーションした。このライゲーション産物 を濃縮して形質転換に用いた。

## 2.2.3 IscU/SufU の系統解析

データベース MBGD (Microbial Genome Database for Comparative Analysis; http://mbgd.genome.ad.jp/) では、登録されている微生物のゲノムデータ(4742 ゲノム、 最終更新日 2016 年 5 月 19 日)の中から代表的な生物系統/生物種のゲノムが予め選択 されており (あるいは、任意に選択することができ)、その中でホモロジー検索をする ことができる。また、生物のゲノムデータから代表的なオルソログがグループ化されて いる (Ortholog Cluster) ので、それらをそのまま系統解析に利用することもできる (Uchiyama *et al.*, 2013)。このデータベース上で、868 種類のゲノム配列 (デフォルト) に 対して、大腸菌 IscU と枯草菌 SufU の 2 種類のアミノ酸配列を入力して BLAST 検索を 行ったところ、720 種の遺伝子産物が有意な相同性を示した。ただし、MBGD がグルー プ化した IscU の Ortholog Cluster では、IscU のオルソログとして 673 種類のゲノム配列 の中に 844 種の遺伝子産物がリストされていた (Cluster ID: O735)。BLAST 検索の結 果よりも多くの相同配列が含まれていたため、Cluster O735 の配列を利用して系統解析 を行うことにした。

Cluster O735 に含まれているアミノ酸配列の中で、大腸菌 IscU や枯草菌 SufU の配列 とはかけ離れているもの (大幅に短縮された配列や、保存性の高い 3 残基の Cys のうち 2 つ以上を持たないもの) 50 種類を手動で除外して、653 種類のゲノム配列内の 794 種 類のオルソログ配列を系統解析に用いることにした。また、これらの配列の中で、NifU の配列に対しては中央ドメインと C 末端ドメインの配列を手動で削除し、IscU/SufU に 相同な N 末端ドメインの配列のみを用いることにした。これらの配列を、MEGA7 内の Clustal W (Gap penalty = 4) でアラインメントし、近隣結合法 (Neighbor-joining method) で系統樹を作成した。また、これら 653 種類のゲノム配列において、SUF マシナリーに 特徴的な成分 (SufB, SufE) または ISC マシナリーに特徴的な成分 (HscB) がコードさ れているのかを調べ、その有無を系統樹の横に記した。さらに、IscU/SufU に相同な遺 伝子の近傍にどのような遺伝子がコードされているか、MGDB を利用して Cluster O735 の Genome Region Map を作成し、1 つずつ検討した。

## 2.3 結果

#### 2.3.1 枯草菌の suf 様オペロン破壊株を用いた異種間相補解析

枯草菌の *sufCDSUB* オペロンと大腸菌の *sufABCDSE* オペロンを比較すると、多くの 成分で高い相同性が認められる。SufS の場合はアミノ酸レベルで 48%同一であり、SufB では 41%、SufC では 51%、SufD では 37%、それぞれ同一である (Fig. 6)。一方、枯草 菌の SufU は大腸菌 ISC マシナリーの IscU と相同 (28%) だが、大腸菌 SUF マシナリ ーの残りの成分である SufA や SufE とは一次構造の類似性が見られない。ただし、枯草 菌 SufU は不安定な Fe-S クラスターを持つことができるという点で大腸菌 SufA と共通 点があり(Wada *et al.*, 2005; Gupta *et al.*, 2009; Albrecht *et al.*, 2010)、また、大腸菌 SufE と は立体構造が類似している(Goldsmith-Fischman *et al.*, 2004)。そこで、枯草菌と大腸菌の 関連する成分の間に機能的な互換性があるのか検討することにした。

大腸菌 *sufABCDSE* オペロンの 6 種類の遺伝子それぞれに人工的な SD 配列 (AAGGAGATATACAT)を付加させて、個別に pHCMC05-NMC シャトルベクターにサ ブクローニングした。大腸菌に比べて、枯草菌では SD 配列と 16S rRNA 内の anti-SD 配列との間で厳密に塩基対が形成されないと、翻訳が開始されないためである (Abolbaghaei *et al.*, 2017)。これらのプラスミドを、対応する枯草菌の *suf* 遺伝子の個別 破壊株に導入して、表現型が相補できるかどうか検討することにした。

形質転換後、MVA を含む 2×YT complete 培地(Cm 耐性で選択)と MVA を含まない 培地に等量ずつプレーティングしてコロニーの現れる様子を比較したところ、枯草菌  $\Delta sufD$  株に大腸菌 sufD を導入した場合、ならびに枯草菌  $\Delta sufC$  株に大腸菌 sufC を導入 した場合に、形質転換体は MVA を含まない培地でも生育できるようになった。また、 その生育速度は、枯草菌 $\Delta sufD$  株や $\Delta sufC$  株に枯草菌の sufD、sufC をそれぞれ再導入し た場合とほとんど変わらず、野生株並みに回復していた (Fig. 23)。これらの結果は、枯 草菌 SufD の機能が大腸菌 SufD によって、また枯草菌 SufC の機能が大腸菌 SufC によ って代替できることを示している。一方、枯草菌 $\Delta sufS$  株に大腸菌 sufS を導入した場合 と、 $\Delta sufB$  株に大腸菌 sufB を導入した場合には、形質転換体は MVA を含む培地でのみ ゆっくりと生育し、MVA が無ければ全く生育しなかった (Fig. 23)。すなわち、これら のタンパク質は枯草菌と大腸菌で保存性が高いにもかかわらず、異種間での相補性は認 められなかった。また、枯草菌 $\Delta sufU$ 株に大腸菌の iscU、sufA または sufE を導入した場 合も相補は観察できなかった (Fig. 23、ただし、sufA、iscUについてのデータは示して いない)。

枯草菌の $\Delta sufS$  株や $\Delta sufU$  株が、大腸菌の関連遺伝子で相補されなかった原因の1つ として、システイン脱硫黄酵素とそのパートナータンパク質との特異的相互作用に着目 した。大腸菌は IscS、SufS、CsdA という3 種類のシステイン脱硫黄酵素を保持してお り、それぞれのパートナータンパク質である IscU、SufE、CsdE へ特異的に硫黄原子を 受け渡すことが知られている (IscS については、IscU の他にも、Thil、TusA、MoaD へ 硫黄原子を渡すことができる)。これらシステイン脱硫黄酵素とパートナータンパク質 との間の相互作用にクロストークはみられない (Outten *et al.*, 2003; Tokumoto *et al.*, 2004; Loiseau *et al.*, 2005)。なお、CsdA と CsdE はそれぞれ SufS と SufE によく似たタンパク 質 だ が、Fe-S ク ラ ス タ ー の 生 合 成 で は な く 、 tRNA の 修 飾 (cyclic *N*<sup>e</sup>threonylcarbamoyladenosine の形成) に関与している (Miyauchi *et al.*, 2013)。枯草菌は SufS に加えて 3 種類のシステイン脱硫黄酵素を保持しているが、それぞれの酵素とパートナ ータンパク質との相互作用は、大腸菌と同様、特異的と考えられている。例えば、シス テイン脱硫黄酵素のひとつ NifZ は Thil タンパク質に特異的に硫黄を渡すことで tRNA の硫黄修飾(s<sup>4</sup>U tRNA 合成)に関与している。同様に、s<sup>2</sup>U tRNA 合成に関与するシス テイン脱硫黄酵素 YrvO とそのパートナーである MnmA の関係も特異的である (Rajakovich *et al.*, 2012; Black and Dos Santos, 2015a; Black and Dos Santos, 2015b)。

そこで、大腸菌の sufS と sufE、csdA と csdE または iscS と iscU をそれぞれ、2 遺伝子 ずつのペアにしてシャトルベクターpHCMC05につなぎ、枯草菌 $\Delta sufS$ 株または $\Delta sufU$ 株 に導入して、相補能を検討した。枯草菌∆sufS株に pHCMC05-Ec csdAE、または -Ec iscSU をそれぞれ導入した場合は、空ベクターの場合と同様、全く相補能が見られなかった(デ ータは示していない)が、pHCMC05-Ec sufSE を導入した場合には、MVA を含まない培 地でも生育できるようになり、相補能が観察できた (Fig. 23)。同様に、枯草菌∆sufU株 の場合も、pHCMC05-Ec csdAE、または -Ec iscSU では相補できなかったが、-Ec sufSE を導入した場合には相補能が認められた (Fig. 23)。これらの結果は、枯草菌の SufS と SufU という2成分の機能は、大腸菌の SufS と SufE とのペアによって代替することが できるが、大腸菌の IscS と IscU (SufU ホモログ)のペア、または CsdA と CsdE のペア では代替できないことを示している。この点をさらに確認するため、枯草菌ΔsufSU株 を用いて同様の相補実験を行った。枯草菌ΔsufSU 株においても枯草菌の sufSU を pHCMC05-Bs sufSUプラスミドの形で再導入すると、表現型が野生株に回復した。この 変異株に、大腸菌の sufSE または iscSU、csdAE を導入して相補能を検討したところ、 *sufSE* のみが相補能を示した (Fig. 23)。 また、 大腸菌 *sufSE* を導入した相補株の生育は、 枯草菌 sufSU を戻した場合とくらべてほとんど遜色がなかった。

大腸菌の SufE は、硫黄原子を persulfide (-SSH)の形で Cys51の側鎖に結合して、SufS から SufBCD 複合体まで運搬することが知られている (Outten *et al.*, 2004; Singh *et al.*,

2013)。そこで、大腸菌 sufSE の中の SufE\_Cys51 を部位特異的に Ala に置換して枯草菌 ΔsufSU 株に導入したところ、形質転換体は MVA を含まない培地では生育することがで きず、相補能が消失した。大腸菌 SufE の Cys51 は、枯草菌細胞内で機能する際にも必 須であることを示している。したがって、大腸菌の sufSE を導入した相補株では、大腸 菌の SufS から大腸菌 SufE の Cys51 に硫黄原子が渡され、さらに枯草菌の SufBCD 複合 体に渡されて、Fe-S クラスターが新規に形成すると考えられる。枯草菌のΔsufS 株に大 腸菌の sufS を導入しても相補されなかったのは、大腸菌 SufS と枯草菌 SufU との間で 相互作用できないことが原因だろう。同様に、枯草菌ΔsufU 株が大腸菌 sufE で相補され なかったのは、枯草菌 SufS と大腸菌 SufE との間の相互作用に支障があるためと考えら れる。一方、相補の見られなかった他の組み合わせでは、大腸菌の IscU または CsdE と 枯草菌の SufBCD 複合体との間の相互作用に支障がある可能性が高い。

## 2.3.2 大腸菌変異株用いた異種間相補解析

大腸菌 UT109 変異株 (Tokumoto et al., 2004) は、ゲノム上の suf オペロンと isc オペ ロンを二重に欠失している (ΔsufABCDSE ΔiscUA-hscBA)。この変異株に、MVA 経路の 遺伝子群がクローン化された pUMV22 Sp<sup>r</sup> プラスミドを導入しておくと、MVA 存在下 でのみ生育させることができる (Tanaka et al., 2016)。大腸菌 suf オペロンの発現は、通 常の生育条件では抑えられている (Outten et al., 2004; Jang and Imlay, 2010) が、Plac プ ロモーター下に sufABCDSE を組み込んだプラスミド (pRKSUF017) を UT109 株に導入 すると、野生株と同等に生育させることができる。そこで本研究では、この pRKSUF017 プラスミドから suf 遺伝子のコード域をひとつずつ (または sufSE の 2 遺伝子をまとめ て) 欠失させた 6 種類のプラスミド (pRKSUF $\Delta sufB$ 、 $\Delta sufC$ 、 $\Delta sufD$ 、 $\Delta sufS$ 、 $\Delta sufE$ 、 $\Delta sufSE$ ) を構築し、利用することにした。これらのプラスミドを導入した UT109 細胞をそれぞ れ、 $\Delta sufB$ 、 $\Delta sufC$ 、 $\Delta sufD$ 、 $\Delta sufS$ 、 $\Delta sufE$ 、 $\Delta sufSE$  と表すことにする。これらの変異株に、 suf オペロンのメンバーが揃うように別のプラスミド (pBBR) で遺伝子を導入すると (例えば、 $\Delta sufB$ 株の場合は pBBR-sufB を導入)、MVA を含まない培地でも野生株と同 様に生育することができるようになった (Fig. 24)。

これら大腸菌の  $\Delta suf$  株に対して枯草菌の対応する遺伝子を導入して、異種間での相 補が可能か検討した。大腸菌の  $\Delta sufC$  株と  $\Delta sufD$  株に、それぞれ枯草菌の sufC と sufDを導入すると MVA が無い培地でも生育できるように回復した。ただし、枯草菌 sufC を 導入した相補株の生育は遅く、相補は部分的であった (Fig. 24)。一方、大腸菌の  $\Delta sufB$ 、  $\Delta sufS$ 、  $\Delta sufE$  にそれぞれ、枯草菌 sufB、 sufS、 sufU を導入した場合には、相補性は見ら れなかった。ただし、  $\Delta sufS$ 、  $\Delta sufE$ 、  $\Delta sufSE$  株のそれぞれに、枯草菌の sufSU をペアに して導入すると生育は回復し、相補性が認められた (Fig. 24)。これらの結果は、2.3.1 で 述べた枯草菌変異株における異種間相補実験での結果とよく一致した。

以前 Marahiel のグループは、*in vitro* の実験で、枯草菌 SufU に Fe-S クラスターが再 構成できることから、SufU は大腸菌 IscU と同様に Fe-S クラスター新規形成の足場と して機能するという可能性を提唱している (Albrecht *et al.*, 2010; Albrecht *et al.*, 2011)。 しかし、『2.3.1 枯草菌の *suf* 様オペロン破壊株を用いた異種間相補解析』では、大腸菌 *iscSU* は、枯草菌 Δ*sufSU* 株を相補することができなかった。そこで次に、大腸菌 IscU の機能を、枯草菌 SufU が代替できるのかについて検討することにした。具体的には、 pUMV22 Sp<sup>r</sup>を持つ大腸菌変異株 NT1401 (Δ*iscS* Δ*sufABCDSE*) あるいは NT2001 (Δ*iscU* Δ*sufABCDSE*) に、枯草菌 *sufSU* をプラスミドの形で導入した。枯草菌 SufSU が大腸菌 IscSU の機能を代替できれば、MVA を含まない培地でも生育できるようになると考え たが、好気条件・嫌気条件どちらにおいても相補性はみられなかった (Fig. 25)。これら の結果をまとめると、枯草菌 SufSU については、大腸菌 SufSE との間には機能的な互 換性があるが、大腸菌 IscSU との間には互換性は見られないということになる。

# 2.3.3 SufB の種特異性を変化させるサプレッサー変異

上記のように、枯草菌と大腸菌を用いて双方向から異種間相補解析を行ったところ、 SufC と SufD はそれぞれ枯草菌と大腸菌の間で入れ替えることができたので、機能的な 互換性があると考えられる。しかし、SufB では、枯草菌と大腸菌の間で 41%という高 い相同性あるにもかかわらず (Fig. 6)、互換性が認められなかった (Fig. 23, Fig. 24)。そ こで、枯草菌 *sufB* にエラープローン PCR によってランダムな変異を導入し、大腸菌 Δ*sufB* を相補するサプレッサー変異が得られるか検討した。数千の形質転換体について 調べてみると、MVA を含まない培地でも(ゆっくりとではあるが)生育できるように 変化したものが 29 種類現れた。それらからプラスミドを回収して塩基配列を解析した ところ 5 種類の変異が見つかり、それぞれ SufB の中に 1 アミノ酸置換が生じていた。 Met312Lys または Val354Ala、Asp376Ala、Asp387Gly、Ile464Thr のいずれかの置換であ る。変異の入ったプラスミドを大腸菌 Δ*sufB* 株に再導入してみると、初めに得られたコ ロニーと同様に、MVA を含まない培地でもゆっくりと生育し、部分的な相補性を示し た (Fig. 26)。これらの実験から、上記のアミノ酸置換がサプレッサー変異の要因である と特定することができた。また逆に、当研究室の陳によって、枯草菌 Δ*sufB* を相補でき るように変化させる大腸菌 SufB 内のサプレッサー変異 (Lys484Arg) も同定された。(陳、

62

2018 年修士論文)。したがって、枯草菌と大腸菌の SufB は、いずれも1 つのアミノ酸が置換すれば、種の壁を越えて互いに代替できるようになることが分かった。

#### 2.3.4 枯草菌 SufU で保存されたアミノ酸の機能性

IscU と SufU の間では、3 残基の Cys と 1 残基の Asp が保存されている (Fig. 4)。こ れらの残基は、IscU において Fe-S クラスターの新規形成部位として機能するために必 須であり、他の 19 種類に置換すると機能できなくなる (Johnson *et al.*, 2006; 田中 2016 年博士論文)。本研究では、修士 2 年の寺畑と共同して、大腸菌 IscU の必須残基に対応 する枯草菌 SufU のアミノ酸残基 (Cys41、Cys66、Cys128、Asp43) を他のアミノ酸に置 換し、枯草菌 Δ*sufU* 株へ再導入して、それらの機能性を相補実験で評価した。

第1章でも述べたように、枯草菌  $\Delta sufU$ 株に、野生型 sufUをプラスミドの形で再導入すると、培地に添加した MVA の有無にかかわらず生育できるようになり、その表現型は完全に相補される (Fig. 23)。SufU の Cys41 と Cys66 (大腸菌 IscU の Cys37 と Cys63 に対応)をそれぞれ、Ser、Asp、His へ置換した場合、形質転換体は MVA を含む培地でのみ生育し、相補性は見られなくなった (Fig. 27, 寺畑、2018 年修士論文)。一方、Cys128 (大腸菌 IscU の Cys106 に対応)を Asp に置換したところ、MVA の無い培地でもゆっくりと生育し、枯草菌の sufU欠失を部分的にではあるが相補することができた。また、Asp43 (大腸菌 IscU の Asp39 に対応)を、Glu あるいは Cys に置換した場合には、野生株並みに生育でき、表現型が完全に相補された (Fig. 27)。したがって、枯草菌の SufU では、Cys128 と Asp43 をそれぞれ他のアミノ酸に置換しても、(程度は異なるが)その

機能性が維持されることがわかった。大腸菌 IscU で必須な4 残基のうち、枯草菌 SufU では、少なくともこれら2 残基は必須ではないことを示している。したがって、大腸菌 IscU と枯草菌 SufU では、これらのアミノ酸残基(大腸菌 IscU の Cys106 と Asp39、枯草菌 SufU の Cys128 と Asp43)の機能的な重要性は異なると考えられる。

## 2.3.5 IscU/SufU の分子系統解析

データベース MBGD (<u>http://mbgd.genome.ad.jp/</u>) を利用して、653 種類のゲノム配列 (真正細菌 559 種、古細菌 55 種、真核生物 39 種を含む)から、IscU/SufU に相同な 794 種類の配列を取得した。これらの配列について近隣結合法 (Neighbor-joining method) で 系統樹を作成したところ、根元で大きく 2 つに分岐しており (Group 1 と 2)、その 2 つ のグループはそれぞれ 3 つ (a、b、c) のサブグループに分けることができた (Fig. 28)。

Group 1a(IscU サブファミリー)には、214 個の遺伝子産物(全体の 27%)が分類された。このグループでは、 $\alpha$ -、 $\beta$ -、 $\gamma$ -プロテオバクテリアが大多数を占めており、その他のバクテリアとしては、 $\delta$ -proteobacteria の一部、Acidobacteria の一部、Bacteroidetes の一部、Chlorobi の一部、Nitrospirae が含まれていた。これらバクテリアのほとんどでは*iscU* 遺伝子の周辺に、ISC マシナリーの他の成分をコードする遺伝子群(*iscS、iscA、hscB、hscA、fdx*)がコードされている。したがって、このサブファミリーに属する IscU は、典型的な ISC マシナリーにおける中心成分として Fe-S クラスター新規形成の機能を担うと考えられる。ただし、興味深いことに、 $\beta$ -プロテオバクテリアのごく一部(*Zinderia insecticola*、*Tremblaya princeps*、*Nasuia deltocephalinicola*、*Castellaniella* 

*defragrans、Pusillimonas* sp.) では、*hscB* 遺伝子がゲノムから欠落していた。HscB は J ドメインを持つコシャペロンで、Hsp70ファミリーに属する分子シャペロン HscA と協 調して、IscUと特異的に結合する成分である (Kim et al., 2012)。HscAは IscU内の LPPVK 配列に結合することが知られていが、Z. insecticola、N. deltocephalinicola、C. defragrans の IscU ではそれぞれ、LSPIK、LAADK、LPIIK に変化していた(T. princeps, Pusillimonas sp.の IscU では LPPVK 配列は保存されている)。HscA-HscB は大腸菌 ISC マシナリーの 必須成分だが、最近の研究では、IscU 内の点変異によってそれらの機能がバイパスされ ることが示されている (Tanaka et al., 2016)。したがって、HscB を持たない生物であっ ても、IscU ホモログが Fe-S クラスターの新規形成部位として機能することは十分に考 え得る。一方、真核生物の IscU ホモログ (Isu/ISCU) は全て、このサブファミリーに 分類され、これらホモログのいくつかはミトコンドリアやマイトソームにおいて ISC マ シナリーの成分として機能することが実験的に示されている (Mühlenhoff et al., 2003; Tovar et al., 2003; Tong and Rouault, 2006)。ただし、真核生物においても、HscBのホモロ グがゲノムに見当たらない場合があった (Dictyostelium discoideum、Babesia bovis、 *Neospora caninum、Leishmania major、Trypanosoma brucei*)。真核生物の HscB は保存性が 低いため、BLAST 検索で同定できなかったのかもしれない。

NIF マシナリーの主要成分である NifU は、IscU に相同な N 末端ドメインと Fer2\_BFD ドメインと呼ばれる中央ドメイン、C 末端の Nfu ドメインから構成されている。本研究 では、中央ドメインと C 末端ドメインの配列を削った後に系統解析を行ったが、それら の配列は全て Group 1b の単系統に分類された。この NifU サブファミリーには、81 の配 列(全体の 10.2%)が含まれている。

Group 1c (IscU-like サブファミリー)には、147 種類の配列(全体の 18.5%)が含まれ

ているが、この Group 1c は複数の系統から構成されており、配列にも多様性がみられ る。ただし、Group 1aの IscU において重要なアミノ酸残基(大腸菌 IscU における Cys37、 Asp39、Cys63、His105、Cys106)は、Group 1b NifU サブファミリーに含まれるすべて の配列と、Group 1c IscU-like サブファミリーの大多数(130/147、88.4%) で保存されて いる (Fig. 29)。したがって、この Group 1c サブファミリーのメンバーの多くは (全てで はないかもしれないが)、IscU や NifU のように Fe-S クラスターの新規形成部位として 機能すると推定される。このサブファミリーの配列をコードしている生物のゲノムでは、 IscS のホモログはコードされているものの、それ以外の ISC マシナリーの補助的成分 (HscB、IscA、Fdx) はほとんど見られない。また興味深いことに、Group 1c に含まれる 配列のうち、Chlorobi やいくつかの Spirochaetes の配列では、IscU-like 配列の C 末端側 に NifU の中央ドメインの配列が付加しているものが見られる(ただし NifU の C 末端 ドメインは無い)。また、この Group 1c の配列をコードしている生物のほとんどは偏性 嫌気性の細菌または古細菌である。これらの知見を総合すると、IscU-like サブファミリ ーのタンパク質は IscS ホモログと共同して、嫌気的な環境下において(酸素に対して 不安定な) Fe-S クラスターを組み立てることができる生合成系として機能するのでは ないかと考えられる。

Group 2 は、進化の初期段階で上記の Group 1 から分岐している (Fig. 28)。枯草菌 SufU が含まれる Group 2b (SufU サブファミリー) は、214 種類の配列 (全体の 27%) から構 成されている。IscU と比べると IscU の機能に重要な 2 番目と 3 番目の Cys 残基の間に 約 20 アミノ酸の挿入がみられ (214/214、100%)、また、そのほとんどで、IscU の His (大腸菌 IscU では His105) が Lys へと置換している (203/214、94.9%) (残りの約 5% は His、Lys 以外のアミノ酸へ置換) (Fig. 29)。この SufU サブファミリーをコードする 遺伝子のほとんどは、SUF マシナリーの他の成分 (SufS、SufB、SufC、SufD) の遺伝子
群と近接している(183/214、85.5%)ため、この Group 2b SufU サブファミリーのタンパク質は、枯草菌と同様に SUF 様マシナリーの成分として機能すると考えられる。

Group 2c は、69 個の配列(全体の 8.7%)を含んでおり、そのほとんどは α-プロテオ バクテリアに見られる。このサブファミリーの配列には、SufU (Group 2b) と同様に、 IscU の 2 番目と 3 番目の Cys 残基の間に約 20 アミノ酸の挿入が見られるが、3 番目の Cys が Ser に置換している点が特徴的である (Fig. 29)。α-プロテオバクテリアに属する 根粒菌の一種、*Sinorhizobium meliloti* では、SUF 関連因子として *sufBCDSTA* 遺伝子クラ スター (Sasaki *et al.*, 2016) と、そこから離れたところに、この Group 2c に属する SufU 様タンパク質 (SMC01006) と SufE (SMC00118) が個別にコードされている。当研究室 では、大腸菌変異株を用いた相補実験によって、*S. meliloti* の SufBCDS が、Group 2c の SufU とではなく、SufE と協調して Fe-S クラスターの生合成を遂行できることが示され ている (齋藤、2015 年卒業論文)。この Group 2c SufU の機能については、現在のとこ ろ不明である。

Group 2b や 2c の系統とは早い段階で分岐した、いくつかの系統の SufU 様配列を、ま とめて Group 2a とした。これらの中で、Group 2b と 2c との間で分岐した多数派(55/ 69、80%)では、興味深いことに、2 番目と 3 番目の Cys 残基の間の長さは IscU とほぼ 同様で、20 アミノ酸程度の挿入は見られないが、少数派の配列の中にはこの挿入配列 を持つものもある。いずれにせよ、Group 2a の SufU 様タンパク質をコードする遺伝子 のほとんどは *sufS* と近接しており(55/69、80%)、このペアで硫黄の供与体として機 能すると推定される。ただし、SufB、SufC、SufD をコードする遺伝子群が近接してい るものは半数に満たない(28/69、40.6%)。また、Group 2a の少数派の中には、Mollicutes の配列も含まれている。そのひとつ、*Mycoplasma genitalium* は、ゲノムの中に Fe-S タ ンパク質や Fe-S クラスター生合成系の遺伝子群が見られないという、数少ない生物の 一つである (Tokumoto *et al.*, 2004)。したがって、この Group 2a の SufU 様タンパク質の 中には、Fe-S クラスター生合成に関与するものだけでなく、別の経路で硫黄の供与体と して機能するものも含まれており、系統的な面に加えて機能的にも多様なグループとし て捉える必要がある。

### 2.4 考察

本章では、枯草菌の suf 遺伝子破壊株に大腸菌の関連遺伝子を導入する、あるいは逆 に、大腸菌の変異株に枯草菌の遺伝子を導入するといった方法で、双方向の異種間相補 解析を進めた。さらに、種の壁を越えるサプレッサー変異や、部位特異的変異の影響、 SufU/IscU の分子系統などを解析した結果、枯草菌 sufCDSUB にコードされる SUF 様マ シナリーの実体、SufU と IscU の機能分化、ならびに Fe-S クラスター生合成系の進化的 な変遷が浮かび上がってきた。

### 2.4.1 枯草菌 SUF 様マシナリーにおける SufBCD 複合体の機能

グラム陽性菌の SufBCD はアミノ酸配列の相同性から、大腸菌 SufBCD と同様に複合 体を形成し、Fe-S クラスターの新規形成機能を担うと推定されていた。しかし、SufB の 発現・精製が困難な(封入体になる)ため、生化学的な解析は全く進んでいなかった (Dos Santos, 2017)。本研究では、大腸菌/枯草菌の変異株をホストとした双方向の異種間相 補解析により、SufC と SufD は、どちらも大腸菌と枯草菌の間で機能的に互換性がある ことを明らかにした。一方、SufB は、そのままでは大腸菌と枯草菌の間で入れ替えるこ とはできなかったが、SufB に 1 アミノ酸の置換が入れば、種の壁を越えて機能できる ようになることがわかった。これらの知見から、枯草菌の SufBCD が大腸菌 SufBCD と 機能的に類似していることを、初めて実験的に示すことができた。したがって、枯草菌 の SufBCD は、大腸菌と同様に 1:2:1 の複合体を形成し、その複合体で Fe-S クラスター を新規に組み立てると考えられる。最近、大腸菌の SufB<sub>1</sub>C<sub>2</sub>D<sub>1</sub> 複合体の結晶構造が明ら かにされ (Fig. 5A)、加えて、*in vivo* における系統的な変異導入解析や、*in vitro* におけ る生化学的な解析から、複合体の作動機序についてのアウトラインが明らかにされてい る (Hirabayashi *et al.*, 2015; Yuda *et al.*, 2017)。それらの報告によると、1)大腸菌 SUFマ シナリーでは、硫黄原子が SufS から SufE へ、次いで SufBCD 複合体内の SufB の Cys254 へと渡される。2) 硫黄原子は、おそらく還元されることで Cys254 から遊離し、SufB の  $\beta$ -ヘリックスコアドメイン内部を貫くトンネルを通って、Cys405 へと移動する。3) SufBCD 複合体内に含まれる 2 分子の SufC は、2 分子の ATP をサンドイッチにして会 合し、それによって SufB と SufD の会合面に大きな構造変化を引き起す。4) その構造 変化によって、SufB と SufD の会合面に位置している SufB の Cys405 と Glu434、SufD の His360 が溶媒に露出し、これららを配位子として Fe-S クラスターが新規に形成される、 と考えられる (Fig. 5B)。重要なことに、これら一連の反応に不可欠な大腸菌 SufBCD の アミノ酸残基 (SufB の Arg226、Asn228、Cys254、Gln285、Trp287、Lys303、Cys405、 Glu434 ; SufC の Lys40、Glu171、His203 ; SufD の His360) は全て、枯草菌 SufBCD で も保存されている (Fig. 30, Fig. 31, Fig. 32)。

本研究では、修士 2 年の陳と共同で、SufB の種特異性を変化させるサプレッサー変 異(枯草菌 SufB では Met312Lys, Val354Ala, Asp376Gly, Asp387Gly, Ile464Thr、大腸菌 SufB では Lys484Arg)を明らかにした。これらのうち、異種 SufB と同じアミノ酸に置 換したのは、大腸菌 SufB K484R のみだった。枯草菌の SufB で見られた Met312Lys、 Val354Ala、Asp376Gly、Asp387Gly、Ile464Thr はすべて、大腸菌 SufB とは異なるアミ ノ酸への置換である。これらのうち Asp376Gly では、意外なことに、大腸菌 SufB でも Asp 残基 (Asp406 に相当)が保存されているにもかかわらず (Fig. 30)、別のアミノ酸 (Gly) へ置換していた。したがって、これらのサプレッサー変異の多くは、異種間で同 ーのアミノ酸になるよう置換したというわけではない。大腸菌の SufBCD 複合体の結晶 構造に基づいて、枯草菌 SufB のホモロジーモデリングを行い、このモデル構造に 5 種類のアミノ酸置換を当てはめてみた (Fig. 33) ところ、枯草菌 SufB Met312Lys、Val354Ala、 Asp376Gly、Asp387Gly は、 $\beta$ -ヘリックスコアドメイン内に位置している。これらのうち Asp376Gly は、上述の必須な Cys 残基 (大腸菌 SufB の Cys405 に相当) に隣接しているが (Fig. 30)、他の3 種類の置換は、離れたところに散在していた。また、枯草菌 SufB の Ile464Thr と、大腸菌 SufB の Lys484Arg は C 末端  $\alpha$ -ヘリックスドメイン内に位置していた。この構造を見る限り、これらのサプレッサー変異はどれも、SufC、あるいは、SufD との相互作用に直接関与するとは考えにくい。これら種特異性を変化させるサプレッサー変異の役割については、今後、様々なアプローチで検討していく必要がある。

### 2.4.2 枯草菌 SUF 様マシナリーにおける SufU の機能

グラム陽性細菌の SUF様マシナリーで最も特徴的なのは、大腸菌 SUF マシナリーで 用いられる SufE の代わりに、U タイプの足場タンパク質のホモログである SufU が含 まれている点である。これまでの *in vitro* の研究によって、枯草菌のシステイン脱硫黄 酵素 SufS から SufU へと硫黄原子が受け渡されることが明確に示されているが、その 硫黄原子を受け取った SufU が、Fe-S クラスター新規形成の足場として機能するのか、 あるいは、硫黄原子のキャリアとして機能するのか、議論が続いていた (Albrecht *et al.*, 2010; Selbach *et al.*, 2010; Albrecht *et al.*, 2011; Selbach *et al.*, 2014)。この課題に対して、本 研究では、双方向の異種間相補解析を進め、枯草菌 SufSU と大腸菌 SufSE が *in vivo* で 代替可能であることを初めて示した。上述のように、大腸菌 SUF マシナリーでは、ま

ず、システイン脱硫黄酵素 SufS が L-システインから硫黄原子を引き抜き、それを SufE の Cys51 に受け渡す。その後、SufE がキャリアとして硫黄原子を SufBCD 複合体へ渡 し、そこで Fe-S クラスターが新規に形成される (Loiseau et al., 2003; Outten et al., 2003; Layer et al., 2007)。したがって、枯草菌 SufSU と大腸菌 SufSE に機能的な互換性がある ということは、in vivo において、大腸菌 SufSE が枯草菌の SufBCD 複合体へと硫黄原子 を渡し、また逆に、枯草菌 SufSU が大腸菌の SufBCD 複合体へと硫黄原子を渡すことを 示している。大腸菌 SufE の Cys51 を Ala に置換すると異種間での相補性が見られなく なる (Fig. 23) ことからも、硫黄原子は大腸菌 SufE の Cys51 を経由して、枯草菌の SufBCD 複合体へ渡されるという経路が支持される。枯草菌 SufU と大腸菌 SufE の間で は、アミノ酸配列には相同性が見られないが、立体構造には類似性があり、大腸菌 SufE で硫黄原子を結合する Cys51 と同じような位置に、枯草菌 SufU では Cys41 が存在して いる (Fig. 34) 。大腸菌では、SufE の Cys51 から SufB の Cys254 へと硫黄原子が受け渡 される (Yuda et al., 2017) が、この SufB Cys254 は、β-ヘリックスコアドメインのN末 端側に位置しており、枯草菌 SufB でも保存されている (Cys231)。また、これらの Cys 残基の周囲のアミノ酸残基もまた、大腸菌と枯草菌の間でよく保存されている (Fig. 35)。 それらの保存残基の中で、Arg226 と Asn228 は、大腸菌 SufB の *in vivo* 機能に重要であ ることも示されている (Yuda et al., 2017)。これらのアミノ酸残基が、大腸菌 SufE と枯 草菌 SufB との相互作用、また逆に、枯草菌 SufU と大腸菌 SufB との相互作用に関与す ると推定できる。

大腸菌の ISC マシナリーは 7 種類の成分から構成されているが、近年、SUF マシナ リーを欠失させたバックグラウンドにおいて *isc* オペロン (*iscSUA-hscBA-fdx-iscX*)の個 別遺伝子を破壊した変異株が構築され、それらの解析から、ISC マシナリーで常に必要 となる成分はシステイン脱硫黄酵素 IscS と Fe-S クラスター形成の足場となる IscU の 2 種類のみであることが示されている (Tanaka*et al.*,2016)。IscA と Fdx は、好気条件下で は必須だが嫌気条件下では必須ではない。電子供与体としての Fdx の機能は、嫌気条件 下では還元力が過剰になってバイパスされ、IscA については、酸素に対して不安定な Fe-S クラスターを保護しつつ運搬するために必要ではないかと推定されている。また、 HscAとHscBのシャペロン-コシャペロン機能は好気・嫌気両条件で必須だが、IscU分 子内の1アミノ酸置換によってバイパスされることも示された。したがって、ISCマシ ナリーの7種類の成分は、必須成分である IscS と IscU、補助的な成分である IscA、Fdx、 HscA と HscB、不必要な(必要性が不明な)成分 IscX に分類することができる。この 大腸菌 IscU と枯草菌 SufU とは、一次構造から立体構造までよく似ている (Fig. 4, Fig. 29, Fig. 34)。しかし本研究では、異種間の相補実験において、大腸菌 IscSU は、枯草菌 の  $\Delta sufS$  株、 $\Delta sufU$  株や  $\Delta sufSU$  株を相補することはできなかった (Fig. 23)。また逆に、 枯草菌 SufSU では、好気/嫌気条件のどちらにおいても、大腸菌 ΔiscS 株や ΔiscU 株を 相補することができなかった (Fig.25)。また、IscU と SufU では、保存されている 3 残 基の Cys と1残基の Asp の機能性にも違いが見られた。大腸菌 IscU において Cys37、 Cys63、Cys106 と Asp39 は Fe-S クラスター形成の足場として機能するために必須で、 どれも他の 19 種類のアミノ酸に置換すると機能不全になる(田中、2016年博士論文) が、SufUではこのうち2つの残基を別のアミノ酸に置換することができた (Fig. 27)。

SufUにおいて、これら3残基の Cys と1残基の Asp は、分子表面で亜鉛イオンを配 位している (Selbach *et al.*, 2014)。これらのうち、SufU の Asp43 は、亜鉛を配位するこ との可能な Glu または Cys では機能的な置換が可能であったが、亜鉛を配位すること のできない Asn や Gln では置換することができなかった (Fig. 27, 寺畑、2018 年修士論 文)。Dos Santos のグループは、枯草菌 SufU から亜鉛を人為的に除去すると二次構造が 変化すること、また、枯草菌 SufS からの硫黄転移活性が失われることを報告している

73

(Selbach et al., 2014)。さらに重要なことに、当研究室では最近、枯草菌 SufSU 複合体の 結晶構造が決定され、複合体形成に伴って、亜鉛に対する配位子の掛け替えが起こるこ とが明らかにされた (Fig. 36)。すなわち、SufU の Cys41 に代わって SufS の His342 が 亜鉛の配位子となり、SufS と SufU との会合に寄与することがわかった。このとき、SufU の Cys41 は亜鉛から外れることでフリーな -SH 状態となり、SufS の活性中心である Cys361 から硫黄原子を受け取ることができるようになる (Fujishiro et al., 2017)。この SufSU 複合体の構造から、枯草菌 SufU が亜鉛を保持することは、構造の安定性だけで なく機能的にも重要だということが明確に示された。したがって、本研究で得られた知 見を総合すると、枯草菌 SufU は亜鉛に依存した硫黄原子のキャリアタンパク質であり、 SufS から SufBCD に硫黄原子を運搬する機能を担うと結論することができる (Fig. 37)。 ただし、この硫黄原子のキャリアという機能に加えて、SufU が Fe-S クラスターの新規 形成部位としても働くことができるかどうかについては、可能性は非常に低いと思われ るが、現段階では完全に排除することはできない。この可能性については、別のアプロ ーチ (in vitro における生化学的、分光学的研究) で検証または否定されるべきである。

#### 2.4.3 IscU/SufU の機能分化と Fe-S クラスター生合成系の進化的変遷

一部の寄生性バクテリア(Borrelia burgdorferi、Mycoplasma genitalium など)を除いて、 全ての生き物は複数の(多種多様な) Fe-S タンパク質を有しているが、それらに Fe-S クラスターを供給する生合成系にもいくつかのバリエーションが見られる。Fe-S クラ スター生合成系の成分の中で、最も広範に分布しているのは SufB と SufC である。メタ ン生成古細菌 Methanococcus maripaludis などではゲノム上に sufCB のみがコードされて おり、それらの産物は SufB<sub>2</sub>SufC<sub>2</sub>複合体として機能すると予想されている (Boyd *et al.*, 2014)。Fe-S クラスターの硫黄源としては、システインではなく、これらメタン菌の棲息環境に豊富に存在する S<sup>2-</sup>が直接用いられることが示されている (Liu *et al.*, 2010)。別の古細菌、*Thermoplasma acidophilum* などでは、ゲノム上に *sufCBD* がコードされている。SufD は SufB と相同なタンパク質で、SufB の遺伝子重複によって生じたものである。これによって SufB<sub>2</sub>SufC<sub>2</sub>複合体の SufB 1 分子が SufD に置き換わり、SufB<sub>1</sub>SufC<sub>2</sub>SufD<sub>1</sub> 複合体として機能するようになったと考えられている。SufD の役割は不明だが、嫌気 環境から好気環境への適応に関連しているのではないかと推定されている (Boyd *et al.*, 2014)。

S<sup>2</sup>が豊富に存在するのは一部の嫌気的な環境に限られている。そのため多くの生き物 は、システインから脱硫黄酵素 (SufS、IscS、NifS) が硫黄原子を引き抜いて、Fe-S ク ラスターの硫黄源としている。システイン脱硫黄酵素は分子系統的に Group I と Group II に分けられ (Mihara *et al.*, 1997)、そのうち、Group I に属する IscS と NifS は、Fe-S ク ラスターの新規形成の足場タンパク質である IscU と NifU にそれぞれ直接硫黄原子を 供給している。加えて、Group I システイン脱硫黄酵素のメンバーの中には、tRNA の硫 黄修飾などに特化したものも含まれている (Rajakovich *et al.*, 2012; Black and Dos Santos, 2015a)。一方、Group II に属する SufS はキャリアタンパク質である SufE/SufU を介して SufBCD 複合体に硫黄原子を供給しているが、大腸菌 CsdA のように CsdE を介して、 tRNA の修飾に関与するものもある。

本研究では、IscUとSufUの分子系統解析によって、これらは共通祖先の遺伝子重複 によって生じ、その後に機能分化を果たして、一方はFe-Sクラスター形成の足場とし て、他方は硫黄原子のキャリアとして進化してきたと推定した (Fig. 28, Fig. 38)。SufE

75

は、SufU とはアミノ酸配列の相同性が見られないことから、収斂進化によって生じた と考えられる。SufU と SufE の分布を比較してみると、SufE を有する生物は、α-、γ-プ ロテオバクテリアと一部のシアノバクテリア (葉緑体を含む)などに限らている。一方、 SufU は、Actinobacteria 全般、Firmicutes の中の Bacilli、Thermotogae、Spirochaetes、 Cyanobacetria の一部とより広範に分布している。したがって、SUF マシナリーの進化に おいては、まず Group II の SufS が Group 2b の SufU と共同して SufBCD 複合体に硫黄 原子を供給するようになり、次いで、硫黄原子のキャリアとしての SufU の機能が、SufE に置換したと推定される。SufE と相同性の高い CsdE の結晶構造によると、このタンパ ク質単体では硫黄原子を受け取る Cys61 残基が分子内部に格納されているが、システイ ン脱硫黄酵素 CsdA と会合すると、局所的なコンフォメーション変化によって Cys61 が 分子表面に突き出すことが示されている (Kim and Park, 2013)。このような構造変化は、 酸素に対する防御機構 (-SH 基や -SSH を酸化されないように保護する) として、好気 的な条件下ではより適合している可能性が考えられる。

IscU と SufU の分子系統解析によって分類した 6 グループの内、Group 2c のメンバー の役割は全く不明であり、Group 2a の中にも役割の不明なものが含まれている。一方、 Group 1 の方では、これまでよく調べられている ISC マシナリーの IscU (Group 1a)、NIF マシナリーの NifU (Group 1b) 以外にも、IscU-like なタンパク質が多数含まれているこ とが分かった (Group 1c)。Group 2 の配列とは異なり、Group 1c の配列では、IscU や NifU において Fe-S クラスターの新規形成機能に必須な残基 (大腸菌 IscU では Tyr3、Cys37、 Asp39、Cys63、Lys103、His105、Cys106)の全てが保存されている (Fig. 29)。Group 1c の *iscU*-like 遺伝子のほとんどは、Group I システイン脱硫黄酵素 (IscS、NifS)の遺伝子 に隣接してコードされているが、*iscU* (Group 1a)の場合とは異なり、ISC マシナリーの 他の補助的メンバーはほとんど見あたらない。さらに興味深いことに、このグループに は SUF マシナリー (SufB) を持たない生物が多く含まれている。したがって、これらの 生物では、Group 1c の IscU-like タンパク質が Group I システイン脱硫黄酵素と共同し て、唯一の Fe-S クラスター生合成系として機能しているという可能性が考えられる。 これらを保持しているのは偏性嫌気性の細菌と古細菌であり、大腸菌 ISC マシナリーの 性質 (IscU と IscS のみが常に必須) とも合致する。これらの知見を総合すると、Group 1c の IscU-like タンパク質とシステイン脱硫黄酵素は、嫌気的な環境下で機能すること のできる、ISC マシナリーのプロトタイプとして捉えることができる。Group 1c の中で は例外的だが、*Chlorobaculum tepidum* の IscU-like タンパク質は C 末端側に NifU の中央 ドメインが融合している(ただし、NifU の C 末端ドメインは融合していない)。実際に、 このタンパク質を C. tepidum の IscS と大腸菌で共発現させると、嫌気的な条件でのみ、 大腸菌 Δ*isc* Δ*suf* 変異株を相補することができる(関、2017 年 卒業論文)。ただし、NifU の中央ドメインを持たない、Group 1c の IscU-like タンパク質の機能については、今後 の実験で検証する必要がある。

#### 2.5 今後の展望

これまで述べてきたように、本研究では、枯草菌 SUF 様マシナリーの特性や作動機 構、IscU/SufU タンパク質の機能分化、ならびに Fe-S クラスター生合成系の進化のアウ トラインについて明らかにすることができた。最後に、この分野の研究で残されている 課題や、本研究によって新たに浮かび上がってきた問題点を整理する。

- SufBCD 複合体の作動機構:この複合体には鉄イオンと硫黄原子が集められ、大き な構造変化を利用して、Fe-S クラスターが新規に形成されると考えられている。 その具体的なメカニズムを理解するためには、今後、構造変化の実体や、不安定な クラスターを保持した状態の構造を捉える必要がある。分子動力学シミュレーシ ョンも、アプローチのひとつとして有効かもしれない。
- 2. SufBCD 複合体からアボ型タンパク質への Fe-S クラスターの輸送:大腸菌や酵母では、いくつかの補助的タンパク質(IscA/SufA、NfuA、GrxD、BolA、YgfZ、ApbC、Cia2 など)の働きによって、Fe-S クラスターがアボ型タンパク質に輸送されるのではないかと考えられているが、不明な点が多い。それら補助的タンパク質群は、生物種によってもバリエーションが大きく、枯草菌のゲノムにコードされているのは、3 種類(SufA、Nfu、SufT)のみである。当研究室では、これらの遺伝子の単独破壊株が構築されたが、その生育は、野生株とほとんど変わらなかった。枯草菌でこれら3 成分の機能が関連、あるいは重複している可能性が考えられ、これらの多重破壊株を用いた研究が進められている(飴野、2016 年修士論文)。補助的タンパク質群がどのように協調して、あるいは、役割分担して、不安定な Fe-S クラスターを壊さないように輸送しているのか、また、多種多様なアポ型タンパク質を

どのようにして認識・識別しているのか、今後の Fe-S クラスター生合成研究にお ける最大の課題かもしれない。

- 3. SufB における種特異性: SufB については枯草菌と大腸菌との間で互換性が見られなかったが、この種間の壁は、いくつかの1アミノ酸置換によって超えられることを示した。今後はまず、これらのアミノ酸置換が、本来の機能に対してどのように影響するのか(あるいは影響しないのか)について確認する必要がある(陳、2018年修士論文)。また、SufB 内の1アミノ酸置換によって、SufB の性質がどのように変化し、異種の SufCD と共同できるようになるのか、まずは SufC、SufD との結合(SufBCD 複合体の形成能)が影響を受けるのかどうかを明らかにする必要がある。 生化学的アプローチでは、Pull-down アッセイや native-PAGE、ゲル濾過クロマトグラフィーを用いた解析が有効だと思われる。仮に、SufB 内のアミノ酸置換が複合体形成能に影響しないということになれば、SufBCD 複合体のコンフォメーション変化に影響する可能性が考えられる。その場合は、置換部位を別の(性質の異なる)アミノ酸に置換してみるというアプローチが有効になるかもしれない。上述のように、SufBCD 複合体の作動機構には未だ不明な点が残されており、その手掛かりになることを期待している。
- 4. システイン脱硫黄酵素とパートナータンパク質との特異性:本研究では、システイン脱硫黄酵素 (SufS)の単独では異種間で互換性が見られないことを示したが、サプレッサー変異の解析から、大腸菌 SufE に4アミノ酸の欠失 (111-114)が生じると、枯草菌 SufS と相互作用できるようになることを見出している (データは示していない)。今後、この4アミノ酸欠失型の SufE の性質を調べるとともに、単体、あるいは SufS との複合体の結晶化を試みる予定である (櫻井、2018 年卒業論文)。また、大腸菌 CsdAE や枯草菌 SufSU 複合体の X 線結晶構造解析から、システイン

脱硫黄酵素とそのパートナータンパク質間の相互作用に関与するアミノ酸残基が 明らかにされている (Kim and Park, 2013; Fujishiro *et al.*, 2017)。現在、これら相互 作用に関与するアミノ酸残基を種々のアミノ酸へ置換して、パートナーとの特異 性が変化するか検討している (李、2018 年卒業論文)。これらを足掛かりとして、 今後、システイン脱硫黄酵素とパートナータンパク質との特異性を左右する要因 が明らかにされることを期待している。

- 5. SufD の役割: SufD は SufB の遺伝子重複によって生じたもので、両者は立体構造 も良く似ている。ただし、大腸菌や枯草菌では SufD の必須残基 (His360) が SufB でも保存されているにもかかわらず、SufB2SufC2 複合体としては機能することがで きない。その理由を明らかにするために、当研究室では SufD と SufB のキメラタ ンパク質を構築して、SufD の機能に必須な領域をしぼりこむという実験が進めら れている (林、2018 年卒業論文)。
- 6. SufU/SufE 間の優劣:本研究で、SufU と SufE は共に硫黄原子のキャリアとして 機能すること、進化的には SufU の方が古いが、いくつかのバクテリアの系統で SufE に置換した可能性が高いことを示した。SufU に比べて SufE を用いる方が、 なんらかのメリットがあると考えられる。酸素に対する防御機構に優れていると いう可能性が考えられるが、この点は、生化学的に検証する必要がある。
- 7. Fe-S クラスター生合成マシナリーのプロトタイプ:メタン菌に見られる SufBC (SUFマシナリーのプロトタイプ)については、本当に Fe-S クラスター生合成系 として機能できるのか、実験的に確かめる必要がある。現在、当研究室ではメタン 生成古細菌の一種、*Methanocaldococcus jannaschii*の *sufCB*を大腸菌変異株で発現 させることによって、相補できるか検討されている(村田、2018 年卒業論文)。ま た本研究では、嫌気的ないくつかの生物では IscU-like タンパク質 (Group 1c)とシ

ステイン脱硫黄酵素の2成分で、Fe-Sクラスターの生合成系として機能する(ISC マシナリーのプロトタイプ)という可能性を示したが、この可能性についても実験 的に検証する必要がある。当研究室では、そのひとつ Heliobacterium modesticaldum の iscSU-like を用いて異種間の相補実験が行われているが、現在まで、嫌気条件に おいても大腸菌のΔisc Δsuf 変異株を相補することには成功していない(関、2017 年卒業論文)。一方、このような ISC マシナリーのプロトタイプは真正細菌の祖先 で生じた可能性が考えられるが、SUF マシナリーのプロトタイプ (SufBC)と比べ てどちらがより古いのか、また、どのように使い分けられてきたのか、という進化 の道筋も興味深い。

Fe-S クラスター生合成系については未だ多くの謎が残されている。今後、詳細な作動 機構が明らかにされることによって、不安定な Fe-S クラスターを自在に扱う道も見え てくるかもしれない。また、なぜ Fe-S クラスター生合成系がここまで多様化してきた のか?その道筋や意義に対して理解が深まることを期待している。本研究が、そのさき がけになれば望外の喜びである。

# 参考文献

- Abolbaghaei, A., Silke, J.R., and Xia, X. (2017) How changes in anti-SD sequences would affect SD sequences in *Escherichia coli* and *Bacillus subtilis*. *G3* **7**: 1607–1615.
- Agar, J.N., Krebs, C., Frazzon, J., Huynh, B.H., Dean, D.R., and Johnson, M.K. (2000) IscU as a scaffold for iron-sulfur cluster biosynthesis: Sequential assembly of [2Fe-2S] and [4Fe-4S] clusters in IscU. *Biochemistry* 39: 7856–7862.
- Albrecht, A.G., Netz, D.J. a, Miethke, M., Pierik, A.J., Burghaus, O., Peuckert, F., *et al.* (2010) SufU is an essential iron-sulfur cluster scaffold protein in *Bacillus subtilis*. *J Bacteriol* 192: 1643–1651.
- Albrecht, A.G., Peuckert, F., Landmann, H., Miethke, M., Seubert, A., and Marahiel, M.A.
  (2011) Mechanistic characterization of sulfur transfer from cysteine desulfurase SufS to the iron–sulfur scaffold SufU in *Bacillus subtilis*. *FEBS Lett* 585: 465–470.
- Ali, V., Shigeta, Y., Tokumoto, U., Takahashi, Y., and Nozaki, T. (2004) An intestinal parasitic protist, *Entamoeba histolytica*, possesses a non-redundant nitrogen fixation-like system for iron-sulfur cluster assembly under anaerobic conditions. *J Biol Chem* 279: 16863–16874.
- Anagnostopoulos, C., and Spizizen, J. (1961) Requirements for transformation in *Bacillus subtilis*. *J Bacteriol* **81**: 741–746.
- Andreini, C., Rosato, A., and Banci, L. (2017) The relationship between environmental dioxygen and iron-sulfur proteins explored at the genome level. *PLoS One* **12**: 1–15.
- Bak, D.W., and Elliott, S.J. (2014) Alternative FeS cluster ligands: tuning redox potentials and chemistry. *Curr Opin Chem Biol* 19: 50–58.
- Beinert, H. (1997) Iron-sulfur clusters: Nature's modular, multipurpose structures. Science 277:

653-659.

- Bergsma, J., Strijker, R., Alkema, J.Y.E., Seijen, H.G., and Konings, W.N. (1981) NADH dehydrogenase and NADH oxidation in membrane vesicles from *Bacillus subtilis*. *Eur J Biochem* 606: 599–606.
- Bergsma, J., Van-Dongen, M., and Konings, W.N. (1982) Purification and characterization of NADH dehydrogenase from *Bacillus subtilis*. *Eur J Biochem* 128: 151–157.
- Black, K.A., and Dos Santos, P.C. (2015a) Abbreviated pathway for biosynthesis of 2thiouridine in *Bacillus subtilis*. J Bacteriol 197: 1952–1962.
- Black, K.A., and Dos Santos, P.C. (2015b) Shared-intermediates in the biosynthesis of thiocofactors: Mechanism and functions of cysteine desulfurases and sulfur acceptors. *Biochim Biophys Acta* 1853: 1470–1480.
- Blanc, B., Clémancey, M., Latour, J.-M., Fontecave, M., and Ollagnier-de-Choudens, S. (2014)
   Molecular investigation of iron–sulfur cluster assembly scaffolds under stress.
   *Biochemistry* 4: 7867–7869.
- Booker, S.J., and Grove, T.L. (2010) Mechanistic and functional versatility of radical SAM enzymes. *F1000 Biol Rep* **2**: 52.
- Boyd, E.S., Thomas, K.M., Dai, Y., Boyd, J.M., and Outten, F.W. (2014) Interplay between oxygen and Fe-S cluster biogenesis: insights from the Suf pathway. *Biochemistry* 53: 5834–5847.
- Braymer, J.J., and Lill, R. (2017) Iron–sulfur cluster biogenesis and trafficking in mitochondria. *J Biol Chem* **292**: 12754–12763.
- Bron, S., Bolhuis, A., Tjalsma, H., Holsappel, S., Venema, G., and van-Dijl, J.M. (1998) Protein secretion and possible roles for multiple signal peptidases for precursor processing in Bacilli. *J Biotechnol* 64: 3–13.

- Cao, G., Zhang, X., Zhong, L., and Lu, Z. (2011) A modified electro-transformation method for *Bacillus subtilis* and its application in the production of antimicrobial lipopeptides. *Biotechnol Lett* 33: 1047–1051.
- Chandramouli, K., and Johnson, M.K. (2006) HscA and HscB stimulate [2Fe-2S] cluster transfer from IscU to apoferredoxin in an ATP-dependent reaction. *Biochemistry* **45**: 11087–11095.
- Cutting, S.M., and Vander Horn, P.B. (1990) Genetic analysis. In *Molecular Biology Methods* for Bacillus. Harwood, C.R., and Cutting, S.M. (eds). John Wiley & Sons Ltd., pp. 27–74.
- Dai, Y., Kim, D., Dong, G., Busenlehner, L.S., Frantom, P.A., and Outten, F.W. (2015) SufE
  D74R substitution alters active site loop dynamics to further enhance SufE interaction with
  the SufS cysteine desulfurase. *Biochemistry* 54: 4824–4833.
- Dai, Y., and Outten, F.W. (2012) The *E. coli* SufS-SufE sulfur transfer system is more resistant to oxidative stress than IscS-IscU. *FEBS Lett* 586: 4016–4022.
- Desnoyers, G., Morissette, A., Prévost, K., and Massé, E. (2009) Small RNA-induced differential degradation of the polycistronic mRNA iscRSUA. *EMBO J* 28: 1551–1561.
- Dos Santos, P.C. (2017) *B. subtilis* as a model for studying the assembly of Fe–S clusters in Gram-positive bacteria. *Methods Enzymol* **595**: 185–212.
- Dos Santos, P.C., Smith, A.D., Frazzon, J., Cash, V.L., Johnson, M.K., and Dean, D.R. (2004) Iron-sulfur cluster assembly: NifU-directed activation of the nitrogenase Fe protein. *J Biol Chem* **279**: 19705–19711.
- Duschene, K.S., Veneziano, S.E., Silver, S.C., and Broderick, J.B. (2009) Control of radical chemistry in the AdoMet radical enzymes. *Curr Opin Chem Biol* **13**: 74–83.
- Fujishiro, T., Terahata, T., Kunichika, K., Yokoyama, N., Maruyama, C., Asai, K., and Takahashi, Y. (2017) Zinc-ligand swapping mediated complex formation and sulfur

transfer between SufS and SufU for iron–sulfur cluster biogenesis in *Bacillus subtilis*. *J Am Chem Soc* **139**: 18464–18467.

- Fujita, Y. (2009) Carbon catabolite control of the metabolic network in *Bacillus subtilis*. *Biosci Biotechnol Biochem* 73: 245–259.
- Goldsmith-Fischman, S., Kuzin, A., Edstrom, W.C., Benach, J., Shastry, R., Xiao, R., *et al.*(2004) The SufE sulfur-acceptor protein contains a conserved core structure that mediates interdomain interactions in a variety of redox protein complexes. *J Mol Biol* 344: 549–565.
- Gupta, V., Sendra, M., Naik, S.G., Chahal, H.K., Huynh, B.H., Outten, F.W., *et al.* (2009)
  Native *Escherichia coli* SufA coexpressed with SufBCDSE purifies as a [2Fe-2S] protein and acts as an Fe-S transporter to Fe-S target enzymes. *J Am Chem Soc* 131: 6149–6153.
- Gyan, S., Shiohira, Y., Sato, I., Takeuchi, M., and Sato, T. (2006) Regulatory loop between redox sensing of the NADH / NAD<sup>+</sup> ratio by Rex (YdiH) and oxidation of NADH by NADH dehydrogenase Ndh in *Bacillus subtilis*. *J Bacteriol* **188**: 7062–7071.
- Henner, D.J. (1990) Inducible expression of regulatory genes in *Bacillus subtilis*. *Methods Enzymol* **185**: 223–228.
- Hirabayashi, K., Yuda, E., Tanaka, N., Katayama, S., Iwasaki, K., Matsumoto, T., *et al.* (2015)
  Functional dynamics revealed by the structure of the SufBCD complex, a novel ATPbinding cassette (ABC) protein that serves as a scaffold for iron-sulfur cluster biogenesis. *J Biol Chem* 290: 29717–29731.
- Hirata, A., Klein, B.J., and Murakami, K.S. (2010) The X-ray crystal structure of RNA polymerase from Archaea. *Archaea* **451**: 851–854.
- Hoff, K.G., Silberg, J.J., and Vickery, L.E. (2000) Interaction of the iron-sulfur cluster assembly protein IscU with the Hsc66/Hsc20 molecular chaperone system of *Escherichia coli*. *Proc Natl Acad Sci U S A* 97: 7790–7795.

- Huet, G., Castaing, J.P., Fournier, D., Daffé, M., and Saves, I. (2006) Protein splicing of SufB is crucial for the functionality of the *Mycobacterium tuberculosis* SUF machinery. *J Bacteriol* 188: 3412–3414.
- Huet, G., Daffé, M., and Saves, I. (2005) Identification of the *Mycobacterium tuberculosis* SUF machinery as the exclusive Mycobacterial system of [Fe-S] cluster assembly : Evidence for its implication in the pathogen's survival. *J Bacteriol* 187: 6137–6146.
- Jacobson, M.R., Cash, V.L., Weiss, M.C., Laird, N.F., Newton, W.E., and Dean, D.R. (1989)
  Biochemical and genetic analysis of the *nifUSVWZM* cluster from *Azotobacter vinelandii*. *Mol Gen Genet* 219: 49–57.
- Jang, S., and Imlay, J.A. (2010) Hydrogen peroxide inactivates the *Escherichia coli* Isc ironsulphur assembly system, and OxyR induces the Suf system to compensate. *Mol Microbiol* 78: 1448–1467.
- Johnson, D.C., Dean, D.R., Smith, A.D., and Johnson, M.K. (2005) Structure, function, and formation of biological iron-sulfur clusters. *Annu Rev Biochem* **74**: 247–281.
- Johnson, D.C., Unciuleac, M.C., and Dean, D.R. (2006) Controlled expression and functional analysis of iron-sulfur cluster biosynthetic components within *Azotobacter vinelandii*. *J Bacteriol* **188**: 7551–7561.
- Kahler, A.E., Nielsen, F.S., and Switzer, R.L. (1999) Biochemical characterization of the heteromeric *Bacillus subtilis* dihydroorotate dehydrogenase and its isolated subunits. *Arch Biochem Biophys* 371: 191–201.
- Kakuta, Y., Horio, T., Takahashi, Y., and Fukuyama, K. (2001) Crystal structure of *Escherichia coli* Fdx, an adrenodoxin-type ferredoxin involved in the assembly of iron-sulfur clusters. *Biochemistry* 40: 11007–11012.

Kato, S., Mihara, H., Kurihara, T., Takahashi, Y., Tokumoto, U., Yoshimura, T., and Esaki, N.

(2002) Cys-328 of IscS and Cys-63 of IscU are the sites of disulfide bridge formation in a covalently bound IscS-IscU complex: Implications for the mechanism of iron-sulfur cluster assembly. *Proc Natl Acad Sci U S A* **99**: 5948–5952.

- Kennedy, M.C., Emptage, M.H., Dreyer, J.L., and Beinert, H. (1983) The role of iron in the activation-inactivation of aconitase. *J Biol Chem* **258**: 11098–11105.
- Kim, J.H., Frederick, R.O., Reinen, N.M., Troupis, A.T., and Markley, J.L. (2013) [2Fe-2S]ferredoxin binds directly to cysteine desulfurase and supplies an electron for iron-sulfur cluster assembly but is displaced by the scaffold protein or bacterial frataxin. *J Am Chem Soc* 135: 8117–8120.
- Kim, J.H., Tonelli, M., Frederick, R.O., Chow, D.C.F., and Markley, J.L. (2012) Specialized
  Hsp70 chaperone (HscA) binds preferentially to the disordered form, whereas J-protein
  (HscB) binds preferentially to the structured form of the iron-sulfur cluster scaffold protein
  (IscU). J Biol Chem 287: 31406–31413.
- Kim, S., and Park, S. (2013) Structural changes during cysteine desulfurase CsdA and sulfur acceptor CsdE interactions provide insight into the trans-persulfuration. *J Biol Chem* 288: 27172–27180.
- Klinge, S., Hirst, J., Maman, J.D., Krude, T., and Pellegrini, L. (2007) An iron-sulfur domain of the eukaryotic primase is essential for RNA primer synthesis. *Nat Struct Mol Biol* 14: 875– 877.
- Kobayashi, K., Ehrlich, S.D., Albertini, A., Amati, G., Andersen, K.K., Arnaud, M., *et al.*(2003) Essential *Bacillus subtilis* genes. *Proc Natl Acad Sci U S A* 100: 4678–4683.
- Kovach, M.E., Elzer, P.H., Hill, D.S., Robertson, G.T., Farris, M.A., Roop, R.M., and Peterson,
  K.M. (1995) Four new derivatives of the broad host range cloning vector pBBR1MCS,
  carrying different antibiotic resistance cassettes. *Gene* 166: 175–176.

- Kuzuyama, T. (2017) Biosynthetic studies on terpenoids produced by Streptomyces. *J Antibiot***70**: 811–818.
- Lanz, N.D., and Booker, S.J. (2015) Auxiliary iron-sulfur cofactors in radical SAM enzymes. *Biochim Biophys Acta* **1853**: 1316–1334.
- Layer, G., Aparna Gaddam, S., Ayala-Castro, C.N., Choudens, S.O. De, Lascoux, D., Fontecave, M., and Outten, F.W. (2007) SufE transfers sulfur from SufS to SufB for ironsulfur cluster assembly. *J Biol Chem* 282: 13342–13350.
- Lill, R. (2009) Function and biogenesis of iron-sulphur proteins. *Nature* 460: 831–838.
- Lill, R., Dutkiewicz, R., Freibert, S.A., Heidenreich, T., Mascarenhas, J., Netz, D.J., *et al.*(2015) The role of mitochondria and the CIA machinery in the maturation of cytosolic and nuclear iron-sulfur proteins. *Eur J Cell Biol* 94: 280–291.
- Liu, Y., Sieprawska-Lupa, M., Whitman, W.B., and White, R.H. (2010) Cysteine is not the sulfur source for iron-sulfur cluster and methionine biosynthesis in the methanogenic archaeon *Methanococcus maripaludis*. *J Biol Chem* **285**: 31923–31929.
- Locher, K.P. (2016) Mechanistic diversity in ATP-binding cassette (ABC) transporters. *Nat Struct Mol Biol* **23**: 487–493.
- Loiseau, L., Ollagnier-de-Choudens, S., Lascoux, D., Forest, E., Fontecave, M., and Barras, F. (2005) Analysis of the heteromeric CsdA-CsdE cysteine desulfurase, assisting Fe-S cluster biogenesis in *Escherichia coli*. J Biol Chem 280: 26760–26769.
- Loiseau, L., Ollagnier-de-Choudens, S., Nachin, L., Fontecave, M., and Barras, F. (2003)
  Biogenesis of Fe-S cluster by the bacterial suf system. SufS and SufE form a new type of cysteine desulfurase. *J Biol Chem* 278: 38352–38359.
- Lu, J., Yang, J., Tan, G., and Ding, H. (2008) Complementary roles of SufA and IscA in the biogenesis of iron-sulfur clusters in *Escherichia coli*. *Biochem J* **409**: 535–543.

- Malkin, R., and Rabinowitz, J.C. (1966) The reconstitution of clostridial ferredoxin. *Biochem Biophys Res Commun* 23: 822–827.
- McLaughlin, M.I., Lanz, N.D., Goldman, P.J., Lee, K.-H., Booker, S.J., and Drennan, C.L.
  (2016) Crystallographic snapshots of sulfur insertion by lipoyl synthase. *Proc Natl Acad Sci* 113: 9446–9450.
- Mettert, E.L., and Kiley, P.J. (2015) Fe–S proteins that regulate gene expression. *Biochim Biophys Acta* **1853**: 1284–1293.
- Mihara, H., and Esaki, N. (2003) Bacterial cysteine desulfurases: Their function and mechanisms. *Appl Microbiol Biotechnol* 60: 12–23.
- Mihara, H., Kurihara, T., Yoshimura, T., and Esaki, N. (2000) Kinetic and mutational studies of three NifS homologs from *Escherichia coli*: mechanistic difference between L-cysteine desulfurase and L-selenocysteine lyase reactions. *J Biochem* 127: 559–567.
- Mihara, H., Kurihara, T., Yoshimura, T., Soda, K., and Esaki, N. (1997) Cysteine sulfinate desulfinase, a NIFS-like protein of *Escherichia coli* with selenocysteine lyase and cysteine desulfurase activities. Gene cloning, purification, and characterization of a novel pyridoxal enzyme. *J Biol Chem* 272: 22417–22424.
- Mihara, H., Maeda, M., Fujii, T., Kurihara, T., Hata, Y., and Esaki, N. (1999) A *nifS*-like gene, *csdB*, encodes an *Escherichia coli* counterpart of mammalian selenocysteine lyase. Gene cloning, purification, characterization and preliminary X-ray crystallographic studies. J *Biol Chem* 274: 14768–14772.
- Miyauchi, K., Kimura, S., and Suzuki, T. (2013) A cyclic form of *N*<sup>6</sup>threonylcarbamoyladenosine as a widely distributed tRNA hypermodification. *Nat Chem Biol* **9**: 105–111.

Mühlenhoff, U., Gerber, J., Richhardt, N., and Lill, R. (2003) Components involved in assembly

and dislocation of iron-sulfur clusters on the scaffold protein Isu1p. *EMBO J* 22: 4815–4825.

- Nakamura, M., Saeki, K., and Takahashi, Y. (1999) Hyperproduction of recombinant ferredoxins in *Escherichia coli* by coexpression of the ORF1-ORF2-*iscS-iscU-iscA-hscB-hscA-fdx*-ORF3 gene cluster. *J Biochem* **126**: 10–18.
- Netz, D.J.A., Stith, C.M., Stümpfig, M., Köpf, G., Vogel, D., Heide, M., *et al.* (2012) Eukaryotic DNA polymerase require an iron-sulfur cluster for the formation of active complexes. *Nat Chem Biol* 8: 125–132.
- Nguyen, H.D., Nguyen, Q.A., Ferreira, R.C., Ferreira, L.C.S., Tran, L.T., and Schumann, W. (2005) Construction of plasmid-based expression vectors for *Bacillus subtilis* exhibiting full structural stability. *Plasmid* **54**: 241–248.
- O'Brien, E., Holt, M.E., Thompson, M.K., Salay, L.E., Ehlinger, A.C., Chazin, W.J., and Barton, J.K. (2017) The [4Fe4S] cluster of human DNA primase functions as a redox switch using DNA charge transport. *Science* **355**: eaag1789.
- Ollagnier-de-Choudens, S., Lascoux, D., Loiseau, L., Barras, F., Forest, E., and Fontecave, M. (2003) Mechanistic studies of the SufS-SufE cysteine desulfurase: Evidence for sulfur transfer from SufS to SufE. *FEBS Lett* **555**: 263–267.
- Outten, F.W. (2015) Recent advances in the Suf Fe-S cluster biogenesis pathway: Beyond the Proteobacteria. *Biochim Biophys Acta* **1853**: 1464–1469.
- Outten, F.W., Djaman, O., and Storz, G. (2004) A *suf* operon requirement for Fe-S cluster assembly during iron starvation in *Escherichia coli*. *Mol Microbiol* **52**: 861–872.
- Outten, F.W., Wood, M.J., Muñoz, F.M., and Storz, G. (2003) The SufE protein and the SufBCD complex enhance SufS cysteine desulfurase activity as part of a sulfur transfer pathway for Fe-S cluster assembly in *Escherichia coli*. *J Biol Chem* **278**: 45713–45719.

- Pain, D., and Dancis, A. (2016) Roles of Fe-S proteins: From cofactor synthesis to iron homeostasis to protein synthesis. *Curr Opin Genet Dev* 38: 45–51.
- Pastore, C., Adinolfi, S., Huynen, M.A., Rybin, V., Martin, S., Mayer, M., *et al.* (2006) YfhJ, a molecular adaptor in iron-sulfur cluster formation or a frataxin-like protein? *Structure* 14: 857–867.
- Paul, V.D., and Lill, R. (2015) Biogenesis of cytosolic and nuclear iron-sulfur proteins and their role in genome stability. *Biochim Biophys Acta* 1853: 1528–1539.
- Petrovic, A., Davis, C.T., Rangachari, K., Clough, B., Wilson, R.J.M.I., and Eccleston, J.F. (2008) Hydrodynamic characterization of the SufBC and SufCD complexes and their interaction with fluorescent adenosine nucleotides. *Protein Sci* 17: 1264–1274.
- Py, B., and Barras, F. (2010) Building Fe-S proteins: bacterial strategies. *Nat Rev Microbiol* 8: 436–446.
- Rajakovich, L.J., Tomlinson, J., and Dos Santos, P.C. (2012) Functional analysis of *Bacillus* subtilis genes involved in the biosynthesis of 4-thiouridine in tRNA. *J Bacteriol* 194: 4933–4940.
- Rees, D.C. (2003) The interface between the biological and inorganic worlds: Iron-sulfur metalloclusters. *Science* **300**: 929–931.
- Roberts, C.A., Al-Tameemi, H.M., Mashruwala, A.A., Rosario-Cruz, Z., Chauhan, U., Sause,
  W.E., *et al.* (2017) The Suf iron-sulfur cluster biosynthetic system is essential in *Staphylococcus aureus* and decreased Suf function results in global metabolic defects and
  reduced survival in human neutrophils. *Infect Immun* 85: e00100-17.
- Roche, B., Huguenot, A., Barras, F., and Py, B. (2015) The iron-binding CyaY and IscX proteins assist the ISC-catalyzed Fe-S biogenesis in *Escherichia coli*. *Mol Microbiol* 95: 605–623.

- Saini, A., Mapolelo, D.T., Chahal, H.K., Johnson, M.K., and Outten, F.W. (2010) SufD and SufC ATPase activity are required for iron acquisition during *in vivo* Fe-S cluster formation on SufB. *Biochemistry* 49: 9402–9412.
- Sasaki, S., Minamisawa, K., and Mitsui, H. (2016) A Sinorhizobium meliloti RpoH-regulated gene is involved in iron-sulfur protein metabolism and effective plant symbiosis under intrinsic iron limitation. J Bacteriol 198: 2297–2306.
- Schwartz, C.J., Giel, J.L., Patschkowski, T., Luther, C., Ruzicka, F.J., Beinert, H., and Kiley,
  P.J. (2001) IscR, an Fe-S cluster-containing transcription factor, represses expression of *Escherichia coli* genes encoding Fe-S cluster assembly proteins. *Proc Natl Acad Sci U S A* 98: 14895–14900.
- Selbach, B., Earles, E., and Dos Santos, P.C. (2010) Kinetic analysis of the bisubstrate cysteine desulfurase SufS from *Bacillus subtilis*. *Biochemistry* **49**: 8794–8802.
- Selbach, B.P., Chung, A.H., Scott, A.D., George, S.J., Cramer, S.P., and Dos Santos, P.C. (2014) Fe-S cluster biogenesis in Gram-positive bacteria: SufU is a zinc-dependent sulfur transfer protein. *Biochemistry* 53: 152–160.
- Selbach, B.P., Pradhan, P.K., and Dos Santos, P.C. (2013) Protected sulfur transfer reactions by the *Escherichia coli* Suf system. *Biochemistry* 52: 4089–4096.
- Shimomura, Y., Takahashi, Y., Kakuta, Y., and Fukuyama, K. (2005) Crystal structure of *Escherichia coli* YfhJ protein, a member of the ISC machinery involved in assembly of iron-sulfur clusters. *Proteins* 60: 566–569.
- Shimomura, Y., Wada, K., Fukuyama, K., and Takahashi, Y. (2008) The asymmetric trimeric architecture of [2Fe-2S] IscU: Implications for its scaffolding during iron-sulfur cluster biosynthesis. *J Mol Biol* 383: 133–143.
- Singh, H., Dai, Y., Outten, F.W., and Busenlehner, L.S. (2013) Escherichia coli SufE sulfur

transfer protein modulates the SufS cysteine desulfurase through allosteric conformational dynamics. *J Biol Chem* **288**: 36189–36200.

- Smith, A.D., Agar, J.N., Johnson, K.A., Frazzon, J., Amster, I.J., Dean, D.R., and Johnson,
  M.K. (2001) Sulfur transfer from IscS to IscU: The first step in iron-sulfur cluster
  biosynthesis. J Am Chem Soc 123: 11103–11104.
- Smith, A.D., Jameson, G.N.L., Dos Santos, P.C., Agar, J.N., Naik, S., Krebs, C., *et al.* (2005) NifS-mediated assembly of [4Fe-4S] clusters in the N- and C-terminal domains of the NifU scaffold protein. *Biochemistry* 44: 12955–12969.
- Smith, J.L., Zaluzec, E.J., Wery, J.P., Niu, L., Switzer, R.L., Zalkin, H., and Satow, Y. (1994) Structure of the allosteric regulatory enzyme of purine biosynthesis. *Science* 264: 1427– 1433.
- Steinmetz, M., and Richter, R. (1994) Plasmids designed to alter the antibiotic resistance expressed by insertion mutations in *Bacillus subtilis*, through *in vivo* recombination. *Gene* 142: 79–83.
- Takahashi, Y., Mitsui, A., Hase, T., and Matsubara, H. (1986) Formation of the iron-sulfur cluster of ferredoxin in isolated chloroplasts. *Proc Natl Acad Sci U S A* **83**: 2434–2437.
- Takahashi, Y., and Tokumoto, U. (2002) A third bacterial system for the assembly of iron-sulfur clusters with homologs in Archaea and plastids. *J Biol Chem* **32**: 28380–28383.
- Tan, G., Lu, J., Bitoun, J.P., Huang, H., and Ding, H. (2009) IscA/SufA paralogues are required for the [4Fe-4S] cluster assembly in enzymes of multiple physiological pathways in *Escherichia coli* under aerobic growth conditions. *Biochem J* 420: 463–472.
- Tanaka, N., Kanazawa, M., Tonosaki, K., Yokoyama, N., Kuzuyama, T., and Takahashi, Y.
  (2016) Novel features of the ISC machinery revealed by characterization of *Escherichia coli* mutants that survive without iron-sulfur clusters. *Mol Microbiol* **99**: 835–848.

- Tokumoto, U., Kitamura, S., Fukuyama, K., and Takahashi, Y. (2004) Interchangeability and distinct properties of bacterial Fe-S cluster assembly systems: functional replacement of the *isc* and *suf* operons in *Escherichia coli* with the *nifSU*-like operon from *Helicobacter pylori*. J Biochem **136**: 199–209.
- Tokumoto, U., Nomura, S., Minami, Y., Mihara, H., Kato, S., Kurihara, T., *et al.* (2002) Network of protein-protein interactions among iron-sulfur cluster assembly proteins in *Escherichia coli. J Biochem* **131**: 713–719.
- Tokumoto, U., and Takahashi, Y. (2001) Genetic analysis of the *isc* operon in *Escherichia coli* involved in the biogenesis of cellular iron-sulfur proteins. *J Biochem* **130**: 63–71.
- Tong, W.H., and Rouault, T.A. (2006) Functions of mitochondrial ISCU and cytosolic ISCU in mammalian iron-sulfur cluster biogenesis and iron homeostasis. *Cell Metab* **3**: 199–210.
- Tovar, J., León-Avila, G., Sánchez, L.B., Sutak, R., Tachezy, J., Giezen, M. van der, *et al.* (2003) Mitochondrial remnant organelles of *Giardia* function in iron-sulphur protein maturation. *Nature* **426**: 172–176.
- Trotter, V., Vinella, D., Loiseau, L., Choudens, S.O. De, Fontecave, M., and Barras, F. (2009) The CsdA cysteine desulphurase promotes Fe/S biogenesis by recruiting Suf components and participates to a new sulphur transfer pathway by recruiting CsdL (ex-YgdL), a ubiquitin-modifying-like protein. *Mol Microbiol* 74: 1527–1542.
- Tsaousis, A.D., Ollagnier de Choudens, S., Gentekaki, E., Long, S., Gaston, D., Stechmann, A., et al. (2012) Evolution of Fe/S cluster biogenesis in the anaerobic parasite *Blastocystis*. Proc Natl Acad Sci 109: 10426–10431.
- Uchiyama, I., Mihara, M., Nishide, H., and Chiba, H. (2013) MBGD update 2013: The microbial genome database for exploring the diversity of microbial world. *Nucleic Acids Res* 41: 631–635.

- Urbina, H.D., Silberg, J.J., Hoff, K.G., and Vickery, L.E. (2001) Transfer of sulfur from IscS to IscU during Fe/S cluster assembly. *J Biol Chem* **276**: 44521–44526.
- Vinella, D., Brochier-Armanet, C., Loiseau, L., Talla, E., and Barras, F. (2009) Iron-sulfur (Fe/S) protein biogenesis: Phylogenomic and genetic studies of A-type carriers. *PLoS Genet* 5: e000497.
- Wada, K., Hasegawa, Y., Gong, Z., Minami, Y., Fukuyama, K., and Takahashi, Y. (2005)
  Crystal structure of *Escherichia coli* SufA involved in biosynthesis of iron-sulfur clusters:
  Implications for a functional dimer. *FEBS Lett* **579**: 6543–6548.
- Wada, K., Sumi, N., Nagai, R., Iwasaki, K., Sato, T., Suzuki, K., *et al.* (2009) Molecular dynamism of Fe-S cluster biosynthesis implicated by the structure of the SufC<sub>2</sub>-SufD<sub>2</sub> complex. *J Mol Biol* **387**: 245–258.
- Winstedt, L., and von Wachenfeldt, C. (2000) Terminal oxidases of *Bacillus subtilis* strain 168:
  One quinol oxidase, cytochrome *aa*<sup>3</sup> or cytochrome *bd*, is required for aerobic growth. *J Bacteriol* 182: 6557–6564.
- Wollers, S., Layer, G., Garcia-Serres, R., Signor, L., Clemancey, M., Latour, J.M., *et al.* (2010)
  Iron-sulfur (Fe-S) cluster assembly: The SufBCD complex is a new type of Fe-S scaffold
  with a flavin redox cofactor. *J Biol Chem* 285: 23331–23341.
- Ye, R., Tao, W., Bedzyk, L., Young, T., Chen, M., and Li, L. (2000) Global gene expression profiles of *Bacillus subtilis* grown under anaerobic conditions. *J Bacteriol* **182**: 4458–4465.
- Yeo, W.S., Lee, J.H., Lee, K.C., and Roe, J.H. (2006) IscR acts as an activator in response to oxidative stress for the *suf* operon encoding Fe-S assembly proteins. *Mol Microbiol* 61: 206–218.
- Yuda, E., Tanaka, N., Fujishiro, T., Yokoyama, N., Hirabayashi, K., Fukuyama, K., *et al.*(2017) Mapping the key residues of SufB and SufD essential for biosynthesis of iron-sulfur

clusters. Sci Rep 7: 9387.

- Yuvaniyama, P., Agar, J.N., Cash, V.L., Johnson, M.K., and Dean, D.R. (2000) NifS-directed assembly of a transient [2Fe-2S] cluster within the NifU protein. *Proc Natl Acad Sci U S A* 97: 599–604.
- Zhang, X.Z., and Zhang, Y.H.P. (2011) Simple, fast and high-efficiency transformation system for directed evolution of cellulase in *Bacillus subtilis*. *Microb Biotechnol* **4**: 98–105.
- Zheng, L., White, R.H., Cash, V.L., and Dean, D.R. (1994) Mechanism for the desulfurization of L-cysteine catalyzed by the *nifS* gene product. *Biochemistry* **33**: 4714–4720.
- Zheng, L., White, R.H., Cash, V.L., Jack, R.F., and Dean, D.R. (1993) Cysteine desulfurase activity indicates a role for NIFS in metallocluster biosynthesis. *Proc Natl Acad Sci U S A* 90: 2754–2758.

田中尚志 (2016) 大腸菌における鉄硫黄クラスター生合成系の機能解析...

Table 1	本研究で使用	した菌株
---------	--------	------

Strain	Genotype	Reference or Source
168	Bacillus subtilis trpC2 sfp <sup>0</sup>	Laboratory strain
SCK6	Bacillus subtilis his $nprR2$ $mprE18$ $\Delta aprA3$ $\Delta eglS102$ $\Delta bglT$ $bglSRV$	Zhang and Zhang, 2011
	$lacA::P_{xylA}$ -comK Em <sup>r</sup>	
NY018	Bacillus subtilis $\Delta$ sufCD::Sp <sup>r</sup>	This study
NY004	Bacillus subtilis $\Delta$ sufSU::Sp <sup>r</sup>	This study
NY027	Bacillus subtilis ∆sufCDSUB::Sp <sup>r</sup>	This study
NY012	Bacillus subtilis $\Delta$ sufB::Sp <sup>r</sup>	This study
NY105	Bacillus subtilis lacA::P <sub>xylA</sub> -comK Em <sup>r</sup>	This study
NY144	Bacillus subtilis lacA:: $P_{xylA}$ -comK Em <sup>r</sup> , $\Delta sufC$ ::Sp <sup>r</sup>	This study
NY145	Bacillus subtilis lacA:: $P_{xylA}$ -comK Em <sup>r</sup> , $\Delta$ sufD::Sp <sup>r</sup>	This study
NY151	Bacillus subtilis lacA:: $P_{xylA}$ -comK Em <sup>r</sup> , $\Delta sufS$ ::Sp <sup>r</sup>	This study
NY153	Bacillus subtilis lacA:: $P_{xylA}$ -comK Em <sup>r</sup> , $\Delta sufU$ ::Sp <sup>r</sup>	This study
NY116	Bacillus subtilis lacA:: $P_{xylA}$ -comK Em <sup>r</sup> , $\Delta sufB$ ::Sp <sup>r</sup>	This study
NY120	Bacillus subtilis lacA:: $P_{xylA}$ -comK Em <sup>r</sup> , $\Delta$ sufCDSUB::Sp <sup>r</sup>	This study
NY081	Bacillus subtilis lacA:: $P_{xylA}$ -comK Em <sup>r</sup> , $\Delta sufSU$ ::Sp <sup>r</sup>	This study
UT109	Escherichia coli MG1655 $\Delta$ (iscUA-hscBA)::Km <sup>r</sup> $\Delta$ (sufABCDSE)::Gm <sup>r</sup>	Tokumoto et al., 2004
NT1401	Escherichia coli MG1655 ΔiscS::Km <sup>r</sup> Δ(sufABCDSE)::Gm <sup>r</sup>	Tanaka et al., 2016
NT2001	<i>Escherichia coli</i> MG1655 Δ <i>iscU</i> ::Km <sup>r</sup> Δ( <i>sufABCDSE</i> )::Gm <sup>r</sup>	Tanaka et al., 2016

# Table 2 本研究で使用したプラスミド

Plasmid	Description	Reference or source
pAA101	Cm <sup>r</sup> ; shuttle vector, replicative in <i>B. subtilis</i> (ori1060), P <sub>spac</sub>	This study
	promoter	
pBMV4	pAA101 derivative carrying pmvk-mvd-mvk-idi from	This study
	Streptomyces sp.	
pBMV4 Nm <sup>r</sup>	pBMV4 with Cmr::Nmr	This study
pCm::Nm	pIC177 with Cm <sup>r</sup> ::Nm <sup>r</sup>	Steinmetz and Richter, 1994
pHCMC05	Cm <sup>r</sup> ; shuttle vector; replicative in <i>B. subtilis</i> , P <sub>spac</sub> promoter	Nguyen et al., 2005
pHCMC05NMC	pHCMC05 derivative with modified multi-cloning sites	This study
pHCMC05-Bs sufC	pHCMC05-NMC derivative carrying B. subtilis sufC	This study
pHCMC05-Bs sufD	pHCMC05-NMC derivative carrying B. subtilis sufD	This study
pHCMC05-Bs sufS	pHCMC05-NMC derivative carrying B. subtilis sufS	This study
pHCMC05-Bs sufU	pHCMC05-NMC derivative carrying B. subtilis sufU	This study
pHCMC05-Bs sufU	pHCMC05-BssufU carrying SufU <sup>C41D</sup> point mutation	This study
(SufU <sup>C41D</sup> )		
pHCMC05-Bs sufU	pHCMC05-BssufU carrying SufU <sup>C66D</sup> point mutation	This study
(SufU <sup>C66D</sup> )		
pHCMC05-Bs sufU	pHCMC05-BssufU carrying SufU <sup>C128D</sup> point mutation	This study
(SufU <sup>C128D</sup> )		
pHCMC05-Bs sufU	pHCMC05-BssufU carrying SufU <sup>D43C</sup> point mutation	This study
(SufU <sup>D43C</sup> )		
pHCMC05-Bs sufU	pHCMC05-BssufU carrying SufU <sup>D43E</sup> point mutation	This study
(SufU <sup>D43E</sup> )		
pHCMC05-Bs sufB	pHCMC05-NMC derivative carrying B. subtilis sufB	This study
pHCMC05-Bs sufSU	pHCMC05 derivative carrying B. subtilis sufSU	This study
pHCMC05-Bs sufCDSUB	pHCMC05-NMC derivative carrying B. subtilis sufCDSUB	This study
pHCMC05-Hp nifSU	pHCMC05-NMC derivative carrying H. pylori nifSU	This study
pHCMC05-Ec sufA	pHCMC05-NMC derivative carrying E. coli sufA	This study
pHCMC05-Ec sufB	pHCMC05-NMC derivative carrying E. coli sufB	This study
pHCMC05-Ec sufC	pHCMC05-NMC derivative carrying E. coli sufC	This study
pHCMC05-Ec sufD	pHCMC05-NMC derivative carrying E. coli sufD	This study
pHCMC05-Ec sufS	pHCMC05-NMC derivative carrying E. coli sufS	This study
pHCMC05-Ec sufE	pHCMC05-NMC derivative carrying E. coli sufE	This study
pHCMC05-Ec sufSE	pHCMC05 derivative carrying E. coli sufSE	This study
pHCMC05-Ec sufSE	pHCMC05-EcsufSE carrying SufE <sup>C51A</sup> point mutation	This study

## (SufE<sup>C51A</sup>)

pHCMC05-Ec iscSU	pHCMC05 derivative carrying E. coli iscSU	This study
pHCMC05-Ec csdAE	pHCMC05 derivative carrying E. coli csdAE	This study
pUMV22 Sp <sup>r</sup>	Sp <sup>r</sup> ; pUC118 derivative carrying <i>mvk-pmvk-mvd</i> from	Tanaka et al., 2016
	Streptomyces sp.	
pRKNMC	Tc <sup>r</sup> ; IncP-1 replicon, low-copy-number vector, P <sub>lac</sub> promoter	Nakamura et al., 1999
pRKSUF017	pRKNMC derivative carrying E. coli sufABCDSE-ynhG	Takahashi and Tokumoto, 2002
pRK-sufA_CDSE	pRKSUF017 derivative carrying E. coli sufACDSE (\DeltasufB)	This study
pRK-sufAB_DSE	pRKSUF017 derivative carrying E. coli sufABDSE (\(\Delta sufC\))	Hirabayashi et al., 2015
pRK-sufABC_SE	pRKSUF017 derivative carrying E. coli sufABCSE (\(\Delta sufD\))	Wada et al., 2009
pRK-sufABCD_E	pRKSUF017 derivative carrying E. coli sufABCDE (\DeltasufS)	This study
pRK-sufABCDS	pRKSUF017 derivative carrying E. coli sufABCDS (\DeltasufE)	Takahashi and Tokumoto, 2002
pRK-sufABCD	pRKSUF017 derivative carrying E. coli sufABCD (\DeltasufSE)	This study
pBBR1MCS-4	Ap <sup>r</sup> ; pBBR replicon, low-copy-number vector, $P_{lac}$ promoter	Kovach et al., 1995
pBBR-Bs sufC	pBBR1MCS-4 derivative carrying B. subtilis sufC	This study
pBBR-Bs sufD	pBBR1MCS-4 derivative carrying B. subtilis sufD	This study
pBBR-Bs sufS	pBBR1MCS-4 derivative carrying B. subtilis sufS	This study
pBBR-Bs sufU	pBBR1MCS-4 derivative carrying B. subtilis sufU	This study
pBBR-Bs sufB	pBBR1MCS-4 derivative carrying B. subtilis sufB	This study
pBBR-Bs sufSU	pBBR1MCS-4 derivative carrying B. subtilis sufSU	This study
pBBR-Ec sufA	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli sufA	This study
pBBR-Ec sufB	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli sufB	This study
pBBR-Ec sufC	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli sufC	Hirabayashi et al., 2015
pBBR-Ec sufD	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli sufD	Wada et al., 2009
pBBR-Ec sufS	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli sufS	This study
pBBR-Ec sufE	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli sufE	This study
pBBR-Ec sufSE	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli sufSE	This study
pBBR-Ec sufSE (SufE <sup>C51A</sup> )	pBBR4-Ec sufSE carrying SufE <sup>C51A</sup> point mutation	This study
pBBR-Ec iscSU	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli iscSU	This study
pBBR-Ec csdAE	pBBR1MCS-4 derivative carrying E. coli csdAE	This study

# Table 3 本研究で使用したプライマー

Oligonucleotide	Sequence (5'-3')
mvk-F	GGAGATCTGGAGGTTGTTTTATGACGACAGGTCAGCGCAC
mvk-R	GGATCGATTTAGATCCCTTCCAGGGCAG
pmvk-F	GGAAGCTTGGAGGTTGTTTTATGCAGAAAAGACAAAGGGA
pmvk-R	GGTCTAGATCACTGCGCATGGTTGTCGA
mvd-F	GGTCTAGAGGAGGTTGTTTTATGCGCAGTGAACACCCGAC
mvd-R	GGAGATCTTCATGCGCCCTCGCTCAGCA
idi-F	GGATCGATGGAGGTTGTTTTATGACCAGCGCCCAACGCAA
idi-R	GGGCATGCTCATCGTGTGCTTCCCGTCG
Spc-Fw	GGGCAGTGAGCGCAACGC
Spc-Rv	GCCTAATTGAGAGAAGTTTCTA
sufC-up-F	CTGCGTGAGGTGGATAAAGG
Spc-sufC-up-R	GCGTTGCGCTCACTGCCCAGCCATATCTATACCTCCAAAAA
Spc-∆sufC-F	TAGAAACTTCTCTCAATTAGGCGCGTTAGGGGGGATTAATATGA
Bs sufS-R2	GCTGATGAAGGATCGGGAAC
Bs sufC-up-F2	GAGGAATGTGCAAGGCACG
Spc-∆sufD-R	GCGTTGCGCTCACTGCCCTTACGCTTCTTGGCCAACAG
Spc-sufS-F	TAGAAACTTCTCTCAATTAGGCCGAAAGGAAAGTGAAGTAATGAA
Bs sufUR-xh	CTCGAGATTGCCGCCTTCTTCTTCG
Bs suf-seq2	CGCTGATCGACATTGAAAACG
sufD-Spc-R	GCGTTGCGCTCACTGCCCTTACTTCACTTTCCTTTCGATAA
Spc-∆sufS-F	TAGAAACTTCTCTCAATTAGGCCAAAAGACAAAGGAGTATTTTAC
sufB-R	TGTAAACGTTGTTCGCCCAG
Bs suf-seq4	GCGTGCTGTCATTGAAACAC
Spc-∆sufU-R	GCGTTGCGCTCACTGCCCATTAAAAGACATTTGTAAAATACTC
Spc-sufB-F	TAGAAACTTCTCTCAATTAGGCGGATTGGAGTGAAAATGGATG
Bs sufS-FXh	CCGGCTCGAGCGAAAGGAAAGTGAAGTAATG
Spc-sufU-R	GCGTTGCGCTCACTGCCCCATCCATTTTCACTCCAATCC
Spc-sufB-down-F	TAGAAACTTCTCTCAATTAGGCCCTTTGTTTATCAAGGGGTTTAG
sufB-down-R	CCGCGCTCCCCCTTAG
pHCMC linkerF	CTAGAGCATGCTCGAGATGAGCTCCGCGGGCTAGCTCGCGA
pHCMC linkerR	TCGCGAGCTAGCCGCGGAGCTCATCTCGAGCATGCT
Bs SufF-Xb	CTAGTCTAGAGGAGGTATAGATATGGCTGC
Bs sufC-R-Sc	GAGCTCATATTAATCCCCCTAACGCT

Bs sufD-F-Xb	TCTAGAGCGTTAGGGGGGATTAATATG
Bs suf∆SU-R	CATTACTTCACTTTCCGATAACAG
Bs sufS-R-Sc	GAGCTCTGTACAATGTATCTAAGTTTGCA
Bs sufU-F-Xb	TCTAGACAAAGGAGTATTTTACAAATG
Bs SufU-RNh	CCGGGCTAGCTTTTAATTGCCGCCTT
Bs suf∆SU-F	GGATTGGAGTGAAAATGGATGGC
Bs SufR-Sc	GCCGGAGCTCATCATTAACCGATAGAACC
Bs-sufU-C41D_F	GACGACCGCATCAGACTG
Bs-sufU-C41A_R	TGTCGGATTGTTCATATCCACGAC
Bs-sufU-C66D_F	GATTCCATTTCAATGGCATCCGCTTC
Bs-sufU-C66A_R	GCCTTCCCCTTCAAACTTCGC
Bs-sufU-C128D_F	GATGCAACCCTGTCATGGAAAGCAC
Bs-sufU-C128A_R	TTTGATACGGGCAGGGAATTTTGAAAC
Bs-sufU-D43C_F	TGCATCAGACTGACAATGAAGCT
Bs-SufU-D43E_F	GAGCGCATCAGACTGACAATGAAGCTT
Bs-sufU-D43A_R	GCCGCATGTCGGATTGTTCATATC
Bs suf-seq1	CTTAACGAAGGCTTCTCAGG
Bs suf-seq3	CAAACCTTTACGGTGACGGC
Bs suf-seq5	AGCCCTGCTGGAAAACATGG
Bs sufB-R2	CAATCCGCGCTCTGAACGG
Bs sufB-down-R2	CAAATTCGGCACGCCGGC
EcSufA-F	CATATGGACATGCATTCAGGAAC
EcSufA-R	GGATCCTCGAGCTCATACCCCAAAGCTTTCGC
EcSufB-F	CATATGTGGCTGTGGCGAAAGC
EcSufB-R	GGATCCTCGAGCTCATCCGACGCTGTGTTCAAG
EcSufS-F	CATATGATTTTTTCCGTCGAC
EcSufS-R	GGATCCTCGAGCTCATCCCAGCAAACGGTGAATAC
EcSufE-F	CATATGGCTTTATTGCCGGATAAAG
EcSufE-R	GGATCCTCGAGCTCAGCTAAGTGCAGCGGCTTTG
Ec-sufE-C51A_F	GCTCAGAGTCAGGTGTGGATTGTCAT
Ec-sufE-C51A_R	GCCCTGAATGCTATTTTGTGGACT
sufSF	CCGGCTCGAGTCTAGACGGCTGCCAGGAGGTGC
sufER	CCGGGCTAGCGAATTCCCTGTTATCCCAGCAAAC
csdAF	CCGGCTCGAGGAGTACCATGAACGTTTT
ygdKR	CCGGGCTAGCGAACGTCTTATCCGACCC
iscSF-Xb	TCTAGAGCATTGAGTGATGTACGGAG

iscUR-Sm	CCCGGGCAAACCTCAACTCTTATTTTGC
SufA-RSc	GGGCTCGAGCTCATACCCCAAAGCTTTCGCCAC
C-FSc2	GCTCTAGAGCTCTGAACACAGCGTCGGATAAG
D-RSc2	GCTCTAGAGCTCAAAAATCATCTTGCACCTCCTG
E-FSc2	GCTCTAGAGCTCCACCGTTTGCTGGGATAACA
BST3	ACTAAAGGGAACAAAAGCTGG
BST7	CTCACTATAGGGCGAATTGG
Bs suf∆SU-F	GGATTGGAGTGAAAATGGATGGC
Bs SufR-Sc	GCCGGAGCTCATCATTAACCGATAGAACC
XbaI linker	GGGTCTAGACCC
SacII linker	GGCCGCGGCC
Ec-sufE-C51A_F	GCTCAGAGTCAGGTGTGGATTGTCAT
Ec-sufE-C51A_R	GCCCTGAATGCTATTTTGTGGACT
BST3	ACTAAAGGGAACAAAAGCTGG
BST7	CTCACTATAGGGCGAATTGG


### Fig. 1 Fe-S クラスターの構造

左から [2Fe-2S]、[4Fe-4S]、[3Fe-4S] クラスターの構造。鉄原子を赤色、硫黄原子を黄 色の球棒モデルで示す。Fe-S クラスターは一般的に、タンパク質内部の Cys 残基に配 位結合しているが、まれに His 残基のイミダゾール窒素原子や、Asp 残基のカルボキシ 酸素原子に配位する例もある。



### Fig. 2 3種類の Fe-S クラスター生合成マシナリーの作動モデル

Fe-S クラスター形成は、硫黄源である L-システインからシステイン脱硫黄酵素 (NifS / IscS / SufS) が硫黄原子を引き抜く過程から始まる。その後、NIF マシナリーでは硫黄原 子が NifU に、ISC マシナリーでは IscU に渡され、NifU / IscU で新規に Fe-S クラスタ ーが形成される。SUF マシナリーでは SufS から SufE に硫黄原子が渡され、次いで SufBCD 複合体に運ばれて Fe-S クラスターが形成される。

	-	Organism	Related genes	Fe-S proteins		
I		Aeropyrum pernix	/ <mark>C B D / S / S /</mark>	+		
_		Pyrococcus horikoshii	/ <mark>C B / C B / S</mark> /	+		
ge		Methanococcus jannashii	/ <mark>С В</mark> /	+		
Ë	J 4	Methanobacterium thermoaut	+			
Ă	.   4,	Archaeoglobus fulgidus	/ <mark>C B / S U / S U /</mark>	+		
		Thermoplasma acidophilum	/ <b>C B B</b> /	+		
4		Halobacterium sp.	/ C B B / S U /	+		
(pr	rimitive)	Aquifex aeolicus	/ <b>A</b> / <b>S</b> / <b>S</b> / <b>U</b> / <b>F</b> /	+		
		, Thermotoga maritima	/ C B D S U / C B / S /	+		
		Deinococcus radiodurans	/A/A/CBxxxxB/ES/S/	+		
		Synechocystis sp. 6803	/A/A/BCDS/E/S/S/S/	+		
		Anabaena sp. 7120 / A / A	A / A / B C D S / E / S / S / S / S / S nl	J/ +		
	chloropla	sts				
		Lactococcus lactis	/ C B S x U B / S / S /	+		
		Bacillus subtilis	/ A / C B S U B / S / S / S / S /	+		
		- Ureaplasma urealvticum	/ S U /	ND		
_		Mvcoplasma pneumoniae	/ S U /	ND		
		Mycobacterium tuberculosis	/ A / B D C S U / E / S / S / S /	+		
eri	Oniversity of the start of	Treponema pallidum	/ <mark>C B D S U</mark> / S /	+		
g	Spirochaetes	Borrelia burgdorferi	/ S U /	ND		
ĝ		Chlamvdia trachomatis	/ B C D S / E / S /	+		
ш		Campylobacter ieiuni	/ S nU / S /	+		
	ε <b>ΝΙΕ?</b>	Helicobacter pylori	/ S nU / S /	+		
		Rickettsia prowazekii	/ A / S S U A / hB hA F /	+		
		itochondria		-		
		Neisseria meningitidis	/ <b>S U A</b> x hB / hA x x F /	+		
		Xvlella fastidiosa	/A/A/BCDS/E/	+		
		Pseudomonas aeruginosa / S	A/SE/S/S/S/SUAhBhAF/	+		
	· Ĕ , , · · · · · · · · · · · · · · · ·	Haemophilus influenzae	/SE/SUAhBhAF/	+		
		Vibrio cholerae	/A/E/S/S/SUAhBhAF/	+		
	.     • • •	Escherichia coli / A	A B C D S E / S E / S U A hB hA F	/ +		
	-	<i>suf</i> -specific gen	es: B, <i>sufB</i> ; C, <i>sufC</i> ; D, <i>sufD</i> ; E, <i>su</i> es: U, <i>iscU</i> : hB, <i>hscB</i> : hA, <i>hscA</i> : F,	ıfE. fdx.		
	Phylogenetic tree from small rRNAs	nif-specific gene: U. nifU.				
		common genes: A, sufA and iscA; S, sufS, iscS, and nifS.				

## Fig. 3 Fe-S クラスター生合成の成分の分布

大腸菌の SUF マシナリーに特徴的な遺伝子 (B, *sufB*; C, *sufC*; D, *sufD*; E, *sufE*) を赤字で、 ISC で特徴的な遺伝子 (U, *iscU*; hB, *hscB*; hA *hscA*; F, *Fdx*) を青字で、NIF マシナリーに 特徴的な遺伝子 (nU, *nifU*) を緑字で表す。これらのマシナリーで共通する成分 (S, *sufS* /*iscS*/*nifS*; A, *sufA*/*iscA*) は黒字で示している。左の系統樹は 5S RNA の配列に基づい ている。論文 (Tokumoto *et al.*, 2004) より改変。

<ul> <li>IscU_E.coli IscU_H.influenzae IscU_A.vinelandii Isul_S.cerevisiae IscU_M.musculus IscU_A.aeolicus NifU_A.vinelandii</li> <li>NifU_H.pylori SufU_T.maritima SufU_S.pyogenes</li> <li>SufU_B.subtilis</li> </ul>	
<ul> <li>IscU_E.coli</li> <li>IscU_H.influenzae</li> <li>IscU_A.vinelandii</li> <li>Isul_S.cerevisiae</li> <li>IscU_M.musculus</li> <li>IscU_A.aeolicus</li> <li>NifU_A.vinelamdii</li> <li>NifU_H.pylori</li> <li>SufU_T.maritima</li> <li>SufU_S.pyogenes</li> <li>SufU_B.subtilis</li> </ul>	SL VTEWVKGKSL DEAQAIKNTD IAEELELPPVK IHCSILAEDA IKAAIADYKS KREAK

# Fig. 4 IscU / NifU / SufU のアミノ酸配列の比較

NifUについては IscU と相同な N 末端ドメインの配列のみを示している。本研究で取り

上げたものを青丸で示した。





# Fig. 5 大腸菌の SufBCD 複合体

- A. 大腸菌 SufBCD 複合体の結晶構造 (PDB ID: 5AWF)
- B. 大腸菌 SufBCD 複合体における Fe-S クラスター形成機構のモデル。論文 (Yuda et al., 2017) より改変。



#### Fig. 6 大腸菌と枯草菌の Fe-S クラスター生合成オペロンの比較

大腸菌は *iscSUA-hscBA-fdx-iscX* オペロンにコードされる ISC マシナリーと、*sufABCDSE* オペロンにコードされる SUF マシナリーの 2 種類の Fe-S クラター生合成系を有して いる。一方、枯草菌などのグラム陽性菌では、*sufCDSUB* オペロンにコードされる SUF 様マシナリーが、Fe-S クラスターの生合成を担うと考えられており、このオペロンの遺 伝子はすべて枯草菌の生育に必須である。この SUF 様マシナリーは、大腸菌 SUF マシ ナリーの SufA、SufE を除く SufB、SufC、SufD、SufS と、ISC マシナリーの IscU(枯草 菌では SufU と改称) という成分から構成されている。アミノ酸レベルでの同一性を% で示す。



### Fig. 7 枯草菌 suf 様オペロン破壊のストラテジー(1)

スペクチノマイシン耐性遺伝子 (Sp<sup>r</sup>) は、pAPNC213 (HEF) プラスミドを鋳型とし、 Spc-Fw と Spc-Rv の 2 種類のプライマーを用いて PCR で増幅した。標的とする遺伝子 のコード域の上流域と下流域 (それぞれ 800-1500 bp) は、プライマーセットにそれぞ れ、Primer 1 と 2、Primer 3 と 4 を用いて、KOD-Plus- Neo DNA polymerase で増幅し た。なお、Primer 2 と 3 の 5′側には、Sp<sup>r</sup>の配列 (約 20 nt) を付加している。Step 2 の PCR では、3 種類の PCR 産物を混合し、これらを PCR で連結させた。



### Fig. 8 枯草菌 suf 様オペロン破壊のストラテジー(2)

まず、枯草菌 168 株に、放線菌由来の MVA 経路の 4 遺伝子をクローン化したプラスミ ド pBMV4 を導入した。次いで、PCR で作成した遺伝子破壊用の Sp<sup>r</sup> カセットを導入し た。形質転換体の選択には、MVA とグルコース、ピルビン酸を含む富栄養培地(2×YT complete 培地)に 200 μg/ml Sp を添加した寒天培地を用いた。

#### Fe-S cluster biosynthesis SufB, SufA, Nfu

#### Cofactor biosynthesis

quinolinate synthase (NadA) lipoyl synthase (LipA) biotin synthase (BioB) GTP 3',8-cyclase (MoaA) phosphomethylpyrimidine synthase (ThiC) coproporphyrinogen oxidase (HemN, Z) 7-carboxy-7-deazaguanine synthase (QueE)

#### **RNA modification**

methylthioadenine synthetase (MiaB) tRNA methylthiotransferase (MtaB) uracil-C(5)-methyltransferase (RImCD) rRNA methyltransferase (RImN) epoxyqueuosine reductase (QueG) 7-carboxy-7-deazaguanine synthase (QueE) uncharacterized RNA methyltransferase (yfjO)

### DNA repair

spore photoproduct lyase (SpIB) helicase/deoxyribonuclease (AddB) A/G-specific adenine glycosylase (MutY) endonuclease III (Nth)

### Putative Fe-S proteins

probable oxidoreductase (YjgC) probable oxidoreductase (YoaE) probable oxidoreductase (YyaE) putative peptide biosynthesis protein (YydG) putative Rieske protein (YhfW) putative formate dehydrogenase (YrhE) putative protein (YfkA) uncharacterized protein (FadF) uncharacterized protein (YtqA)

### Oxidative phosphorylation

succinate-quinone oxidoreductase (SdhB) menaquinol-cytochrome c reductase (QcrA)

> Central/intermediary metabolism aconitase (CitB) glycolate oxidase (GlcF) 2-methylcitrate dehydratase (PrpD) lactate utilization protein B (LutB)

### Nitrogen/sulfur assimilation

nitrite reductase (NasD, E) nitrate reductase (NasC, NarG, H) sulfite reductase (CysI)

### Amino acid metabolism

glutamate synthase (GltA) dihydroxy-acid dehydratase (IlvD) isopropylmalate dehydratase (LeuC) L-lysine 2,3-aminomutase (KamA) serine dehydratase (SdaAB, SdaAA)

# Purine/pyrimidine metabolism

amidophosphoribosyltransferase (PurF) dihydroorotate dehydrogenase (PyrK) xanthine dehydrogenase (PucE)

> Isoprenoid biosynthesis HMB-PP synthase (IspG) HMB-PP reductase (IspH)

#### Other processes ferredoxin (Fer) subtilosin biosynthesis protein (AlbA) sporulation killing factor maturation protein (SkfB)

Gene regulation FNR, NsrR

# Fig. 9 枯草菌 168 株の Fe-S タンパク質群

枯草菌 168 株に見られる 60 種類の Fe-S タンパク質を、機能によって分類した。生育に 必須な Fe-S タンパク質を赤字で示す。



### Fig. 10 2種類のイソプレノイド生合成経路

イソプレノイドの生合成経路には、MVA 経路と非 MVA 経路(MEP 経路)の2種類が存在する。大腸菌や枯草菌は MEP 経路でイソプレノイドを合成している。一方、放線菌などの一部のバクテリアや真核生物は MVA 経路を持つことが知られている。MEP 経路には2種類の Fe-S 酵素、IspG((E)-1-hydroxy-2-methyl-2-butenyl-4-diphosphatase (HMB-PP) synthase) と IspH (HMB-PP reductase) が関与しているが、MVA 経路には Fe-S 酵素が存在しない。略号: GA3P, glyceraldehyde-3-phosphate; DXP, 1-deoxy-D-xylulose 5-phosphate; CDP-ME, 4-(cytidine 5'-diphospho)-2-C-methyl-D-erythritol; CDP-ME2P, 2-phospho-4-(cytidine 5'-diphospho)-2-C-methyl-D-erythritol; MEcPP, 2-C-methyl-D-erythritol 2,4-cyclodiphosphate; FPP, farnesyl diphosphate; HMG-CoA, 3-hydroxy-3-methylglutaryl-CoA.



# Fig. 11 構築した枯草菌 suf 様オペロンの破壊株

相同組換えによって、ゲノム上の suf 様オペロンの遺伝子を個別に、あるいはいくつか を組み合わせて破壊した。



### Fig. 12 コロニーPCR による suf 様オペロン破壊株の遺伝子型の確認

目的の遺伝子が破壊されていることをコロニーPCR によって確認した。プライマーは 以下の組み合わせで使用し (Primer a, sufC-up-F2; b, Bs suf-seq1; c, Bs suf-seq3; d, Bs sufseq5; e, Bs sufS-R2; f, Bs sufB-R2; g, Bs sufB-down-R2)、それらの配列は、Table 3 に示す。



# Fig. 13 suf 様オペロン破壊株の富栄養寒天培地における生育

枯草菌野生株と6種類の *suf*様オペロン破壊株を、好気、あるいは嫌気条件下で、37℃、
48 時間培養した。寒天培地には、2×YT complete 培地を用いた。また、好気培養では、
2×YT complete 培地から MVA、またはグルコースとピルビン酸を除いた培地も用いた。



	倍加時間 (min)
WT	26±4.0
∆sufC	87±5.2
∆sufD	97±9.9
∆sufS	98±11
∆sufU	96±9.2
∆sufB	93±7.9
∆sufCDSUB	105±11

# Fig. 14 suf 様オペロン破壊株の液体培地における生育

枯草菌野生株と6種類の *suf*様オペロン破壊株について、好気条件下、Em を含む 2× YT complete 培地で生育を比較した。L字管を用いて 37°C、自動振盪培養機で培養し、 30 分ごとに OD<sub>660</sub>を測定した。培養に用いた菌株はΔ*sufC* (NY144)、Δ*sufD* (NY145)、Δ*sufS* (NY151)、Δ*sufU* (NY153)、Δ*sufB* (NY116)、Δ*sufCDSUB* (NY120)、WT (NY105) である。 実験はそれぞれ 3 回行い、倍加時間の平均値と標準偏差を下表に示した。



#### Fig. 15 suf 様オペロン破壊株における Fe-S 酵素の活性

枯草菌野生株と6種類の suf様オペロン破壊株を、好気条件下、2×YT complete 培地で 定常期の初期まで生育させた。菌体を破砕し、その上清を用いてアコニターゼ、コハク 酸脱水素酵素 (SDH)、グルタミン酸合成酵素、リンゴ酸脱水素酵素 (MDH)の活性測定 を行った。



### Fig. 16 suf 様オペロン破壊株の栄養要求性

枯草菌野生株とΔ*sufCDSUB* 株を、合成培地で 37°C、48 時間培養した。合成培地からは、 ヌクレオチドやアミノ酸を除き、生育に対する影響を濁度 (OD<sub>600</sub>) で示した。

- A. プリン/ピリミジン要求性
- B. アミノ酸要求性



#### Fig. 17 suf 様オペロン破壊株の形質転換

枯草菌∆*sufSU*株を、2×YT complete 液体培地で 37℃、約 18 時間前培養し、同じ培地に 1/10 容を植菌して 37℃ で振盪培養した。OD<sub>600</sub>の値が 0.5–0.7 程度になった時点で、終 濃度 1%となるようにキシロースを添加し、37℃ で振盪培養した。次いで、培養液の一 部に DNA(pHCMC05-*Bs sufSU* または pHCMC05 の空ベクター)を添加して、37℃ で 1.5 時間振盪した。Cm を含む選択培地にスプレッドし、37℃ で培養して形質転換体を 得た。

- A. 形質転換体の生育: MVA を含む、あるいは含まない 2×YT complete 培地で 37°C、48
   時間培養した。
- B. 形質転換効率に対するキシロース添加後の培養時間の影響



# Fig. 18 枯草菌 △sufCDSUB 株の相補実験

△*sufCDSUB*株に対して、pHCMC05(empty) またはpHCMC05-*Bs sufCDSUB*、pHCMC05-*Hp nifSU* プラスミドを導入し、Cm を含む選択培地で形質転換体を得た。これらを、 MVA を含まない 2×YT complete 寒天培地に植菌し、37°C で 48 時間培養した。

## Α



### В



# Fig. 19 枯草菌におけるヌクレオチドの生合成経路と関与する Fe-S 酵素

A. プリンの生合成 略号: XMP, xanthosine monophosphate; IMP, inosine monophosphate
B. ピリミジンの生合成



Fig. 20 枯草菌におけるイソロイシン、バリン、ロイシンの生合成経路と関与する Fe-

S酵素



### Fig. 21 枯草菌における硫黄同化ならびに窒素同化経路と関与する Fe-S 酵素

- A. システインとメチオニンの生合成ならびにそれらの相互変換
- B. グルタミン酸とグルタミンの生合成ならびにそれらの相互変換



# Fig. 22 枯草菌におけるエネルギー代謝と関与する Fe-S 酵素

略号: SDH, succinate dehydrogenase (コハク酸脱水素酵素); MDH, malate dehydrogenase (リ ンゴ酸脱水素酵素); Aco, aconitase (アコニターゼ)



#### Fig. 23 枯草菌 suf 様オペロン破壊株の相補実験

枯草菌 $\Delta sufC$ 株、 $\Delta sufD$ 株、 $\Delta sufB$ 株、 $\Delta sufS$ 株、 $\Delta sufU$ 株、 $\Delta sufSU$ 株に対して、それぞ れ破壊した遺伝子をプラスミド pHCMC05 につないで導入した。また、関連する大腸菌 の遺伝子も同様に pHCMC05 につないで導入し、異種間での相補能を検討した。これら の形質転換体を、MVA を含まない 2×YT complete 寒天培地に植菌し、37°C で 48 時間培 養して生育を観察した。



### Fig. 24 大腸菌 suf 欠失株の相補実験

大腸菌 UT109 変異株 ( $\Delta sufABCDSE \Delta iscUA-hscBA$ ) に、大腸菌 sufABCDSE オペロンの遺伝子をひとつずつ (または sufSE をまとめて) 欠失させたプラスミドを導入して、  $\Delta sufC$ 、 $\Delta sufD$ 、 $\Delta sufB$ 、 $\Delta sufS$ 、 $\Delta sufE$ 、 $\Delta sufSE$  細胞とした。これらに、枯草菌の関連遺伝 子群を pBBR ベクターにつないで導入し、異種間での相補能を検討した。これらの形質 転換体は、MVA を含まない LB 寒天培地 (0.4% グルコースを含む) で、37°C で 48 時 間培養して生育を観察した。



# Fig. 25 大腸菌 $\Delta iscS$ 株と $\Delta iscU$ 株を用いた異種間相補実験

pUMV22 Sp<sup>r</sup>を持つ大腸菌変異株 NT1401 (Δ*iscS* Δ*sufABCDSE*) あるいは NT2001 (Δ*iscU* Δ*sufABCDSE*) に、枯草菌 *sufSU* を pBBR-*Bs sufSU* の形で導入した。これらの形質転換 体を、MVA を含まない LB 寒天培地 (0.4% グルコースを含む) に植菌し、好気条件と 嫌気条件で  $37^{\circ}$ C、48 時間培養して生育を観察した。



### Fig. 26 枯草菌 sufB内のサプレッサー変異による大腸菌 ΔsufB株の相補

Error-prone PCR によって枯草菌 *sufB* にランダムな変異を導入し、pBBR ベクターにつ ないで大腸菌  $\Delta sufB$  細胞に導入した。MVA を含まない LB 寒天培地でも生育するよう になったコロニーからプラスミドを調製し、塩基配列を決定したところ、SufB の中に M312K または V354A、D376A、D387G、I464T のいずれかの 1 アミノ酸置換が生じてい た。これらのプラスミドを大腸菌  $\Delta sufB$  細胞に再導入して、その形質転換体を、MVA を 含まない LB 寒天培地で 37°C、48 時間培養して生育を観察した。



# Fig. 27 枯草菌 SufU 内の部位特異的変異の影響

pHCMC05-Bs sufU を鋳型として枯草菌 SufU 内に部位特異的変異を導入し、これらのプ ラスミドを枯草菌 $\Delta$ sufU 株に導入した。形質転換体を、MVA を含まない 2×YT complete 寒天培地に植菌し、37°C で 48 時間培養して生育を観察した。



#### Fig. 28 IscU / NifU / SufU とそれらの類似タンパク質の一次構造に基づいた系統樹

653 種類のゲノム配列(真正細菌 559 種、古細菌 55 種、真核生物 39 種を含む)から、 IscU/SufU に相同な 794 種類の配列を取得し、MEGA7 ソフトウエア内の Clustal W (Gap penalty = 4) でアラインメントして、近隣結合法 (Neighbor-joining method) で系統樹を 作成した。また、これら 653 種類のゲノム配列において、SUF マシナリーに特徴的な成 分 (SufB, SufE) または ISC マシナリーに特徴的な成分 (HscB) を BLAST 検索で調べ、 その有無を系統樹の横に記載した。生物種の略号: eco, Escherichia coli; sce, Saccharomyces cerevisiae; zin, Zinderia insecticola; avn, Azotobacter vinelandii; hpy, Helicobacter pylori; cte, Chlorobium tepidum; aae, Aquifex aeolicus; afu, Archaeoglobus fulgidus; cad, Clostridium acidurici; cau, Chloroflexus aurantiacus; hal, Halobacterium sp.; mge, Mycoplasma genitalium; atu, Agrobacterium tumefaciens; sme, Sinorhizobium meliloti; apt, Acetobacter pasteurianus; cgl, Corynebacterium glutamicum; bsu, Bacillus subtilis.

	eco		αl	) <b>TT</b>	β1	β2	β3
Group		1	10	20	30	40	5 <u>0</u>
1a 1a 1b 1b 1c 1c 1c 2a 2a 2c 2b 2b 2b 2b	eco sce zin avn hpy aae afu cad hal afu cad hal sme apt cgu bsu	MLPVITRFARPALMAIRPVNAMGVLRASSI TKK MT MM MAKHDLVGSVLWD MAKHDLVGSVLWD MLQS GEW MSF MD MD MD MD MD MD MTQTVPDSDA MNLEQ MSFNANLDT QQ	$\begin{array}{l} \begin{array}{l} \textbf{AY} & \text{SEKVIDH} & \text{Y}\\ \textbf{LY} & \text{HPKVIEH} & \text{Y}\\ \textbf{LY} & \text{HPKVIEH} & \text{Y}\\ \textbf{SEKVKEHFY}\\ \textbf{C} & \text{SEKVKEHFY}\\ \textbf{AY} & \text{SEKVLDH} & \text{F}\\ \textbf{HY} & \text{SEKVLDH} & \text{Y}\\ \textbf{HY} & \text{SEKVEHFY}\\ \textbf{HY} & \text{SEKVHEHFY}\\ \textbf{HY} & \text{SEKVHEHFY}\\ \textbf{HY} & \text{REQILEHAH}\\ \textbf{HY} & \text{RQUILDH} & \text{Y}\\ \textbf{HY} & \text{REVIEHAH}\\ \textbf{HY} & \text{RQUILDH} & \text{Y}\\ \textbf{HY} & \text{NRILEFA}\\ \textbf{IY} & \text{NRILEFA}\\ \textbf{HY} & \text{RQUILDH} & \text{Y}\\ \textbf{H} & \text{QEVUEHAH}\\ \textbf{HY} & \text{QEVILDH} & \text{Y}\\ \textbf{H} & \text{QEVUEHAH}\\ \textbf{HY} & \text{QEVILDH} & \text{Y}\\ \textbf{H} & \text{QEVUEHAH}\\ \textbf{HY} & \text{QEVILDH} & \text{Y}\\ \textbf{H} & \text{QEVUEHAH}\\ \textbf{HY} & \text{QEVEHAH}\\ \textbf{HY} & $	KPRNVGSFDNND. HPRNVGSLDKKL KPKNAGAVEGA NPTHLGVITEQAKAN SPKNVLOGNDTS NPRNVGVLDA NPRNVGKIEDA NPRNVGEIQDA NPRNVGELPAPT NPRNVGELPAPT NPRNVGELPAPT NPRNVGELPAPT NPRNVGELPAPT NIPLGVLDAD NIPRLGVLDAD NIPRLGKLAPS NPRNKGVLNDS	. ENVGSGMVGÅPAC . PNVGTGLVGÅPAC . RKIGTGSPSC NAIGDVGŠLSC KNAKLIVADYGÅEAC . AFDGVGMEGNLQC . DGVGVCGNPAC . DGIGEVGNAKC . U. IREERNPLC SAEKHSKLC 	GD VM KLQ IKV GD VM KLQ IKV GD VM KLQ IKV GD AURLTLKV GD AM LFTIKV GD AM LFTIKV GD LM TIYIKV GD LM TIYIKV GD LM TIYIKV GD LLFD VAL GD ELFD VAL GD ELFFNIGLNI GD KLKVYLKV GS KLVYLKV GD KIRVD IAL GD ELTLVKL GD ELTLVKL GD ELTLVKL	ND.EGJIEDARF NDSTGVIEDVKF Y.KGJIKNIRF DPETDVILDAGF DESTDRIVDAKF DESTDRIVDAKF NPENDVIEDVRF DDNVIIDVKF DDDGEIAHVAF DKN.KITAIGF EDG.TVTAPSH DSD.VVIDPAH DSD.VVIDPAH DSD.VVIDFAH DAT.HIQSVRH SEDGSTVEDVSV .LDGDIVEDAKF
	eco	$\xrightarrow{\alpha 2} \qquad \alpha 3 \\ \xrightarrow{\alpha 3} \\ 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 $	α4 22222		η1 <u>0000000000000</u>	α5 2020202020	22
Group		60 <u>70</u> 80 <u>90</u>			100 110	120	
1a 1a	eco sce	KTYGGGSAIASSSLVTEWVKGKSLDEAQAIKNTD KTF <mark>GC</mark> GSAI <mark>ASSSYM</mark> TELVQ <mark>G</mark> MT <mark>L</mark> DD <mark>A</mark> AK <mark>I</mark> KNTE	IAEELE IAKELS		LPPVKIHCSILAE LPPV <mark>KLHC</mark> S <mark>ML</mark> AE	DAIKAAIADY D <mark>AI</mark> KA <mark>AI</mark> KDY	KSKREAK KSKRNTPTMLS.
1a 1b	zin avn	KTY <b>GC</b> GSAI <b>ASSYLT</b> TKI <b>I</b> KNRT <b>I</b> EETLL <b>I</b> KNLD QTF <b>GC</b> GSAI <b>ASSSAL</b> TEM <b>V</b> K <b>G</b> LT <b>L</b> DE <b>A</b> LK <b>I</b> SNQD	IANFLL		LSPI <b>KIHC</b> S <b>IL</b> AE .GLPPE <b>KMHC</b> S <b>VM</b> GR	EVIKFSIKNY EALQAAVANY	YYKNNYKYDY RGETIEDDHEEG
1b	hpy	KSF <mark>GC</mark> GTAI <mark>ASSDMM</mark> VELCLNKRVQDAVKITNID	VERGLRDDP.	DT	PAVPGQ <mark>KMHC</mark> S <mark>VM</mark> AY	DVIKKAAGMY	LGKNAEDFEEEI
10	aae	KTF <b>GC</b> GSAI <b>AVSSML</b> TEM <b>V</b> K <b>G</b> KP <b>I</b> QY <b>A</b> LN <b>L</b> TYKD	IFEELG		.GLPPQ <b>KIHC</b> TNLGL	ETLHVAIKDY	LMKQGRVEEASK
1c 1c	cad	CIFCCAAAIATSSMAIEMAKGKIIEEALKIIKDA KTF <mark>GC</mark> GSAI <mark>ASSSMA</mark> TEM <mark>I</mark> K <mark>G</mark> KT <mark>I</mark> KE <mark>A</mark> LE <mark>F</mark> TNKA	VVEALD		.GLPPA <mark>KIHC</mark> S <mark>VL</mark> AE	QAVKSALIDY	AKKNNIDIPELE
2a 2a	cau hal	SGR <b>GC</b> AISQ <b>ASASLL</b> TEA <b>I</b> K <b>G</b> MP <b>V</b> AA <b>A</b> KQFSKDD RGD <b>GC</b> AISQ <b>ASASML</b> SEE <b>L</b> P <b>G</b> MT <b>L</b> AE <b>V</b> DA <b>L</b> DRDD	LLDLIG	IP	LAHNPT <b>RLKC</b> A <b>LL</b> SL VTPM <b>RIKC</b> A <b>VL</b> SE	K <b>AL</b> KA <mark>GL</mark> YGV K <b>VV</b> QD <b>GA</b> EIY	SQMDEDM TGDGDEADRTTT
2a	mge	DGDGCIISTIATELSIKAIENKTINQAKKILSDL	IATYKDKN	.SANQVVEELKLLIE	MNVTEK <mark>RLQC</mark> L <b>LL</b> TP	SNLLQWFKNF	EGRPALNUAG
2c	sme	DVKACALGQASSSIMARHVVGAHADEIRQAREDM	LAMLKADG	EGPSDRFEDMRFLKP	VKDYKA <mark>R</mark> HAST <b>ML</b> TF	DAVVDAI GÕI	EARRLAAAV
2b 2b	cgl	EAV <mark>GC</mark> SISQ <mark>ASTSVM</mark> AEE <mark>I</mark> V <mark>G</mark> QP <mark>V</mark> DK <mark>A</mark> LE <mark>K</mark> LTEF	EKMI <mark>V</mark> SRG.QI	VGDEDLIGDGVAFSG	VAKYPA <mark>RVKC</mark> A <b>LL</b> GW	KAFQAATADA	VAHAH
2b	bsu bsu	EGE <b>G</b> SISM <mark>ASASMM</mark> TQA <mark>I</mark> KGKDIETALSMSKIF → 00000000000 000000000000000000000000	SDMMQG.KI 000000	TT 000000	VSKFPA <b>RIKC</b> ATLSW 00000000	K <b>AL</b> EK <b>GV</b> AKE 0000000	EGGN
		α2 α3		α4	0.5	5	
Group	eco						
1a	eco						
1a 1a	sce zin						
1b	avn	ALICKCFAVDEVMVRDTIRANKLSTVEDVTN	YT.KAGGGCSA	CHEAIERVLTEELAA	RGEVFVAAPIKAKKK	VKVLAPEPAP	APVAEAPAAAPK
1c	cte	VQARTVCQCMNVTDHDIEEAVLEGAR.TFYELQE	HT.KISTVCG	CREDAENELQKYIHL:	HFGS	LKAIANKS	QSGELAFKE
1c 1c	aae afu	IPDCYEEEEEQEESKE ELGLEKELEK.MEKGE	FEFLSGT MD.DHGEYCE				
1c	cad	KFELIDDED	LH.AHGHDEE				
2a 2a	hal	EDDA					
2a 2c	mge atu						
2c 2b	sme						
2b	cgl						
2b	bsu bsu			•••••			
Group	eco						
1a -	eco						
1a 1a	sce zin						
1b	avn	LSNLQRIRRIETV.LAAIRPTLQRDKGDVELIDV	DGKNVY	KLTGACTGCQMASM.	TLGGIQQRLIEELGE	FVKVIPVSAA	AHAQMEV
1c	cte	WIWAAKIKWANKAIDENIKKWUMDGGDFEIPDI	VEPODITOAI	LKIMGACDGCMSATTG		91KAPL1	
1c 1c	aae afu						
10	cad						• • • • • • •
2a 2a	cau hal						
2a 2c	mge atu						
20	sme						
2b 2b	apt cgl						
2b	bsu bsu		•••••	•••••			

### Fig. 29 IscU / NifU / SufU とそれらの類似タンパク質の一次構造の比較

これらの配列は、Clustal Omega でアラインメントした。保存された残基を赤、類似の残 基を黄色で示している。また、大腸菌 IscU と枯草菌 SufU の二次構造を、それぞれアラ インメントの上下に、らせん (α-ヘリックス) と矢印 (β-ストランド)で示す。生物種 の略号は Fig. 28 に同じ。



### Fig. 30 SufB の一次構造の比較

Clustal Omega を用いてアミノ酸配列のアライメントを行い、保存された残基を赤、類似 の残基を黄色で示す。大腸菌 SufB の二次構造は、配列の上にらせん (α-ヘリックス) と矢印 (β-ストランド) で、また SufB の機能残基を赤三角で示す。SufB の種特異性を 変化させるサプレッサー変異のうち、枯草菌 SufB 内のものを緑三角、大腸菌 SufB 内の ものを青三角で示す。生物種の略号: Ec, Escherichia coli; Se, Salmonella enterica; Sf, Shigella flexneri; Ma, Microcystis aeruginosa; Bs, Bacillus subtilis; Sa, Staphylococcus aureus; Mm, Methanosarcina mazei.



#### Fig. 31 SufC の一次構造の比較

様々な生物種の SufC と 3 種類の ABC-ATPase (HisP、BtuD、MalK) ならびに SMC タ ンパク質である UvrA の一次構造について、Clustal Omega を用いてアライメントを行っ た。保存された残基を赤、類似の残基を黄色で示す。また SufC の必須残基を赤三角で、 二次構造をらせん (α-ヘリックス) と矢印 (β-ストランド)で示す。保存されたモチー フは配列の下に示している。生物種の略号は Fig. 30 に同じ。



#### Fig. 32 SufD の一次構造の比較

Clustal Omega を用いてアミノ酸配列のアライメントを行い、保存された残基を赤、類似 の残基を黄色で示す。大腸菌 SufD の二次構造は、配列の上にらせん(α-ヘリックス) と矢印(β-ストランド)で、また SufD 必須残基を赤三角で示す。生物種の略号は Fig. 30 に同じ。





#### Fig. 33 種の壁を越える SufB 内のサプレッサー変異

- A. 枯草菌 SufB におけるアミノ酸の置換部位:枯草菌 SufB のホモロジーモデリングは、 大腸菌 SufBCD 複合体 (PDB ID: 5AWF) 内の SufB の構造に基づいて、SWISS-MODEL サーバー (https://swissmodel.expasy.org) を用いて行った。大腸菌の SufB 欠 損を相補できるように変化したアミノ酸の置換部位をスティックモデルで示す。
- B. 大腸菌 SufB におけるアミノ酸の置換部位:大腸菌 SufBCD 複合体の結晶構造において、枯草菌の SufB 欠損を相補できるように変化したアミノ酸置換を緑のスティックモデルで示す。また、A の枯草菌 SufB 生じたアミノ酸置換に対応する部位を赤いスティックモデルで示す。


## Fig. 34 IscU / SufU / SufE の立体構造の比較

大腸菌 IscU (PDB ID: 3LVL)、枯草菌 SufU (PDB ID: 2AZH)、大腸菌 SufE (PDB ID: 1MZG) の構造をリボンモデルで示す。IscU で Fe-S クラスターに結合する残基、SufU で亜鉛に 配位する残基、SufE で硫黄を結合する残基をスティックモデルで示している。



Fig. 35 SufB において SufE または SufU との相互作用が予想される領域の構造比較

大腸菌 SufB の結晶構造(緑)と枯草菌 SufB のモデル構造(ピンク)を重ねて、β-ヘリ ックスコアドメインのN末端側の領域を示した。この領域において、大腸菌 SufB では Cys254 が SufE からの硫黄原子を受け取る残基である。大腸菌と枯草菌で保存されてい る残基をスティックモデルで示す。



## Fig. 36 枯草菌の SufU と SufS における Zn 配位子の置換を介した相互作用

枯草菌 SufU 単体の構造(左、PDB ID: 2AZH) と SufS-SufU 複合体構造(右、PDB ID: 5XT5) との比較。SufU の Cys41 は単体では亜鉛に配位しているが、SufS との会合時に はこれに代わり SufS の His342 が亜鉛に配位することで、両者の結合に寄与している。 Cys41 は亜鉛から離れることで、フリーな -SH の状態で動くことができるようになり、 SufS の Cys361 から硫黄原子を受け取れるようになる。論文 (Fujishiro *et al.*, 2017) より 改変。



## Fig. 37 枯草菌の SUF 様マシナリーの作動モデル

枯草菌の SUF 様マシナリーでは、SufU が SufS システイン脱硫酸酵素から SufBCD への硫黄転移タンパク質として機能する。Fe-S クラスターは、SufBCD 複合体上に組み立てられる。



## Fig. 38 IscU / SufU タンパク質の分子進化と Fe-S クラスター生合成系の変遷

IscU と SufU のサブファミリーは、進化の初期段階で分岐した後、Group 1 は Fe-S クラ スターの新規形成部位として、Group 2 は硫黄のキャリアタンパク質として、独自の機 能を持つように進化してきたと推定される。単系統ではなく、複数の系統から生じたサ ブグループは点線で示している。SUF 様マシナリーにおける SufU の硫黄キャリアとし ての役割は、いくつかのバクテリアの系統 (α-、γ-プロテオバクテリアと一部のシアノ バクテリア) で SufE に置換した可能性が高い。 本書は、埼玉大学理工学研究科分子統御研究室の高橋康弘教授、藤城貴史助教、東 京農業大学農学部の朝井計教授のご指導の下、実施した研究をまとめたものです。高橋 教授には、実験の基礎、論理、論文の執筆方法などの親切丁寧なご指導にとどまらず、 研究生活など多方面で支えていただき、人間としても成長する機会をいただきました。 朝井教授には、枯草菌等の実験材料の分譲だけでなく、実験から研究生活に関すること まで多くのご助言を何度もいただきました。藤城助教には、化学、構造生物学の分野か らの多くの的確なご助言、励ましの言葉をいただきました。心より厚く感謝申し上げま す。また、本研究を行うにあたり、東京大学生物生産工業研究センターの葛山智久准教 授には、放線菌 MVA 経路の遺伝子群(プラスミド pBMV4、pUMV22)を提供してい ただきました。学会等では、毎度、ご助言や励ましの言葉をいただきました。深くお礼 申しあげます。

分子統御研究室立ち上げと同時に始まった、この枯草菌 Fe-S クラスター生合成系に 関する研究プロジェクトには多くの学生が関わってきました。研究室の先輩方が積み重 ねてきてくださった研究の礎、また、後輩の皆さんとの議論・試行錯誤があったからこ そ、このようにまとめることができました。また、旧遺伝情報研究室の皆様には、日々、 多くの議論、助言、叱咤激励の言葉をいただきました。本当にありがとうございました。

最後に、これまで私を様々な面で支えてくれた友人、両親をはじめとする家族の皆 に(一員である犬、猫にも)、心より感謝します。

横山 奈央

144